COBALT-SERIES

天の支配者

罠は、蜜の味

前田珠子

集英社

COBALT-SERIES

天を支える者

罠は、蜜の味

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

天を支える者

罠は、蜜の味

前田珠子

集英社

目　次

天を支える者　罠は、蜜の味
罠は、蜜の味 …… 7
それは初夏の蒼穹（そうきゅう）の下 …… 127
あとがき …… 197


ガスカール
ナルレイシアの護衛を
仰せつかった青年公爵。
彼女とは犬猿の仲――!
ナルレイシア
「不幸中の幸いの権化」と
呼ばれる本好き少女。
世界を支える「柱神」さまを
選ぶ「選定者」でもある!


スカルトード
超絶美形の青年にして
ナルレイシアとは「本の
虫同盟」の仲間！
ファティ・リンシャ
ナルレイシアが奉公する
魔法屋敷の女主人。
神々しい力を持つお方。
登場人物紹介

イラスト／明咲トウル

罠は、蜜の味

プロローグ

ディエーン王都ロスタロイドに、秋風が吹くようになったころ、多くの職人が工房を構える西区の道を、見るからに重そうな包みを抱えて歩く少女の姿があった。

艶やかな金髪を、ふたつに分けて結い上げ、一部を垂らしているのは、ロスタロイドでは珍しい。地方から出てきて間もないのか、あるいはよほどその髪型が気に入っているのか、どちらかだろう。

重そうな荷物を持っているにも拘わらず、足取りは軽い。けっこうな力持ち——と言えるかもしれない。

もしも彼女が、上流の少女が纏うような、布地をたっぷり使った衣装を身につけた上で、その荷物を抱えていたら、周囲は違和感を覚えただろうが、彼女が着ているのは、動きやすい上下に、両脇に深い切り込みが入った、丈の長い上着だった。よくよく見れば、生地も仕立ても上等であることがわかるのだが、一見したところ、この近辺では珍しくない格好であり、周囲の目を引くことはなかった——そう、格好では。

しかし、実際のところ、彼女は目立っていた。

風変わりな髪型だけのせいではなく、思わず振り返りたくなる綺麗な顔立ちと、美しい黄玉の双眸のために。

そう、彼女は美少女だった――ただし、本人は、厄介な状況に追い詰められた時以外、その事実を思い出すことはないのだが。

少女の名はナルレイシア。

十七歳になった彼女は、秋風が吹くロスタロイドの街を、幸せいっぱいの笑顔で歩いていた――向かう先は、書物の修繕を専門に請け負っている工房で、これから破損した書物を持ち込む予定なのだ。

誰もが美少女だと太鼓判を押す容姿に恵まれた彼女の好きなものは、楽しいお喋りや綺麗な服や恋ではなく、知識と喜びを与えてくれる本だった。

彼女は……とびきりの『本の虫』なのだ。

1

「じゃあ、十日後に取りに来ますから、よろしくお願いしますね」
笑顔で工房を後にしたナルレイシアは、目下幸福な日々を満喫中だった。
故郷で広められた悪い噂のため、居場所をなくしたも同然に、知り合いのツテを頼りにこのロスタロイドに来て、一年が経つ。
彼女が本の虫であることをよく知る知り合い——というより、彼女をそうした元凶とも言えるのだが——が紹介してくれた働き先は、蔵書の量、質ともに素晴らしいとしか言いようのない環境で、彼女をすぐに幸福にしてくれた。
しかし、幼いころから『不幸中の幸いの権化』と呼ばれるほど、悪運と凶運と強運に愛されてきた彼女は、その幸福を噛みしめる間もなく、とんでもない騒ぎに巻き込まれてしまったのだ。
世界の天と地との間——『空』を支える柱神という存在の、新たなひとりが誰であるのかを見極めるという大役を押しつけ……もとい、務める羽目……いやいや、まあ、そういうことに

なってしまった。

おかげで、そのお役目を何とか果たせた今年の春までは、正に波瀾万丈としか言えない日々を送ることになったのだ。

このディエーンを守る、新たな柱神を見極めるにあたり、賄賂攻めにあったり、脅迫を受けたり、攫われたり、汚名を着せられそうになったり、最後に殺されそうになった時には、平穏な日々に勝るものはないと、しみじみ思ったものだ。

それでも、一応の決着がついたおかげで、ナルレイシアは夏の間は本に囲まれた楽園の日々を味わうことができた——いや、よくよく思い返してみれば、あまり平穏とは呼べない出来事もあったにはあったのだけれど。

少しばかり暗い記憶に引きずられかけたナルレイシアは、振り切るようにぶんぶんとかぶりを振った。

（終わったことよ、終わったこと！　昔から言うじゃないの、終わりよければ全てよしって！　あ、……あんまり、終わってないけど……）

自身を鼓舞するために考えたことだったのに、また違う問題を連想してしまい、今度はかなり落ち込んでしまった。

（実は全然終わってないって、どういうことよ……）

そう、問題はまだ山積み状態なのだ。

正に千里の道――いや、確実に同じぐらい大変そうな問題が三つあるから、三を掛けて三千里かもしれない……。

（うわー、落ち込むー）

思わず肩を落としてしまった時、彼女の名を呼ぶ声が聞こえた。

「なーに、通りで百面相してるんだい？　見てる分には面白いけど、年頃の乙女としちゃあ、ちょっと考えたほうがいいと思うよ？」

そう言って、肩に手を置いたのは、この区域からは少々離れた地区で、『踊る赤馬亭』という食堂兼宿屋を経営している若い女将――ランディータだった。

「ランディータさん、お久しぶりです！」

思いがけなく知り合いに出会えたことで、ナルレイシアの鬱屈は霧散した。

ロスタロイドに出てくるなり、お世話になったその女性のことが、彼女は大好きだったのだ。

「今日はまたどうしたんだい？　また、ファティ・リンシャのお使いかい？」

並んで歩きながら、問いかけてくる十ばかり年長と思しき美女の言葉に、ナルレイシアはこ

くりとうなずいた。

「書庫の中身を調べてたら、一見そうは見えないけれど、結構傷んでる本が見つかったんですよね。自分で直せるかな、と思わないでもなかったんですけど、よく見たら、驚くぐらいに古い本で、失敗したら取り返しがつかないと思ったものですから、行きつけの工房に持ち込んで、修繕をお願いしてきたところなんです」

淡い金髪に褐色の肌という、北と南の血が見事に融合した美女は、あっけらかんとした性格そのままの、豪快……否、朗らかな笑い声を上げた。

「そりゃそうだ！　確かにそんなことにでもなったら、少なくともあの無駄に綺麗な本の虫は黙ってないだろうからね！　どんなに猫を被っても、怒り満々な目を向けてくるに決まってる」

ランディータの言うところの『無駄に綺麗な本の虫』とは、ガライラ大公国の柱神の縁者である青年――スカルトードのことだ。

出会って以来、同じ本の虫同士として、親交を温めてきた間柄であるのだが、それだけに書物の管理や扱いにはとことんこだわる性格であることもわかっている。

「やめてくださいよー。想像しただけで背筋が寒くなっちゃうじゃありませんか」

間違っても、本に関わることで、彼の逆鱗にだけは触れたくない――そう思う程度には、ナルレイシアも彼の奥底に潜む恐ろしい一面に気づいていた。

「はは。あんたなら、大丈夫だって。この間も、スカーのやつ、あんたの修理した本のこと、褒めてたからねー。今度、自分とこのも頼みたいぐらいだって言ってたよ？」

「本当ですか!?」

ランディータの言葉に、胸の奥がじぃん、と熱くなるのを感じるナルレイシアだった。

そんな彼女に、年上の女性は呆れたように肩をすくめた。

「まったく、いい年した男女が、本にばっかり夢中ってのはどうよ。スカーは立場上、あれこれ着飾る機会もあるからともかくとして、ナルレイシア、あんた、いくら動きやすいからって、その格好はなんだい？　なにも極楽鳥みたいに派手にしろとは言わないけどねー」

見るからに豪華な美女は、女将として店で立ち働くときこそ、身軽さ重視の服を着ているのだが、外出する際はかなり気合いの入った格好をしていた。

今も、褐色の肌が引き立つ白いブラウスの上に、金糸の縁取りのある鮮やかな朱色の上着を羽織っている。何カ所にも渡って入っている上着の切れ込みから覗くのは、漆黒の薄絹――彼女が歩く度、ふんわりとヒダが揺れるさまが実に美しい。

「えー、と。いえ、今でこそ手ぶらですけど、行きは大荷物抱えてたもので、変にひらひらした服着てたら、危ないと思ったんですよ。ほら、この前の大嵐のせいで、けっこう石畳とか剝がれたじゃないですか。この地区、まだ完全に舗装し直されてませんし」

慌てて言い訳すると、ランディータは遠い目をして「ああ、あの大嵐ね」とつぶやいた。

先日ロスタロイドを襲った大嵐に関しては、彼女もまた感じるところがあるのだ。

「それはそうと、用事が終わったってんなら、後は帰るだけかい？　だったらつきあわないかい、最近この先に、美味しいと評判の菓子店が出来たんだ。何でも貴族お抱えの菓子職人の弟子が開いた店だってんで、包装も凝ってて人気らしい」

酒も出す店の女将でありながら――いや、だからこそだろうか――ランディータは大の甘党だった。

そして、年頃の少女としておかしくない程度には、ナルレイシアもまた菓子には目がなかった。

「美味しいお菓子……」

こくん、と思わず喉が鳴ってしまうぐらい、その誘惑は甘美だった。

（あんまり高価だと、大きな箱入りとかは買えないかもしれないけれど……ファティ・リンシャにお土産に買って帰るのもいいかも……）

なにより、貴族お抱え菓子職人の弟子――というのが大きかった。

かつて斎王院で出された菓子は、皆例外なく美味しかった。ただ、当時はあれこれ悩むことが多くて、ゆっくり味わえなかったことだけが心残りだったのだ。

（あの水準には及ばないかもしれないけれど、充分美味しいに違いないわ）

思った瞬間には、「ご一緒させて下さい」と口にしていた。

「そういうとこだけは、スカーと違ってて嬉しいよ。じゃあ、行こうか」

笑顔で促され、歩き出したナルレイシアは、しかしその店の近所で、思いがけない人物の姿を目にし、刹那、凍り付いた。

「ナルレイシア、どうかしたのかい？」

怪訝に思ったらしいランディータが問いかけてくるのだが、とても答えられなかった。

彼女の見つめる先には、栗色の髪の青年が、数人の女性に囲まれて歩いていた。ガスカールやスカルトードほどではないが、それなりに長身で、甘く整った顔立ちと、身につけている上質な生地の上下を隙なく着こなす姿は貴公子然としていた。

中身は——貴公子とは到底呼べない人物なのだが。

ナルレイシアの視線に気づいたのか、不意にその青年が振り返った。

そして、彼女を認めるなり、小さくはない驚きに、榛の双眸を瞠らせた。

間違いなかった。

それは、ナルレイシアが故郷にいられなくなった元凶——彼女に袖にされたのを逆恨みし、ないことないこと吹聴し回ってくれた、オーブエル男爵令息ニドヴァールだった……。

（そうだった……）

深い後悔とともに、ナルレイシアは思い出した。

故郷のフィレアで、行儀見習いの名目で、オーブエル男爵家に住み込んでいたころ、都に遊学中だというニドヴァールが夏の長期休暇で帰省したのが、彼女にとって災難の始まり――いや、『不幸中の幸いの権化』という異名で呼ばれるようになって久しかった彼女にしてみれば、そうと言い切るのもナニなのだが――だった。

甘い顔立ちに、都風の洗練された――いまなら、あれが付け焼き刃だったとわかる――物腰の男爵家のひとり息子に、近隣の少女たちは皆夢中になった。

例外だったのは、彼より、男爵家の蔵書に魅力を感じていたナルレイシアぐらいだった。

しかし、どういうわけか、恋をささやく相手には困っていないはずのニドヴァールは、彼女を一夏の恋の相手に選んだようなのだ。

しつこく、しつこく口説かれ続かれながら、それでもナルレイシアがはっきりと拒絶しなかったのは、前述の通り、男爵家の蔵書読みたさゆえだった。屋敷内の一切を取り仕切る男爵夫人は、ひとり息子のニドヴァールを溺愛しており、彼の言葉次第では、書庫出入り禁止令が出されてもおかしくない状況だったのだ。

（夏の間だけ！　この勘違いした馬鹿君が屋敷にいるのは夏の間だけなんだから、その間、かわしきれれば大丈夫！）

当時、ナルレイシアは呪文のように、胸中でそう繰り返していた。

しかし、自分に心奪われない女性はいないと勘違いしている馬鹿君は、休暇も大半を費やしたころ、ついに焦れて実力行使に出ようとしたのだ！

師匠から教えられた護身術で反撃したのは、唇を奪われる寸前のことだったが、ニドヴァールが最後まで突っ走るつもり満々であったことは間違いない。恋愛経験の少なさ——正直に言うなら皆無同然だが——と、身の危険を察知する本能とは別物なのだ。

ニドヴァールが本当の貴公子であったなら、強引に過ぎた自らの態度を反省したことだろう。しかし、矜持ばかりが無駄に高い彼が選んだのは、未婚の女性に対しては、致命的とも言える噂を用いてのナルレイシアへの復讐だった。

彼は自分を溺愛している母親に、事もあろうにナルレイシアに誘惑されたと告げたのだ！

息子の言い分をかけらも疑わない男爵夫人は果たして激怒し、彼女を屋敷から追い出すと同時に、フィレアのあちこちで、親子ふたりで悪い噂を振りまいてくれたのだ。

ナルレイシアの父であるリンレイドは、それなりに名の知れた商会の社主なのだが、その功績は故郷ではなく他国で広く知られている人物だったため、醜聞から娘を守ることができなかった。

結局、ナルレイシアは故郷では、嫁ぎ先を見つけることもできないほどの痛手を受け、このロスタロイドにやって来ることとなったのだ。

事態の深刻さを、頭ではわかってはいても、しっかり認識できていたとは言えないナルレイシアは、師匠に紹介されたファティ・リンシャの屋敷での生活に大満足だった上、その後国すら揺るがす大騒ぎに巻き込まれたものだから、すっかり忘れていたのだ……が。

（そうだった……そうだった！　都に遊学中ってことは、このロスタロイドにあの馬鹿君も住んでるってことだったんじゃない！　いつ顔を合わせてもおかしくなかったのに、わたしったら、今の今まで忘れちゃってたわーっっ！）

人間が忘却を友としている以上、これは仕方のないことかもしれないが――と、彼女は勝手に思うことにした――この再会が、両者にとってあまり良いものでないことは確かだった。

その確信は、ほどなく証明された。

しばしの驚きから醒めたニドヴァールは、とんでもない爆弾を投げつけてくれたのである。

2

「悔しい、悔しい、悔しい！」

宿の備品である枕を、力一杯引き裂いているのは、怒り狂ったナルレイシア――ではなく、この店の女主人であるランディータだった。

ニドヴァールとの再会を果たした翌日の『踊る赤馬亭』での出来事だ。

前日、「絶対に来ること！」と念を押されて訪ねたナルレイシアのそばには、同じくランディータに呼び出されたと思われる男性ふたりが座っていた。

ひとりは、黒髪に紫の瞳を持つ、仏頂面さえなかったら――いや、そうであっても――十人中十人が二枚目だと口を揃える青年だ。その容姿のせいで、複雑な過去を持つ彼の名はエルスカーネ公爵ガスカール。

もうひとりは、緑がかった金髪に、煙るような灰緑色の瞳を持つ、人外としか思えない美貌を誇る青年だった。ガライラの柱神を大伯父に持つこの青年を初めて目にした時、ナルレイシアは「神様？」と思ったものだ。

名をスカルトード――あまり公にはされないが、実は立派な神殿上層部の人間である。ふたりも、事情は説明されないまま呼び出されたのだろう――荒れるランディータの様子に困惑を隠しきれない様子だった。

こっそりと、スカルトードがナルレイシアに訊いてきた。

「ずいぶんご立腹のようですが、ヴィル・ダカール、原因をご存じですか？」

知っているどころの話ではなかったので、「実は……」と小声で昨日のことを説明しようとしたまさにその瞬間！

ランディータの雷が、ナルレイシアを直撃した。

「そこ！　なに、他人事みたいな顔してるんだい!?　わかってるのかい、馬鹿にされたのも、ありもしない汚名を着せられたのも、全部あんたなんだよ、ナルレイシア！」

その剣幕の凄まじさに、ナルレイシアは思わず首をすくめた。

「わ、わかってますぅ……」

「わかってるんなら、ちっとは怒るとか、仕返しするとか、無理矢理相手に弱みを作ってでも踏みつぶすとかしな！」

最初の提案はともかく、どんどん物騒な内容になっていくのは、ランディータの性格か、職業柄なのか……いつもは気のいい宿屋の女将であるランディータが、実はこのディエーン王家直属の情報組織の一員であることは、この春知ったばかりのことだ。

「あー、いえ、その……わたしも腹立ちましたけど、わたしが爆発するまえに、ランディータさんが激怒なさったんで……その」

逆に、彼女を抑える方に意識が向いたせいで、怒り爆発の事態には及ばなかったのだ。

ただ、このやりとりに、スカルトードは関心を引かれた様子で、宿の女将に詳細を尋ねた。

「なにやら、ヴィル・ダカールの名誉に関わる事態が生じたようですね。ランディータ、よろしければ教えていただけませんか？」

同じ『本の虫同盟』のかけがえのない同朋として、ナルレイシアのことを大切に思ってくれているらしい青年のその問いに、ランディータは待ってましたとばかりにまくし立てた。

「ナルレイシアに言い寄って、肘鉄食らった田舎貴族のボンボンと、街で偶然出くわしたんだよ！　あいつ、ナルレイシアの格好をじろじろ観察した挙げ句、馬鹿にした顔で、話しかけてきやがったんだ！　周りに上流のお嬢さん方がいるのを意識してか、『ここまで追いかけて来たのか？』とか、『君の想いには応えられないと、はっきりと言ったはずだ』とか、果ては『悪いことは言わないから、故郷に戻った方がいい』とか抜かしやがって！　ボンボンの言葉を真に受けたお嬢さんたちがまた、『あら』とか『まあ』とか意味ありげに笑い出してっっっ！　あああ、思い出すだけで腹が立つ！」

故郷でのことについては、すでに真相を打ち明けていたため、尚更ランディータの怒りは深いのだろう。

近い思いがあるのか、スカルトードも「許し難いですね」とうなずいてくれる。
ふたりが本気で、自分のために怒ってくれているのがわかるので、もうそれだけで充分な気がしたナルレイシアだったが、同席しているもうひとりの人物のせいで、抱いていた感動は台無しになった。
「……なるほど、そうも容易く言を翻すということは、権力を笠に周囲に口裏を合わさせたということか。そういう性格の主なら、その場その場で自分に都合のいいように話を持っていくだろうな。調査員には、もっと観察力のある人物を派遣するべきだったか……」
（気にするのはそこなの!?　誤解してて悪かったとか一言あっても……ってのは、無理だとしても、もう少し違う言い方ってものないわけぇ!?）
今でこそ、少しは関係改善されたような気がしないでもないのだが、故郷での調査報告書を鵜呑みにしたガスカールのせいで、出会い以来最悪な関係が続いたことは、苦い記憶として残っている。
（そ・れ・な・の・に――――！）
あれこれ言ってやりたかった。
しかし、それよりランディータの叫びの方が早かった。
「あんな、見るからにロクでもないボンボンに、ナルレイシアが馬鹿にされ続けるだなんて我慢できなーい！」

いえ、そのお気持ちだけで充分ですから――とは、すでに言えない空気が出来上がっていることに、迂闊にも気づくのが遅れたのが、ナルレイシア最大の誤算だった。

「同感です」

いつの間にか、スカルトードはランディータと熱い握手を交わしている。

(な、なんだか、わたしの知らない内に、話がまとまってるー?)

ナルレイシアの胸中で、得体の知れない不安が見る間に広がっていく。

そして、その不安は、故ないものではなかったのだ。

「あんなボンボンに好き勝手言わせてたまるもんですか! スカー、ガスカール! あなたたちふたり、完璧に着飾って淑女に変身したナルレイシアを、完璧な紳士としてエスコートしなさい! それで、あの田舎坊主を、ぐうの音も出ないほど、踏みつぶしてやりなさい! わかったわね!」

一方的なランディータの命令に、息を呑んだのは青年ふたり――いや、スカルトードはかなり乗り気な様子だったから、除外されるかもしれないが――だけではなかった。

「え、えええっっ!?」

誰より仰天したのは、もしかしたらナルレイシアだったかもしれない――。


がしっ

着飾ると聞いて、ナルレイシアが真っ先に連想するのは、一年ほど前、しばらく滞在した斎王院で目にした女性の服装だった。

生来病弱なユーカリィヤは、医師の制止もあって身につけることはなかったが、頼みもしないのに押しかけてきた斎王たちの親族の女性は、異様に細い腰の線を強調するような衣装を身につけていたのだ。

ナルレイシアの目には、健康的なふくよかな女性が、なぜだか腰だけが妙に細く感じられ、迷惑な客人ながら「もしかして内臓を患ってらっしゃるのでは……」と、心配して洩らしたところ、世話をしてくれていた女官たちに笑われたのだ。

あれは、最近の流行なのだ、と。

細い腰こそが美女の証という不条理な流行に乗り遅れないために、一部で開発された下着を着用されてらっしゃるんです——と耳打ちされた時には、自分の耳が信じられなかった。

「だって、あれじゃあ、ものも満足に食べられないじゃないの!?」

驚いて問いかけると、最近ではそういう貴婦人が増えたため、新たに『少食こそが貴婦人の証』という、信じられない風聞まで流れるようになったというのだ。

つまり、矯正下着とは、あの異様に細い腰を作るためのもので——あの不自然な細い腰を実現するためには、いったいどれほどの力で締め上げるのかと思うと、想像するだけで背筋が寒

くなるナルレイシアなのだ。
「いやぁっ！　絶対にいや――っ！」
叫ぶ彼女に助け船を出してくれたのは、意外にも想像もしなかった人物だった。
「下らん」
本気でそう思っていること明白な口調で、ランディータの提案を一刀両断したエルスカーネ公爵ガスカールが、席を立った。
彼が、本気で言っていることがわかるだけに、（わたしってば、なによ）と思わないでもなかったが、強制（面倒くさいので、ナルレイシアは勝手にそう命名することにした）下着の恐怖に勝る苛立ちではなかったので、ナルレイシアは期待の目を向けた。
しかし……ガスカールの言葉は無情だった。
「そんな茶番につきあっていられるか。やるなら、お前たちだけでやれ」
（こいつ……自分ひとり逃げるつもりなのっっ!?）
むかっ腹を立てるナルレイシアをよそに、ランディータが「ふうん」と声を上げた。
意味深長に聞こえないでもない、情報組織員のつぶやきに、ガスカールが立ち止まり、ちらりと振り返る。
「見たとこ、だけど……あの手の男は質悪いよ。フィレアと反対のこと触れ回ってること、ナルレイシアが他人に喋らないうちに、きっとあれこれ攻撃しかけてくるね。自分の安っぽい矜

持のために、田舎じゃ一生を左右しかねない乙女の醜聞触れ回るようなやつだもの。きっとナルレイシアのロスタロイドでの暮らしのことまで調べ尽くすだろうね。当然、ファティ・リンシャのことも調べ回るんじゃないかな？　街に出かける度、うるさい尾行がまとわりついたりしたら、ファティ・リンシャも不快な思いを味わわれることになるんじゃないかと思うんだけど？」

ガスカールを動かすには、彼の養い親とも言えるファティ・リンシャかアマンシールのことを持ち出せば効果覿面だということは、ナルレイシアもわかっていたつもりだったのだが、いかんせん、今回は効果が強すぎた。

ガスカールは険しい眼差しを彼女に向けるなり「お前、やっぱり出て行け！」と叫んだのだ。

（ひ、ひど……！）

「あなたねえ！」

勢い込んで文句をつけようと、ナルレイシアが立ち上がったときのことだ。

部屋の扉を、控えめに叩く音が響いた。

「あのう」

次いで掛けられた声は、この『踊る赤馬亭』の古くからの従業員のもの。

「どうした？」

女将であるランディータの問いかけに、扉の向こうから、神妙な声が答えてきた。
「ヴィル・ダカールを訪ねて、お客が来てまして。なんでも先ほど、彼女がこの店に入るのを見ていたということで。やんわりと断ったんですが、なにやら決死の覚悟って顔したお嬢さんでねえ。フィレアのセライ家のマルルーネが来たと言えば、ヴィル・ダカールは絶対会ってくれるはずだと言い張って譲らないんですわ。それで、一応の確認を、と思いまして。金茶の髪に、緑の瞳のお嬢さんなんですが」
（セライ家のマルルーネ……）
その名を思い出すのに、少しだけ時間がかかったのは、さして親しくつきあっていなかったから、ではない。
「あー!?　もしかして、マリルアーナ・サイアリス!?」
叫んだナルレイシアの周囲の反応は冷ややかだった。
「昔馴染みを訪ねてくるのに偽名を名乗るとは、ちょっといただけないね」
「件の若君と再会したのが昨日のことです。その翌日に、偶然故郷のお知り合いが、これまた偶然ヴィル・ダカールを街で見かけて押しかけ……いえ、訪ねて来られるなど、言っては何ですが、あちらから差し向けられたという可能性は考えられませんか？　話に聞くところ、問題の若君は、ご自分の魅力を絶大視しているらしいですし？」
ガスカールだけは無言だったが、どういう心境の変化か、立ち掛けた椅子に再び腰を下ろし

た。

「あ、いえ、違うんです。マルルーネ・セライというのが本名なんですけど、彼女昔から自分の名前が平凡で気に入らないらしくて……ロスタロイドではそうでもありませんけど、フィレアではマルルーネって名前もセライって姓も実は結構多かったんです。それで彼女ったら、思いつく限り、自分の名前を変えてはわたしにそう呼ばせるという、ちょっと変な癖を持ってて……あんまりその数が多すぎたんで、咄嗟に思い出せなかっただけなんです。決して偽名を名乗ったとかいうことじゃないんで、どうか通してあげて下さい」

名前というものは神聖なもの——というのが常識のこの世にあって、マルルーネのその癖は風変わりを通り越して奇矯と呼んでもおかしくないものだったが、頑固に常識に拘ることのないその場の面々は、比較的あっさりとナルレイシアの言葉を受け入れてくれた。

若干一名ほど、これ見よがしなため息をつきながら「類は友をなんとやら……だな」などと厭味な発言をした人物が存在したが。

ともあれ、ランディータの「連れておいで」という言葉で、従業員に案内されてきたのは、ナルレイシアの記憶の中にある通りの、ちょっと風変わりな奇癖は持っているものの、見た目には年頃の男性の目を引きそうな、なかなかの美少女だった。

「ナーシア！」

ナルレイシアの姿を目にするなり、本名マルルーネ——別れた当時はマリルアーナと名乗っ

ていた――は、薄茶がかった緑の双眸に、溢れんばかりの涙をたたえて駆け寄ってきた。
「マルルーネ!?」
この幼なじみの悔し涙しか見た覚えのなかったナルレイシアは、驚きのあまり目を瞠り、思わず本名の方を呼んでしまった。
「マルルーネ、どうしたの!?」
尋ねると、彼女の瞳から、涙がこぼれ落ちた。
「マルルーネ!?」
男の子が相手でも、平気で取っ組み合いの喧嘩をするような、負けず嫌いだった彼女にいったいなにが――と思った瞬間、ナルレイシアは襟をぎゅうぎゅうと締め上げられた。
「ナーシア！　あなたね、あなた！　オーブエル家の馬鹿息子に肘鉄食らわしたとき、どうして息の根を止めておいてくれなかったの!?」
大変な剣幕でまくし立てられ、さすがの彼女も即答できなかった。
（いや、いくら貞操の危機を感じたからって、息の根止めるのはまずいでしょ。どうせ肘鉄食らったら、プライドだけは高いあの馬鹿君は、さっさと関心なくすだろうってわかってたし）
さすがに、故郷にいられなくなるほどの悪い噂を垂れ流してくれるとまでは予想していなかったけれど――。
そんなことを思っていたナルレイシアにしがみついたまま、マルルーネは相変わらずの剣幕

でまくし立てつづけた。

「あなたがあの馬鹿男を片付けてくれなかったせいで！　イリアーナがいったい、どんな目にあったと思ってるのぉぉっっ!?」

3

イリアーナというのは、マルルーネの従姉で、ナルレイシアも何度か会ったことのある少女である。

亜麻色の髪に、淡い青の瞳の、見るからに儚げな美少女だったと覚えている。

マルルーネも美少女ではあるのだが、何事もはっきり口にする性格と、風変わりな嗜好を隠そうともしない言動もあって、フィレアではそう認識されていないところがある。名前を好みでころころ変えるあたりは、まだ『夢見がちな乙女』と好意的に受け止めることができないこともないだろうが――それでも多いときには日に三度も名を変えられ、その名を呼び間違える度に手の甲を抓られた覚えのあるナルレイシアとしては、あまり同意できない――彼女が年頃の同性及び異性から、決定的に避けられる理由は、彼女の異性に対する嗜好条件が、あまりにも特殊であるからだ。

すなわち、彼女にとって恋愛対象と見なせる異性とは、人生経験に富んだ、四十代以降の、しかも社会的実績を持つ人物に限られるのである。出会ってまだ間もないころ、自分の父にマ

ルルーネがやけに熱い眼差しを向けていることに気づいたときには、詳細はわからないものの、やけに焦ったものだった。

その後、彼女の好みはさらに渋みを増し、熱い視線が向けられる先も変わったことで、一応安堵したものだが……いや、話が逸れた。

まあ、その渋すぎる好みさえなければ、いまごろ複数の男性に求愛されていてもおかしくない美少女であるマルルーネの従姉は、やはり相当な美少女で、しかも慎ましやかな性格と、妙な嗜好の持ち合わせもない分、年頃の男性にとっては非常に魅力的な存在なのだ。

そのイリアーナが。

よりにもよって。

あの馬鹿君――オーブエル男爵家のひとり息子ニドヴァールの毒牙にかかってしまったというのである！

しかも、現在その子を妊娠中というのだから、驚くしかない。

「聞いてよ、ナーシア！　あの馬鹿男ったら、イリアーナの世間知らずにつけ込んで、口説きまくったのよ！　けど、なかなかイリアーナが落ちないと見て、後ろ抜け道を指摘して逃げ出せるよう細工した、結婚を約束する念書まで用意したの！　イリアーナはわたしみたいに渋い趣味じゃないし、なによりそこまでも誠意を見せてくれるのなら……と、ほだされたというか、ころっと騙されたのね」

自分のときは、そこまで手のこんだ方法を取らなかったことを思い出すだに、本当につまみ食い程度の関心しか持たれていなかったのだろうな――と、冷静に判断した瞬間、それはそれでちょっとむっとするものを感じたナルレイシアだった。

好かれて迷惑だと思ったのは、掛け値なしの本音だったはずなのに、人間の感情というものはなんとも複雑怪奇に出来ている。

しかし――だ。

（抜け道を用意した上で、結婚の念書を出すだなんて……悪質すぎるわ）

自分の趣味ではないとはいえ、確かにニドヴァールは、年頃の娘には好意を抱かれるに充分な容姿と背景の持ち主である。

そんな彼に情熱的に口説かれ、本気の証とばかりに結婚を約束する念書を差し出されれば、多少なりとも好意を抱いている娘なら、ぐらりと傾くに違いないのだ。まさか、真心の証として差し出された念書に、最初から抜け道が用意されているだなんて、一体誰が思うだろう。

「……まあ、ね。騙されたイリアーナだって馬鹿だとは思うわよ？　でもねえ、でも。妊娠したことがわかって、驚きながらも祝福してくれるに違いないと信じた男に、開口一番『わたしの子とは限らない』なんて、そこまでひどいこと、言われなくちゃいけないようなどんな悪いことをイリアーナがしたっていうの!?」

聞けば聞くほど惨い話だった。

その場に同席していた全員の心の声が重なる。

（（（最っ低！）））

「伯父としても、娘の一生の問題だからって、オーブエル男爵家に食らいついたのよ？　ところが、あそこの息子溺愛しまくりーの、両目にいったい何枚鱗貼り付けてんだかわからないバァったら、相変わらず馬鹿息子の言うことまるごと信じこんだ挙げ句、『わたくしは息子を信じますわ。結婚の儀式も終えない内に、子を宿すような女性が当家の嫁に相応しいとは思えませんし、なにより次代のオーブエル男爵家の当主である息子が、爵位もない家の娘に、軽々しくそのような約束をするはずがありませんもの』と言ったのよ！」

その先の展開は、聞かずともわかった。

なにしろナルレイシアは、似たような事例の経験者である。

きっと夏の間中、あの親子はひとに会う度、イリアーナの悪い風評を立てつづけたに違いない、ナルレイシアの時と同様に。

ただ、ひとつ違うのは、ナルレイシアは貞操という部分では被害を受けずにすんだのだが、イリアーナはそうではないということだ。しかも、些細なことが体調を左右すると言われる妊娠中の身――思わず心配になって、ナルレイシアは尋ねた。

「それで……イリアーナは大丈夫だったの？　いえ、もちろん、精神的には全然大丈夫じゃなかったことはわかるけど……」

「もちろん、身体的にもちっとも大丈夫じゃなかったわよ！　可哀想に、絶望のあまり、流産しかかって、一時は命も危ぶまれたぐらいなんだから。なんとか母子共々命は取り留めたけど、ふしだらな娘呼ばわりされて、イリアーナは今じゃ屋敷から一歩も外に出られないありさまよ。なにもかも、あの男のせいだっていうのに、聞いたらあの馬鹿男ったら、夏期休暇が終わったとか言って、平然とロスタロイドに戻ったって言うじゃない！　もう、腹が立って腹が立って、居ても立ってもいられなくて――」

追いかけて来たのだ、とマルルーネは言った。

その言葉を聞いた瞬間、ナルレイシアはあることを確信した。

旅行用の薄手の外套を纏ったままのマルルーネに抱きつかれたとき、その内側に妙な異物感があったからだ。

マルルーネの生家は、主に食肉の生産を目的とした牧場だ。直売まではしていないが、自家産の肉で客をもてなすことも多い。当然、その台所には――。

「その心境はよーく理解できるけど……マルルーネ？　その、外套の下に隠し持ってるのって……まさか」

人間、たとえわかっていても、口に出したくないことというものはある。

「うん？　やっぱりわかっちゃった？」

そう言って、マルルーネが取り出したもの――それは。

……大変立派な、肉切り包丁だった。

激怒大爆発状態のマルルーネを宥めたのは、意外にも、先ほどまで怒り狂っていたランディータだった。

「まあまあ、可愛いお嬢さん。怒る気持ちはわかるけどね……確かに、そんな人間のクズのナニなんぞ、膾切りにしても足りないぐらいだけど、そのためにあんたが罪に問われるのは間違ってるってもんだ。善行の結果が斬首じゃあ、割に合わないだろう？」

口調は穏やかだが、言っている内容はかなりとんでもない。

ただでさえナルレイシアに対するニドヴァールの暴言の数々で、怒髪天を衝いていたのが、マルルーネの話を聞いたせいで、ついにそれすら突き抜けてしまったらしい。

その証拠に、にこやかに笑うランディータの顔は、背筋が冷たくなるような迫力に満ちている。……はっきり言って、怖い。

「だけど……このまま放っておくなんて……」

反論しかけたマルルーネだが、ランディータに見つめられた途端、言葉が尻すぼみになった——彼女もまた、得体の知れない恐怖を感じたのだろう。

そんな彼女に、ランディータは笑顔で告げた。
「誰も、放っておけだなんて言ってないだろう？　そこまで曲がった性根のやつに、正攻法なんか通じるもんか。向こうが抜け道だの裏技だのを駆使するつもりだってんなら、こっちはもっと上手く、やってやればいいんだよ」
情報組織の一員である女性は、その手の知識と経験を、惜しみなく今回使うつもりのようである。
そうして――同じ男の一員として、いたたまれなさを感じているらしい、同席しているふたりの青年に話を振る。
「ねえ、そうは思わないかい、スカー、公爵」
この場面で、否定的なことを口にしようものなら、女性陣三人の非難を買うのは必至だ――わかっていて、やるのだから、ランディータは確信犯だった。
「ええ、まあ……そんな言語道断な所行、同じ男としても許せませんし、世の中の男性が皆同じだと誤解されたくはありませんしね」
仕方なさそうな顔で、スカルトードがうなずくと、続いてガスカールも苦い顔で「その通りだ」と同意した。
（わたしのときは、てんで無関心だったくせに……それとも、まーだわたしのこと、疑ってたのかしらん？）

だったら、腹立たしい——そうナルレイシアが思った時、ガスカールが渋面で言を継いだ。
「どうせ、わたしが断ったら、直接ファティ・リンシャに話を持って行くつもりなんだろう？あのひとを、そんな下衆に拘わらせるぐらいなら、わたしがやったほうがましだ」
両親を亡くし、心を閉ざしてしまった過去を持つ彼にとって、銀髪の老婦人は、どこまでも大切な聖域なのだろう。
（確かに、あんなののために、ファティ・リンシャのお手を煩わせたくはないわ）
ナルレイシアとしても、大いに同感だったので、彼女は先ほど感じた腹立ちを忘れてやることにした。
「でも、あいつは貴族なのよ？　伯父だって、すごすご引き下がったわけじゃないわ。イリアーナが貰ったという結婚を約束した念書を、役所に持ち込んで約束の履行を訴えたんだけど、てんで相手にされなかった上、オーブエル家に逆らっても肩身の狭い思いをするだけなんだから早々に諦めろとまで言われたのよ！」
マルルーネの言葉は、フィレアを知るナルレイシアには、さもありなんと思えることだった。
フィレアにおいて、オーブエル男爵家の力は絶大なのだ。
しかし、ランディータはふふん、と鼻で笑った。
「絵に描いたような田舎貴族みたいだね。そういう輩は、普段権威を鼻にかけているだけあっ

て、逆に自分より格上の相手には、馬鹿みたいにへいこらするもんなんだよ。例えば、そこの公爵閣下の前にでも連れ出してご覧、借りてきた猫以上に大人しく振る舞うに決まってるんだから」

「それはそうかもしれないけど……たとえ、ガスカールの手前、イリアーナに謝罪したとしても、それは絶対に、あの男の本心じゃないわ。誠意のない謝罪を受けても、傷ついたイリアーナの心は癒されないと思う。……まあ、彼女の名誉が取り戻せるだけ、ましだと言われたらそうかもしれないけど……」

それではきっと、根本的な解決にはならない。

「ナーシアに賛成。口先だけの謝罪なんて、あの男はなんとも思わないに違いないもの。懲りずに同じことを繰り返すに決まってるわ。そんなの、解決とは呼べない」

「ナルレイシアもお嬢さんも、だから早合点するんじゃないって。例えば、と言っただろう、わたしは？　そうした輩の腐った性根のありようは、職業柄よーく知ってるんだ。要は、その性質を利用して、イリアーナ嬢の名誉を回復した上で、ナニをちょん切るぐらいの罰も与えてやろうって言ってるんだよ。ただ、その際には、あんたたちふたりにも協力してもらいたいんだけど……？」

最後まで聞く必要はなかった。

「もちろん！　わたしに出来ることがあるなら、なんだってします！」

「イリアーナの名誉とあの男への報復の両方がかなうなんて、言うことなしよ、何だって言ってちょうだい！」

口々に協力を約束した少女ふたりは、この先自分たちに降りかかる苦難も知らず、目を輝かせていた。

そんな彼女たちの様子を、満足げに見遣った後、「さて」とランディータが腕を組んだ。

「それじゃあ、計画を立てようじゃないか」

実に楽しそうに、彼女は宣言した。

そうして、ナルレイシアたちの目の回るような忙しい日々が始まった――。

4

ディエーンの北西に位置するガライラ大公国は、小さいながら、精霊に愛された豊かな国として有名である。

国民は大公一族を愛し、精霊たちを愛し、神々しい美貌を誇る自国の柱神を愛していた。

王族や人気の高い俳優のように、絵姿が出回るわけではないが、彼らは柱神を見誤ることはない。

人間にはあり得ない美貌の主――と聞けば、それで充分だからである。

緑がかった金髪に、煙るような灰緑の双眸――ガライラの柱神ネイスリーズは、まさに人間ではあり得ない絶対的且つ完璧な美貌の青年だった。

ガライラ大公弟宮――通称冬宮。

大公宮に次ぐ広大な宮殿の主は、ネイスリーズの不意の訪れを知るなり、客を放り出して彼の待つ部屋へ駆けつけてきた。

大公弟エリエンス。

今年四十歳になる独身の大公弟は、ガライラで知らぬ者はないと言われるほど熱心なネイスリーズの信奉者なのだ。

「ネイスリーズさま！」

公式の場においては、兄である大公を補佐する有能な政治家であるこの男性も、生まれた時からの知りあいである柱神に対しては甘えを隠さない。

因みに、「生まれた時から知っている」のは、ネイスリーズの方である。エリエンスが物心ついたころから、彼の姿は全く変わらない。

「エンス坊や。君も不惑を迎えるのだし、そんなに慌しい振る舞いを、周囲に見せるものではないよ」

一刻でも早く自分に会うために、昔から全力疾走で駆けつけてくるエリエンスの癖を知るネイスリーズは、苦笑まじりにそう諫めた——そんな彼の思いが嬉しいのは確かだが、一国の事実上の副国主が、特定の人物に会うために、血相を変えるというのは、いただける話ではない。

「わたしの歳をご存知なのでしたら、坊やという呼び方も改めて下さらなければ。貴方にそう呼ばれる度、わたしの心は幼いころに戻るのですからね」

改めて欲しいなどとはかけらも思っていないのがわかる笑顔で、エリエンスがそう返した。

「では、せめて、わたしに会いたいからと言って、訪問中の客を放り出すような真似だけはよ

しなさい……可哀想に、自分がなにか無礼を働いたのではないかと、おろおろしているよ」

柱神たるネイスリーズは、精霊という優秀な目と耳を持っている。

「無礼なら働きましたとも。その気はないと、はっきり断言したというのに、くどいまでに話を持ちかけようとしたのですから」

ふん、と鼻を鳴らして答えるエリエンスの様子で、ネイスリーズはその『客』の正体と目的を察した。

「ルーネイスの気持ちも察してあげなさい。たったひとりの弟である君のことが、あの子は心配で仕方ないのだから」

ルーネイスとは、大公そのひとの名前である。

彼ら兄弟の祖父を、弟のように可愛がっていたネイスリーズにとって、大公も大公弟も、孫同然に可愛い子供たちなのだ——たとえふたりがともに、既に四十を越えていようとも、だ。

そのことを、ふたりもまたよく知るがゆえに、面映ゆさを覚えながらも、柱神の言葉を受け入れるのだ。

「大公弟がいつまでも独身では外聞が悪いから、縁談を持ちかけてきているだけです」

「エンス坊や。わかっていることから、わざと目を逸らすのはやめなさい。ルーネイスが心配する気持ちがわからない君ではないだろう？　ティーリーシアを喪った時の君の様子を知っている者なら、誰も彼の心配を杞憂だとは思わないよ」

「ネイスリーズ！」

エリエンスが触れて欲しくない一番の話題にずばりと切り込んだネイスリーズは、非難の目を向けてくる彼を、静かに見つめ返した。

エリエンスには、かつて相愛の婚約者がいた。決めたのはふたりの両親だったが、互いに一目で運命を感じ合った恋人同士だった。

その恋が無惨に断ち切られたのは、エリエンスが二十一歳の時――。不慮の事故で、ティーリーシアが命を落としたのだ。

エリエンスの嘆きは深く、生きることへの情熱すら失いかけていた。そのまま恋に殉じていても、誰も不思議に思わなかっただろうほどに、彼は絶望していた。

そんな彼を、生に引き留めたのは、彼を愛する周囲の人間たちの努力だった。その中でも、最も彼のことを案じ、力を尽くしたのは、兄であるルーネイスともうひとり――けれどそのひとはもういない。

その事実を、エリエンスもよく知っているはずだというのに、素直に振る舞えないのは、ルーネイスが弟の孤独を癒すために、懲りることなく縁談を持ちかけてくるせいだということを、ネイスリーズは知っている。

「ルーネイスは、君に家族を持って欲しいのだよ……二度と君が死に焦がれたりしないように。いいや、違うな。生の喜びを感じてほしいから、あの子は何度も気だてのいい娘を捜して

くるのだよ」

「もう、死ぬ気はないと言ってるのに……第一、家族を持てと言うのなら、わたしの愛する者たちを、養子にすることぐらい、認めてくれてもよさそうなものなのに……いいえ、ネイスリーズ。兄はやはり、外聞を憚っているんです」

むきになって言いつのるエリエンスに、神々しい美貌の柱神は、ため息まじりに答えた。

「……それは、憚らざるを得ないだろう、同性の恋人を事実上生涯の伴侶となすための養子縁組など」

「貴方まで、そんな偏狭なことをおっしゃるんですか!?　愛は等しく尊いと、教えてくださった貴方が!?」

裏切られたとでも言いたげな、傷ついた瞳で、エリエンスが問うた。

ネイスリーズはかぶりを振る。

「そうではない。わたしが言っているのは、本気で伴侶にする気もないくせに、そんなことを言い出す君の軽率さについてだ。当てつけとまでは言わないし、君は常に恋愛には真摯だ。だが、ティーリーシア以外の誰かを、妻にしたいとは思ったこともないはずだ。なのに、徒にそんなことを口にしては、君も、君を愛している青年も、ともに傷つくだけだとは思わないか？」

決めつける言葉に、一瞬エリエンスの瞳が反抗的な光を宿した。

だが、ネイスリーズが見つめつづけると、やがて諦めたように肩を落とす——認めるのは業腹だが、我を張るのも無意味だと思ったようだった。

「……一体、わたしにどうせよとおっしゃるんです？　貴方が見抜かれた通り、わたしはもう、生涯妻を迎える気はありません。兄にも皆にも、申し訳ないと思わないわけではありませんが、それでも誰かと家庭を築くことなど考えられません」

これだけは譲れないと、言い切るエリエンスに、ネイスリーズは今日の訪問の目的を告げることにした。

「なにも無理矢理、家庭を築く必要はないさ。わたしは、君に娘という宝物をあげるために来たんだ。手遅れにならなければ、孫までついてくるお得さだ。庶子とは言え、血を分けた娘がいるということになれば、ルーネイスもこれまでのように強引に結婚を勧めるようなことはしなくなるだろう……さあ、わたしの話を聞く気はあるかね？」

とんでもない話を振るネイスリーズの灰緑の瞳は、悪戯を思いついた子供のそれのように、きらきらと輝いていた——。

魔法屋敷としてロスタロイドでも有名な屋敷の広間において、住人のひとりであるナルレイ

シアと、その幼なじみである少女は、今日もまた地獄を味わっていた。
「一、二、三、はい、そこで一瞬止まってから回る！　だめだめ、ナーシア、遅れてますよ！　ルーネは逆に早すぎます！　はい、やり直し！」
厳しい叱責の声を上げるのは、この屋敷の女主人であるファティ・リンシャだ。
ここ数年、足腰が弱くなったという銀髪の老婦人は、ひとり椅子に腰を下ろし、ナルレイシアとマルルーネを指導している。
「ま、またですか……」
肩で息をつきながら、弱音を吐いたナルレイシアに、ファティ・リンシャは常になく厳しい目を向けてきた。
「このぐらいで音を上げるとは何事ですか。あなた達がきちんと踊れているのなら、わたくしだってうるさく言ったりはしません。まだまだだから、繰り返させているんです。こんなものはね、習うより慣れるものなの。体が覚えるぐらいまで、練習を積むことこそが大事なのよ！」
「で、でも、ファティ・リンシャ。わたしたちが行くのは気楽な仮面舞踏会で、ここまで複雑なステップが必要な曲がかかるとは思えないんですけど……」
ねえ？
と、同意を求めてマルルーネに視線を向けた彼女だったが、幼なじみの少女は、すでに頼り

にならない状態になっていた。

ぜいぜいと息をつき、床に座りこんだ少女は、疲労困憊して、口をきく余裕さえなさそうな様子……。

（恥をかかない程度に手ほどきしていただけたら、それで充分なのに……なぜ、こんなことになってしまったの？）

心で泣きながら、ナルレイシアは段取りを決めたランディータを少しばかり恨めしく思った。

そう、件の馬鹿君――ニドヴァールに灸を据えるための舞台として、『踊る赤馬亭』の女将が選んだのは、身分に関係なく出入りできるという、仮面舞踏会だったのだ。あまりに格の高すぎる夜会では、マルルーネの出席が難しいというのが理由のひとつ、もうひとつのそれは、そうした場には、ナルレイシアが選定者であることを知る貴族も多数出席するため、どこでニドヴァールがその事実を知るかしれないから、というものだった。

ランディータ曰く、

「あのクズが、ナルレイシアのことを知ってご覧。自分は選定者に選ばれるような女性から、熱烈な求愛を受けたのだとかなんとか、絶対言い出すに違いないんだから。挙げ句、またぞろ口説きにかかるかも知れないよ」

とのこと。

確かにニドヴァールなら、あり得ない話ではないので、ナルレイシアは素直に従った。
だが、ここで問題が持ち上がった。ナルレイシアもマルルーネも、そこそこ裕福な家で生まれ育ったおかげで、ダンスはそれなりに踊れるのだが、いかんせんロスタロイドで主流のそれは知らなかったのだ。
そうして、ダンスの教師に選ばれたのが、ファティ・リンシャだったというわけだ。
若い頃は――いったいいつの時代の話なのか、考えると怖いのだが――ダンスの名手としても知られていたというファティ・リンシャは、ランディータから話――ニドヴァールに関することは除外して、だが――を聞くなり、喜んで引き受けてくれた。
練習相手のパートナーを手配してくれたのは、スカルトードだった。木石だの朴念仁と呼ばれることの多いガスカールには、ダンスが得意な友人が皆無だったのだ。
ファティ・リンシャは優しいし、ロスタロイドで発展したという、独特なダンスを覚えるのも楽しそうだと、簡単に「はい」とうなずいたのが運の尽き――。
ダンスに関しては鬼教師以外の何物でもないファティ・リンシャによって、ふたりは連日しごかれることとなった。
本当に、後悔は先に立ってくれない。
（ううぅ……涙が出そう）
けれど、泣いてもしごきが終わるわけではないことを知っている以上、無駄な体力の消耗は

避けるべきだった。

へたりこんでいたマルルーネも、少しは落ち着いたのか、のろのろと立ち上がる。

そんな彼女たちに、ファティ・リンシャはため息まじりに告げた。

「あなたたち、本当にわかっていないのねえ。仮面舞踏会だなんて、ロマンスの生まれる花園なのよ？　普段、格式に縛られ、窮屈な思いを味わってらっしゃる貴族の方々が、自由な空気に焦がれて、お忍びでいらっしゃることも少なくはないわ。素顔と身分を隠して、出会った男女が恋に落ちる……ああ、まさにロマンスの王道じゃない！　そういう方々が見ても、感心するぐらい見事なステップで踊る美少女ふたり！　なんて素晴らしいのかしら！」

熱を帯びた口調で語るファティ・リンシャの灰青色の瞳は、夜空の星さながらに輝いていた。

（いえ、わたしは別にロマンスを望んでは……）

言いたいことがあっても、言えない場の空気というものはある。

（ランディータさん……少しだけ、少しだけ恨んでもいいですか……？）

半べそをかきながら、ナルレイシアは再びダンスの練習という名の試練に立ち向かうこととなったのだ。



ロスタロイドにあるエルスカーネ公爵邸に、緑がかった金髪の美貌の青年が訪ねて来たのは、問題の仮面舞踏会三日前のことだった。

「なんとか、間に合いそうだよ、カール」

そう言って、スカルトードはひらひらと、手に持っていた封書を振って見せた。

真紅の紅葉を挟んで漉いた、風雅な封筒には、スカルトードの名前だけが流麗な蹟で記されている。

見覚えのある文字に、ガスカールはふう、と息をついた。

それは、スカルトードの大伯父――ガライラ大公国の柱神であるネイスリーズのものだったのだ。

「協力してくださるのか……こんな計画に」

黒髪の公爵の心境は複雑だった。

件のオーブエル男爵家の息子に報いを与えることに否やはない。ニドヴァールという青年の所行は、『恋多き困った男』の範疇には、到底収まりきれない悪辣なものなのだから。

だから、怒りに燃えるランディータに巻きこまれた格好とはいえ、自分やスカルトードがあれこれ工作することに迷いはないのだ。しかし、そこに現人神である柱神までをも引っ張り込むというのが、どうにも躊躇われてならない。

彼らは世界の天と地との間――空を支える聖なる御柱にして、俗世には拘わることなき存在のはずなのだから。

しかし、血の繋がりのあるスカルトードは、そのあたりのことを気にする様子も見せない。

「こんなって……ひどいよ、カール。この計画の成否には、数多の女性の名誉がかかっているんだから。それに大伯父は、常々『身内の敵はわたしの敵、女性の敵もわたしの敵』と言っているひとだからね。たとえこちらから声をかけなくとも、精霊たちから話を聞いて、向こうから首を突っ込んできたに違いないんだ。なにしろ、被害者のひとりは、大伯父にとって恩人であるヴィル・ダカールなんだからね」

「いや、だが……」

率先して俗世に――しかも相手を罠に嵌めるような企みに拘わったとなれば、同朋である他の柱神たちから非難を浴びることになるのではないだろうか。

そう思うと、この上なく心強いネイスリーズの協力を、手放しで喜べないガスカールなのだ。

非常に頭の柔らかい――柔らかすぎるという見方もある――ファティ・リンシャやアマンシールが、そうした態度を取るとは思えないが、他の柱神もそうだとは限らない。もしも今回の計画に手を貸したことで、ネイスリーズが困った立場に追い込まれることにでもなれば、悔やんでも悔やみきれないではないか。

しかし、身内である青年は、あっさりと言い切った。

「あり得ないね。言ってはなんだが、あのひとは最強の力を誇る紫属の柱神なんだから……縦んば、頑固な長老の一部が謹慎を申しつけたとしても、黙って従うひとじゃない。力ずくでどうこうしようだなんてことは、さすがに誰も考えないだろうし、たとえそうしようとしても、精霊たちがそっぽを向くよ。そっくりな顔のわたしが言うのもなんだけど、精霊たちは面食いで、今現在、あのひと以上に精霊に愛されているひとはいないと断言できるからね」

夢の化身のような美青年に、さらに神威が加われば、確かに人間であれ精霊であれ、焦がれずにはいられない存在となるだろう。

正に人間が理想とする神の姿――。

しかし、その『神』の口癖が「身内の敵はわたしの敵、女性の敵もわたしの敵」というのは……いかがなものか。

思わず思考の迷宮に入りこんでしまったガスカールに、スカルトードが焦れた様子でこう告げた。

「第一、今更思い悩んだところで遅いよ。向こうはとうに、根回しを終えているんだから。これはその旨を伝えてきた手紙だよ。いまさら白紙には戻せないさ。そういうわけで、君のほうの状況はどうか、尋ねにきたんだけどね、どういう具合だい？」

友人の問いに、ガスカールは肩をすくめて答えた。

「どうもこうも……ランディータ嬢の読み通りだ。噂も順調に広まっている様子だし、今は我が家からの遣いを出す時期を見計らっているところだ。婿養子だという現在の当主は別として、先代も先々代も、芳しからぬ評判の主だったらしいから、信望が厚い家とは言い難い。こちらの申し出に首を横に振る者は少ないだろう」

「それはなにより」

スカルトードは眩いばかりの笑顔でうなずき――少し間を置いて、意味ありげに「けれど」と続けた。

「そういう、評判の芳しくない家の流した噂話を、誰かさんは鵜呑みにしたわけなんだよねえ？」

何のことを言っているのかは明白だった。

自分に非がある自覚があるだけに、ガスカールはむっつりと黙りこんだ。そんな彼に、しかし友人は遠慮なくたたみ込んでくる。

「当然、ヴィル・ダカールには、もう謝罪したんだろうね、勝手に誤解して、辛く当たって悪かった、と？」

確認を取るような口調の友人の前で、ガスカールは貝になった。

謝罪する気はあるものの、一度機会を逃したせいで、なかなか切り出せないまま、今に至っているからだ。

おまけにナルレイシアは、何かとトラブルに巻き込まれる特異体質の持ち主で、その度――いくつかの例外はあったが――振り回される羽目になる彼としては、その機会を見つける前に、「この疫病神！」と罵ることも少なくなく……結局、喧嘩相手という関係に落ち着きつつある状況なのだ。

ガスカールの沈黙から、そのあたりのことを察したのだろう、スカルトードは呆れたように大きなため息を洩らした。

「……まあ、いいけどね」

「なんだ、その微妙な間は？」

「別に。ただ、ひとつだけ年長者として忠告させてもらうなら、蕾はいつまでも蕾のままじゃないってことだよ。花が開く時はあっという間だ。美しい花には、蝶や蜂が群がるって話」

わかりやすすぎる譬えに、ガスカールは眉宇を顰め、一言吐き捨てた。

「馬鹿馬鹿しい」

スカルトードは、もうなにも言わなかった。

5

晩秋の夕暮れに吹く風は、冬の到来が近いことを肌に伝えてくる。

体にぴたりと合いながら、動いても少しも窮屈ではない、仕立屋の意地と根性がこめられた夜会服の上に、外套を羽織りながら、ナルレイシアはふう、と息をついた。

「ようやく……この日が来たのね」

しみじみと呟くナルレイシアの目は、現実ではなく、辛い過去の日々を見つめていた。

連日のファティ・リンシャによるダンスの特訓だけでも大変だったのに、夜会用のドレスを一着仕立てるために、立ち会わされた仮縫い、実に七回――踊っても袖が突っ張ったり、襞が乱れたりしないよう、こだわりの職人は、習ったばかりのダンスを踊ることまで要求してきたのだ。

ここ一ヶ月ほどのナルレイシアの記憶は、ダンスの練習と仮縫いに終始しているといっても過言ではないぐらいだった。

そして、それは隣に立つ幼なじみの少女にしても同じことだった。

しみじみとした口調で、マルルーネがつぶやいた。

「……長かったわね」

無言でナルレイシアはうなずいた。

たかが一ヶ月……されど一ヶ月、なのだ。

（けれど、あの地獄の日々も今日でお終いなんだわ！）

泣いても座りこんでも、休ませてくれなかったファティ・リンシャの特訓は、明日からはもうないのだ。

イリアーナの名誉を回復するためなら、出来ることなら何でもする、と誓った心に嘘はなかったけれど、それでもあの日々が、あと一月つづいていたら、途中で挫折したかもしれない。

何しろ、ニドヴァールに灸を据えるという目的を知らないファティ・リンシャは、『ロマンスの王道』目指して、燃えに燃えていたのだから。

けれど、今日を乗り切れば、愛すべき日常が戻ってくるのだ。

（最後の締めくくり……というか、今日のための苦難の日々だったんだから、絶対絶対成功させるわ！）

義務ではなく、決意である。

一方マルルーネは、これまでの苦労の分まで、ニドヴァールに対する怒りと恨みに上乗せすることに決めたらしい。

「ふ、ふふ……見てなさいよ、馬鹿男。二度と年頃の女の子相手に、暢気に鼻の下伸ばしたりできない立場に追い詰めてやるんだから……」

計画通りにことが運べば、そうなるはずなのだが……そのためには、必須条件として、良い意味で目立つ必要があった。

悪目立ちは禁物――だからこその、ここ一月の特訓だったわけだが……。

（まあ、衆目を集めるのは簡単なのよね）

自分たちを迎えに来る予定の、ふたりの青年の顔を脳裏に思い浮かべながら、ナルレイシアは考える。

ひとりは、神としか思えないほどの美貌の主だし――あの麗しさは、仮面ぐらいで隠せるものではない――もうひとりも、標準を大きく上回る端正な顔立ちをしている。おまけにふたりとも長身で、立ち居振る舞いも優雅そのもの。黙っていても、誰もが目を奪われるに違いない青年たちなのだ……見た目だけなら。

あとは、自分たちが彼らの足を引っ張らなければ、計画は半ば成功したも同じだ――幸か不幸か、地獄の特訓のおかげで、失敗するかもという不安は殆どない。

（よーし、やるわよ！）

誓いとともに、固くこぶしを握りしめたとき、迎えの青年たちが現れた。

「これはこれは……おふたりとも、美しい」

ナルレイシアとマルルーネを目にするなり、輝くような笑顔でスカルトードが言った。
ほかの人間が口にしたら、歯が浮くようなお世辞も、このひとが言うと素直に受け止められるのが不思議だ。
一方、貴族の間で『朴念仁』と呼ばれているガスカールの反応は……やはり、芳しいとは呼べない代物だった。
「……馬子にも衣装」
ナルレイシアに向けて、ぽつりとつぶやくのだから、質が悪い。
(美辞麗句並べろとは言わないけど、それはないんじゃないの?)
思わずむかりとしてしまった彼女は、慌てて平常心を保つ呪文を胸中で唱えた。
(わたしは女優、わたしは女優)
どんなに腹が立っても、にっこり笑って猫を被る。
今夜、一番必要なにっこり笑顔を保つためには、この呪文は最適なのだ。
「あら、見た目は合格ってことかしら?」
にこやかに尋ねると、黒髪の青年公爵は——失礼なことに——奇妙なものでも見るような目を彼女に向けてきた。
(本っ当に、むかつくわねっっ!)
そんな彼女の様子に気づいたのだろう、マルルーネがそっと耳元でささやいた。

「気持ちはわかるけど、ナーシア。ここは我慢して、落ち着いてちょうだい。大一番を控えているのに、直前で事故になんか巻き込まれるのはご免よ」

ひどい言い種だったが、咎めることはできない。

なぜなら、幼いころから、ナルレイシアが怒ると、周囲を巻き込んでの『不慮の事故』発生率が著しく高くなることが広く知られていたからだ。

「う……ううぅ。わかった」

うなずきながら、ナルレイシアは再び呪文を繰り返す。

（わたしは女優、わたしは淑女……少なくとも今夜だけは）

大きく息を吸い、吐いて、彼女は顔を上げた。

「では、お嬢さん、お手をどうぞ」

スカルトードがマルルーネに手を差し出す。

惚れ惚れするほど優雅な仕種だったが――ナルレイシアは自分のパートナーである青年には、同じ事は無理だと知っていたから、さっさとガスカールに近づき、腕を絡めた。

なぜか一瞬、彼が驚いたように目を瞠ったが、彼女は気づかず、小声でささやいた。

「仕方ないでしょう？　会場に着いてから、いきなり仲睦まじいふりをするだなんて真似、わたしもあなたも出来っこないんだから」

本番でボロを出さないためには、前もって準備が必要なのだ。

それは同感だったのか、ガスカールが渋々とうなずいた。
「……そうだな。仕方ない……」
そうして、二組――四人の男女は、連れだってファティ・リンシャの屋敷を後にした。
舞台は、決戦の場へと移る。

ロスタロイド東地区――貴族の屋敷が建ち並ぶ地域にある、アジュアール子爵邸の広間には、仮面を着け、着飾った男女が集っていた。
三代前に金子で以て爵位を得たアジュアール子爵は、ディエーンの上位貴族からは成り上がり者として軽視されがちだが、月に一度、洒落た趣旨の夜会を開くことで、下位の貴族や裕福な商人階級には人気の高い人物だ。
今夜の趣向は仮面舞踏会――身分を忘れ、楽しく語り合い、踊るという集まりだ。
無論、殆どの客は目元を覆う小さな仮面を着けているだけなので、その正体は明らかだが、そこはそれ、見ないふりというのが、この集まりにおける約束事なのである。
オーブエル男爵家令息であるニドヴァールも、形ばかりの仮面を着け、この夜会に出席していた。

甘く整った顔立ちの彼は、未来の男爵という立場も手伝って、未婚の女性たちには大変人気のある青年だった。

今夜もひとしきり、華やかな衣装に身を包んだ令嬢たちとの会話を楽しんでいたところ――声を掛けられた。

振り向いた先に立っていたのは、ヴィシャール伯爵家の次男、イージニアン――。

ニドヴァールの遊び仲間である。

「よう、相変わらずお盛んなようだね」

令嬢たちから離れると同時に、ニドヴァールの日頃を知る悪友は、揶揄も露わに話しかけてきた。

神殿に入ることがすでに決まっているイージニアンが、自分の異性との交友関係について、あれこれ皮肉るのは今に始まったことではないので、ニドヴァールは肩を竦めた。

「冗談だろう。向こうが勝手に寄って来るだけだ。貴族の未婚の女性になんか、手を出せるものか。あっという間に縁談がまとまってしまう」

ニドヴァールの実家であるオーブエル男爵家は、故郷フィレアでこそ、権力者として力を揮っているが、王都に屋敷を構えているわけでもない地方貴族である。

ロスタロイドに集う貴族のほとんどは、オーブエル家より格上なのだ。そんな家の令嬢に、下手に恋など囁いたら、逃げる間もなく神殿に引きずられていくのは目に見えている。勿論、

いずれはオーブエル家の家格を上げるのに役立つ家の花嫁を迎えるつもりではあるが、いまはまだ、その気はない。

「やはり、恋を楽しむなら、きちんとそのあたりのことを弁えている大人の女性に限るな。彼女たちなら、間違ってもみっともない真似はしないし」

つまりは既婚の女性との火遊びというわけだ。

倫理的に問題があるなどとは、ちらりとも考えない男だった。

類は友を何とやらで、同類のイージニアンも、そのことをとがめ立てしようとはしない。

くすくす笑いながら、

「そう言いながら、故郷ではずいぶん、可憐な野の花を散らしているそうじゃないか？」

と、突っ込んでくる。

ニドヴァールはにやりと口元を歪め、答えた。

「人聞きの悪いことを言わないでくれ。わたしは彼女たちにひとときの夢を与えてやってるだけなんだ。向こうにとってもいい思い出を貰えるんだ。なにも悪いことじゃない」

正式には認められない結婚の念書を用意するなどという、悪辣な手段を用いたことに、微塵も罪悪感を抱いていない男の言葉に、イージニアンは悪戯っぽく笑う。

「いい思い出で終わらせてくれる娘ばかりとは限らないんじゃないのかい？　聞いたところによると、故郷で君に袖にされた娘が、はるばるこのロスタロイドまで追いかけてきたのだとか

……そこまでさせるなんて、自分のことを罪作りだとは思わない？」

悪友の言葉に刺激され、ニドヴァールの脳裏にひとりの少女の顔が浮かんだ。

金の髪に黄玉の瞳を持つ、くるくると表情が変わる、なかなかの美少女だ。

ナルレイシア・フォイリリル・ダカール。行儀見習いのため、オーブエル男爵邸に住み込みで来ていた娘だ。

ロスタロイドの貴族の令嬢たちのような華やかさはなかったが、フィレアでは珍しいぐらい綺麗な娘だったため、一昨年、夏期休暇中の相手に選んでやったのだ。

一夏だけの、甘い夢を与えてやるつもりだったのに、あろうことか彼女はニドヴァールの好意を足蹴にした。

身の程知らずの娘には、相応の罰を与えるべきだと考え、彼は実行した。夏の間中、彼女にまつわるよろしくない噂を、フィレア中の社交の場で広めたのだ。

秋になってから、母からの手紙で、彼女がフィレアを離れたことを知り、大いに溜飲を下げたものだが、鳩尾に肘鉄を食らわされた屈辱は、到底消えるものではなく、いつまでも痼りのように胸の奥に残っていた。

（まさか、このロスタロイドに来ていたとは……）

再会したときには、正直目を疑った。

いらぬことを口走られる前に、うまく周囲を言いくるめることはできたが、そこまで自分を

焦らせた娘に、怒りを覚えずにはいられなかった。

どこまでも不愉快な娘――ニドヴァールのナルレイシアに対する心証は、今や最悪だった。

二度と視界に入れたくない。

（なんとか、ロスタロイドから追い出すことはできないだろうか……）

故郷とは違い、そう簡単にはいかないだろうが、方法がないわけではないはずだ。

（まずは、どこに住んでいるのかを調べさせて――）

と、そんなことを考えていたときのことである。

広間に、突然どよめきが走った。

何事かと顔を上げると、隣に立つイージニアンまでもが、驚いた顔で広間の入り口を見つめている。

つられたように、そちらに目をやったニドヴァールは、入ってくる二組の男女を見て、なるほどと頷いた。

目元だけを隠す仮面を着けて、長身の青年たちがまだ若い女性をエスコートしている。黒衣を纏った黒髪の青年が金髪の娘を、緑がかった金髪の青年が金茶の髪の娘の手を取り、先導している。

どちらも、目を引く美男子である上に、洗練された優雅な物腰から、中位以上の貴族であることは間違いなかった。

（しかし、見かけたことがないが……）

いったい何者かと、ニドヴァールが内心首を傾げていると、イージニアンが口笛まじりにつぶやきを洩らした。

「驚いたな、紫公爵だ。珍しいこともあるもんだ」

紫公爵――と、胸中で繰り返し、ニドヴァールは記憶を探った。

すぐに、見つかる。

紫公爵とは、エルスカーネ公爵の異名であったはずだ。前の王家エルスース家直系の血を引く唯一の人物で、かの家の者の特徴である紫の瞳を持って生まれたことで、いろいろな意味で取りざたされることも多いと聞いている。

そのせいもあり、重要な式典以外には、あまり顔を出さないと、イージニアンから聞いていたのだが……。

「あまり人前に出ない、変わり者だったんじゃないのか？」

尋ねたニドヴァールに、イージニアンは「そのはずだったんだが」と首を傾げた。

「……宗旨替えしたかな？　可愛い恋人におねだりされたら、さしもの人間嫌いも出て来ざるを得なかったんだろう。つくづく、恋とは偉大だな」

恋に振り回される気などないニドヴァールは、友人の言葉にふん、と鼻を鳴らした。

「爵位目当ての令嬢に、ついに捕まったってわけか。まあ、こんな所に出入りしたがるような

娘だ、大した家柄の出ではないだろうが……公爵ともなると、相手の家柄を気にする必要もないようで、羨ましい限りだよ」

皮肉混じりに彼が言うと、イージニアンは意地の悪い笑顔で答えた。

「まあ……公爵とは言っても、紫公爵の場合、お近づきになりたがらない貴族も多いしねえ。身分ほど選び放題というわけにはいかないのだろうさ。だが、多少身分が低くても、あの娘なら公爵も文句はないんじゃないのかな？　見てみろよ、仮面をつけてても、綺麗な顔をしてるのがはっきりわかる。相当な美少女だぞ？」

そう言われて、ニドヴァールは初めて、公爵がエスコートしている娘に目を向け――次の瞬間、驚きに凍り付いた。

長い金髪をゆるく結い上げ、セピア色の紗を幾重にも重ね、所々に薄紅色の小さな薔薇の造花を縫いつけた衣装に身を包む少女は、確かに美しかった。背筋をぴんと伸ばし、歩く姿も堂々としており、周囲の男性陣の視線を集めている。

しかし、ニドヴァールが凍りついたのは、彼女の美しさゆえではなかった。

（ナルレイシア・フォイリリル・ダカール！）

なぜ、あの娘が、ディエーンでも有数の大貴族であるエルスカーネ公爵に伴われているのか。

（わたしのことは袖に振っておきながら、公爵になら笑顔を振りまくというのか？）

だとしたら、これ以上の侮辱はない。
（おのれ……！）
ぎり、と唇を噛みしめ、ニドヴァールはナルレイシアへのさらなる罰を心に誓った。
自分にこんな思いを味わわせた娘を、黙って許すことなど断じてできない――と。
身勝手な論理を振りかざし、彼は彼女たちのいる方向へと足を向けたのである。

6

アジュアール子爵邸に到着してからというもの、ナルレイシアは緊張し通しだった。

予想していたこととはいえ、ガスカールとスカルトードの目立ち方の凄さには目眩を覚えるほどで、ほとんど数歩ごとに声を掛けられ、内心何度ため息をついたか知れない。

なにより緊張したのは、ガスカールに話しかける人物が、例外なく彼女のことを尋ねてくることだった。適当な偽名を用いることも考えたが、この会場にニドヴァールがいる限り、嘘と知れる確率は高い上、どうせ呼ばれてもすぐに反応できないだろうということで、本名を名乗ることにしていた。

大抵のひとは、彼女の名を聞いてもなんの反応も示すことなく、出身地や家業について質問してきたのだが、中にはそうではないひともいた。

十何人目かに、声を掛けてきた中年の男性がそうだった。

「やあ、カール。君とこういった場所で会えるとは嬉しい驚きだね」

気さくな態度にも拘わらず、なんとも風格漂う立派な紳士だった。

ガスカールが驚いたように息を呑むのがわかった。
「……ヴィランド公……っっ!?」
「よしなさい、ここではわたしは自由を味わう旅人だよ。馨しい花の香りに魅せられた男に、俗世の名など意味をなさないのだから」
歯の浮くような気障な台詞であるにも拘わらず、このひとが口にしても、厭味には感じない。
（スカルトードさんやネイスリーズさまもそうだったけど、立派な方が下心なしに口になさった言葉って、すんなり胸に落ちてくるのよねえ）
本物の紳士ならではの特技と言えるかもしれない。
逆に、底の浅い、下心満載の男が口にすると、とても聞くに堪えない代物と化すのだから、なんとも不思議だ。
そんなことを考えていたナルレイシアは、自称旅人の紳士が、熱心な目で自分を見つめていることに気づくのが少し遅れた。
「……とは言え、わたしは実に好奇心旺盛な旅人でね。カール、良かったらこちらの魅力的なお嬢さんを紹介してくれないかい？」
ガスカールが仕方なさそうに、本日十何度目かになる言葉を繰り返した。
「こちらはヴィル・ダカール。フィレアの出身で、現在ファティ・リンシャの屋敷に滞在なさ

ってます」

これまでの流れだと、大抵のひとは『ファティ・リンシャのお屋敷』に反応したのだが、このひとは違った。

「フィレアのヴィル・ダカール？　もしかして、リンレイド・ダカール氏は……」

意外なところで意外な名を聞き、ナルレイシアは思わず目を瞠った。

「父です……ご存知なのですか？」

「知っているもなにも、お父上はわたしの恩人だよ。まだ若い頃、素人考えで商売に手を出して大損したとき、貴方のお父上が資金の援助をしてくれなかったら、わたしは領地も屋敷も失って、路頭に迷っていたに違いないのだからね。その後も、あれこれ忠告してくれたおかげで、大きな損をすることもなく、家族に不自由な生活させずにすんだのだ。もっとも、お父上は確実に借金を返済してもらうためだなどと、露悪的なことを言っていたがね」

初めて耳にする話に、ナルレイシアはますます目を丸くした。

父がそれなりに大きな商会の社主をしていることは知っていたが、高位貴族と親交があるなどということは一度も聞いたことがなかったのだ。

（ヴィランド公……って、ガスカールが呼びかけたのよね。多分、この方は公爵さまなんだわ。そんな方に恩人と呼ばれるだなんて、お父さまったら、意外とすごいのかしらん？）

思いがけない収穫に、ナルレイシアが口元をほころばせたとき――第三の声が割り込んでき

た。

「お久しぶりです、アーマイド卿」

甘く蠱惑的な声に振り向くと、別の人垣に囲まれていたはずのスカルトードとマルルーネが近づいて来ていた。

ヴィランド公爵アーマイドが、破顔一笑した。

「スカルトード！　君まで来ていたとは、今日はなんという日だろうね。ますます大伯父上に似てきたのじゃないかね？」

嬉しそうなアーマイドとは対照的に、途端にスカルトードが渋面を作る。

「よしてください、卿。おかげでわたしがどれほど苦労させられているか、ご存知のはずではありませんか。そんなことより、今夜のパートナーを紹介させてください。こちらはフィレアのヴィル・セライ。卿が絶賛していたセライ牧場のお嬢さんです」

セライ牧場と聞いて、アーマイドの関心は、一気にマルルーネに傾いた。

こっそりとスカルトードがナルレイシアに耳打ちした。

「卿はセライ牧場産の燻製肉や腸詰めが大好きなんですよ。今夜、卿がいらしていたのは幸運でした……これから起こることの、証人となっていただきましょう」

（幸運……？　本当に偶然なのかしら……？）

とは思ったが、もっと気になることがあったので、ナルレイシアはそちらを優先することに

した。

こっそりと、スカルトードに尋ねる。

「あの、アーマイドさまって、公爵さま、なんですよね？」

ええ、とスカルトードがうなずいた。

「ヴィランド公爵です。ディエーンの第二位公爵家の御当主ですが、第一位公爵家であるナサリエル家が、あのようなことになってしまったので、いまでは事実上の筆頭公爵ですね」

その言葉に、ナルレイシアはさすがに驚きを隠しきれなかった。

（事実上の筆頭公爵っ！）

果たして、そんなひとを巻き込んでいいものだろうか――と、悩んだのはほんの数瞬だった。

よくよく考えるまでもなく、すでに複数の『やんごとなき方々』に協力してもらっているのだ。いまさらひとり増えたからと言って、恐縮するのもおかしな話だと思い直したのだ。

（まあ、確かにアーマイドさまが証人になって下さったら、いかなあの馬鹿君でも、言い逃れできやしないでしょうし……そうね。これはやはり幸運なんだと思うことにしようっと）

ナルレイシアが心を決めたのを悟ったのか、スカルトードが微笑みながら、小さく囁いた。

「睨まれてますよ、ヴィル・ダカール。どうやらこちらが見つけるより先に、向こうが気づいてくれたようですね」

（そりゃあ、ガスカールとスカーさんが揃ってたら、いやでも人目を引きますって）

思いながら、そろりと尋ねた。

「怒っていそうですか？」

「あれは猛烈に怒ってますねえ……ヴィル・ダカールがカールと連れだっているのも気に入らなければ、笑顔を振りまいているのも気に喰わない。わたしと親密そうに内緒話をしているのは言語道断……という顔をしてますよ」

捨てたゴミでも、他人が拾った途端惜しくなる、というやつか。

呆れかえるしかないニドヴァールの身勝手さに、ついため息を洩らしたナルレイシアに、なぜかスカルトードが楽しげに言を継いだ。

「ありがたいですね、向こうから近づいて来てくれるつもりのようですよ。多分また、貴方に関するないことないことを、わたしたちに『忠告』する気なんでしょうね。ヴィル・ダカール、心の準備は出来ていますか？」

「大急ぎでします」

「よろしくお願いします。さて、ヴィル・セライのほうは……大丈夫のようですね」

アーマイドを見上げるマルルーネの頬は、バラ色に上気しており、緊張のかけらも感じられない。

（マルルーネ……いくらアーマイドさまが好みだからって、これから大一番を控えてるとき

に、瞳に星を宿さないでよ）

思わず額に手を当てて、ナルレイシアは胸中でつぶやいた。

同時に肩の力がほどよく脱けた。

スカルトードが問いかけてきた。

「最も重要なことは？」

ニドヴァールへの挑発も兼ね、ナルレイシアはにっこり笑って答えた。

「先手必勝」

スカルトードも笑顔でうなずいた――。

「お、おい、ニドヴァール？」

突然人の波をかきわけるようにして歩き出したニドヴァールに、悪友のイージニアンが慌てて声をかけてきたが、彼は立ち止まらなかった。

彼の視線の先には、楽しげに笑い、エルスカーネ公爵とは別の青年と親密な様子で語り合うナルレイシアの姿があった。

（あの娘……！）

怒りで腸が煮えくりかえりそうだった。
自分にあのような恥をかかせたくせに、このロスタロイドでの、あの変貌ぶりはなんだというのか。
恐らく公爵に誂えてもらったであろうドレスで着飾り、公爵以外の青年に笑顔を振りまき、そのことに何の罪悪感も覚えていないあの厚顔な態度。
到底、許せるものではなかった。
（恥知らずな小娘め……目にもの見せてくれる……！）
どこまでも身勝手な論理で自身を正当化するニドヴァールは、明らかに冷静さを見失っており――そして、それゆえに、墓穴を掘ることとなったのである。

（来たわね）
敵意と怒りと悪意をたっぷり含んだ視線を感じながら、ナルレイシアはそばにいるマルルーネに目配せした。
人間というものは不思議なもので、どんなに人が多かろうと、大嫌いな人物の気配だけは不思議と感じ取れるものなのだ。おまけに相手が気配を隠そうともしていないのだから、ニドヴァールが近づいてくる方向も距離も、彼女には手に取るようにわかった。

この大一番に際して、スカルトードから伝授された教えを脳裏で繰り返しながら、ナルレイシアは絶好の瞬間を待った。

（とにかく、先制攻撃あるのみ！）

向こうがお得意の話術を繰り出す前に、ガツンと叩かなければならない。

巧言を弄することに関して、ニドヴァールは達人と言ってもいい。スカルトードの忠告通り、先に自分にまつわる『ないことないこと』を披露されてからでは、攻撃の威力が格段に落ちるのは目に見えているのだ。

（さあ、行くわよ！）

自身を鼓舞し、ナルレイシアは計りに計ったタイミングで、ニドヴァールの方を振り返った。

その直後、驚いたように軽く目を瞠ってしまったのは——演技ではなかった。

本当に、驚いたのだ。

（このひと……こんなに貧相だったかしら？）

本人が耳にすれば、激怒すること間違いなしなことを思いながら、ナルレイシアは目を瞬かせた。

自身の好みは別として、ニドヴァールがフィレアの年頃の娘たちの人気を集めるだけの容姿の主であることだけは、納得していたはずなのだが……いま見た彼のそれは、とてもそんな魅

力的なものとは思えなかったのだ。

なんのことはない、ロスタロイドに出てきて、ガスカールやスカルトードやアマンシールやネイスリーズ等々、ニドヴァールとは比べものにならないぐらい上等な男性を知ったおかげで、底の浅さ丸出しの彼の真の姿を、見るともなく見てしまっただけなのだが、もちろんナルレイシアにそんな自覚はない。

（不思議……。でも、なんだかおかげで落ち着いたみたい。この間は、あまりに突然の再会で頭が凍り付いたんだけど、こうして見ると、緊張するような相手じゃないものね）

ますます酷いことを思いながら、彼女はニドヴァールと目が合うなり、にっこりと笑った。

彼女の反応が意外だったのか、一瞬足を止めた彼に向かって、ナルレイシアは歩み寄り、邪気のかけらもない——ようにしか見えない——笑顔で挨拶した。

「まあ、オーブエルの若様。先日は、満足にご挨拶も出来ず、失礼いたしました。是非、お詫びしたいと思っておりましたの。まさか、今夜お会いできるだなんて……神々のお計らいに感謝いたしますわ」

嘘嘘大嘘である——今夜のこの夜会に、ニドヴァールが必ず出席することを、ランディータが調べ上げてくれたからこそ、決戦の場をここに決めたのだ。

素のナルレイシアは、嘘が嫌いで苦手な不器用者なのだが、『わたしは女優』の呪文の効果は絶大だった——自己暗示というもの、馬鹿には出来ないのだ。

（ここまでは、計画通り。仮面舞踏会で名前を呼ぶのは反則だけど、思わずぽろりと洩らしちゃったって感じなら、見逃してもらえるとスカーさんに教えてもらったから、きっと大丈夫。相手が態勢を整える前に、決定打を放たなくっちゃ）

口撃……もとい、攻撃は最大の防御である。

ニドヴァールに口を開かせる前に、彼女は爆弾攻撃を実行した。

「この度は、ご婚約おめでとうございます」

決してわざとらしい大声ではない、けれど近くにいる人物の耳には確実に届く程度の声で、朗らかに祝福の言葉を口にする。

周囲の空気が、瞬時に変わった——主に、独身の令嬢たちの気配が一変したのだ。

ニドヴァールが未婚の女性に人気がある理由は、彼が未来の男爵位を約束されている上、未だ独身だという点が大きい。もちろん、彼の容姿や口の上手さも理由の内には入るだろうが、もし彼がオーブエル家の長男でなく、次男、三男だった場合、これほどの人気を博したとは思えない。

周りが一斉に、聞き耳を立てたことに気づいたのだろう、あまりにも思いがけないことを言われ、驚きのあまり言葉を失っていたニドヴァールが、口を開き掛けた。

（先制攻撃が成功した以上、心配はいらないはずだけど、ここは立ち直る暇を与えず、たたみかけるべきところよね）

無類の本好きであるナルレイシアは、実は多くの兵法書を読破しており、その内容にも通じていた。

残念ながら、自分のことに関しては、なぜだかその知識が必要なときに浮かんできてはくれないので、自身の危機には全然役に立ってくれないのだけれど。

ただし、今回は――計画立案者のランディータの思惑はどうあれ――自分のためではない、イリアーナのための作戦だった。ナルレイシアに迷いはない。

「イリアーナは本当に素晴らしい女性ですもの。彼女を生涯の伴侶に選ばれるだなんて、さすがは若様だと思いましたわ。本当におめでとうございます」

すでに決定事項であるかのように語るナルレイシアの目の前で、困惑から醒めかけたらしいニドヴァールが顔色を変える。

馬鹿なことを言うな！　――とでも怒鳴りつけたいところだろうに、周囲の耳目を気にせずにはいられない彼の性格は、この場においては好都合だった。

事前の打ち合わせ通り、ここでマルルーネが進み出る。

「お初にお目にかかります。わたくし、セライのマルルーネと申します。イリアーナとは、実の姉妹のように育ってきたものですから、是非直接お祝いを申し上げたくて、上京して来たのですけれど、ここでお目にかかれるだなんて……本当に、なんという偶然でしょう」

……マルルーネもまた、立派な女優だった。

ナルレイシアとマルルーネのふたりの口から、同じ名前が出たことで、ニドヴァールは事態を把握したらしい——ただし、彼女たちふたりが勝手な思いこみをしているものとして、だ。

怒気に染まりかけていた顔に、穏やかそうな笑みが戻りかける。

反撃準備に入った証拠だ。

（そうはさせるものですか）

ナルレイシアはすかさず、マルルーネを肘で突いて合図した。

従姉のために、自宅から肉切り包丁まで持ち出した少女が、これに気づかぬはずがない。

ほう、と息をつきながら、しみじみと言を継ぐ。

「けれど、正直なところを申しますと、わたくし、少し複雑な気分ですの……ずっと、姉のように思っていたイリアーナが、まさかあれほど高貴な御方の血を引いていただなんて……。身勝手な感傷だとはわかってはいるのですが、彼女が遠くなったような気がして、淋しく思えてならないのですわ」

予想通り、「高貴な御方の血を……」のくだりで、ニドヴァールがぴくりと反応した。

同時に周囲の、この話題に対する関心が高まったのもはっきりわかった。

計画通りだ。

ナルレイシアがさりげなく——見えるように——たたみ込む。

「……本当に。まさか、イリアーナがガライラの大公弟殿下の血を引いてただなんて……マル

ルーネから聞いたときは、本当に驚きましたわ」
この台詞が、ニドヴァール及び周囲に与えた衝撃は大きかった。
会場のあちこちから、ざわめきが起こった。
「ガライラの大公弟殿下というと……」
「確かエリエンス殿下は未だ独身であられるはず」
「庶子、ということか……？」
などなど、興奮したささやきが交わされるのが聞こえてきた。
一度血色が戻りかけていたニドヴァールの顔が、紙のように白くなる。
（きっと、そんな馬鹿な、とか、本当だったら、ガライラから睨まれる、とか、まずは事実確認が第一だとか……保身優先で頭を巡らせているんだわ。本っ当に最低な男ね！）
イリアーナに対して、悪いことをしたとはかけらも思っていないのが一目瞭然だった。
（これは、強制的に矯正するしかないわね）
心を決め、ナルレイシアは女優になりきった。
「ガライラの大公弟殿下は、ずっとイリアーナの実のお母さまを捜してらしたそうですわ。お気の毒なことに、お母さまは彼女を産んで間もなく亡くなってらしたため、イリアーナを捜すのに時間がかかったそうで……。それもあってか、殿下はようやく見つけた彼女のために、自分が出来ることは何でもなさるおつもりらしくて……実は、わたしたち、結婚式で、彼女がど

んなドレスを纏うのか、楽しみでならないんです。ねえ、マルルーネ？」

にこやかに、朗らかに、ナルレイシアは毒針を潜めた言葉を口にした。

「ええ、本当に。きっと、贅を尽くした豪華な衣装でしょうから。それに、ガライラ風のデザインなら、お腹もあまり目立たないと思いますし……あっ」

思わず口が滑ったとでも言うように、マルルーネが慌てて口を噤んだ。

ざわめきが、更に広がり、ニドヴァールは彫像のごとく凍り付いた。

彼の、ロスタロイドにおけるバラ色の青春の日々は、ここに幕を下ろしたのである――。

7

（なに……一体、この娘はなにを言ってるんだ!?）

耳にした言葉が信じられない――否、信じたくない思いで、ニドヴァールは目を瞠った。

（イリアーナが、ガライラの大公家の血を引く娘、だと!?　そんな馬鹿な話があってたまるものか！）

よほど、「戯言を言うな！」と怒鳴りつけようかと思ったが、周囲の耳目があったため、すんでのところで思いとどまった。

大公弟エリエンスが、未だ独身である以上、イリアーナは庶子ということになるが、それはあまり慰めにはならない。王宮への伺候も許されていない地方の男爵家の息子と、小さいとは言え、一国の支配者の一族の血を引く庶出の娘では、実質上、相手の方が格上と見なされるのだから。

しかも、ガライラはディエーン同様、柱神の加護を受け、栄えてきた豊かな国であり、大切な友好国なのだ。

その支配者一族に連なる少女を、田舎貴族の跡取りに過ぎない男が玩んだ挙げ句に捨てたなどということが広く知られたら……オーブエル家は、最後だ。

友好国との関係を悪化させかねない振る舞いをした家を、王家は許さないだろう。それ以上に恐ろしいのは、ガライラの反応だ。いったい、どんな報復を受けることになるか……。

（いや、待て。婚約……確かに婚約と言ったぞ。ということは、大公家は事を荒立てる気はないのか？　わたしがあの娘を妻に迎えれば、以前のことは不問に付すと、そういうつもりなのか……？）

確かに、それはありそうな話だった。

庶子であることはともかく、すでに懐妊している娘では、縁談をまとめるのは難しいに違いない。それぐらいなら、腹の中の子供の父親と――と考えたところで不思議はない。

唯一の円満解決の方法だ……ディエーンにとってもガライラにとってもイリアーナにとっても――そして、オーブエル家にとっても。問題なのは、自分にとってだけ、全くもって面白くないということだ。

（一夏の思い出を与えてやっただけのあの娘に、この先一生束縛されるというのか、しかもガライラ大公弟の娘という重石つきで!?　冗談じゃない）

出自にこだわる母親からは、オーブエル家の家格を上げるような花嫁を見つけるように言われていたが、実のところ、ニドヴァールにはそのつもりはなかった。

いや、ある程度は身分と財力のある娘を選ぶつもりではあったが、あくまで自分が優位に立てる相手を、と思っていたのだ。

自らの容姿と話術――巧言であるとは微塵も考えていないあたり、相当な厚顔である――に絶大なる自信を持つ彼にとって、それは容易いことのはずだった。現に、すでに数人の候補を見つけていた……自分に従順で、妻として、男爵夫人としての務めを忠実に果たすだろう娘を。

夫としての、妻への貞節という義務を果たすつもりなど皆目ないニドヴァールにとって、だから、いま聞かされた話は悪夢以外の何物でもなかった。

イリアーナの背景は、あまりにも大きすぎるのだ。

そして、その大きさゆえに、ニドヴァールは自分が逃れられないことを悟ってもいた。これまで自分が、便利に使ってきた権力というものを、今度は相手がこちらに対して行使してくるのだ。

目眩が、した。

見る見る顔を青ざめさせていくニドヴァールの様子に、ナルレイシアは、

(勝ったわ)

と思ったが、これはいささか気が早すぎたようだった。

というのも、思いもかけない伏兵がいたのである。

「失礼だが……ヴィル・ダカール？　貴女は少々誤解してらっしゃるのではないかな？」

そう言って、ニドヴァールの背後から進み出てきたのは、いかにも貴族の子息らしい、品のある青年だった。

ナルレイシアは彼のことを知らなかったが、先ほどスカルトードに、ニドヴァールと一緒にいる青年のことも耳打ちしてもらっていたので、それが何者かは知っていた。

イージニアン――ヴィシャール伯爵家の次男で、ニドヴァールの遊び仲間である。

一般の貴族ではよくあるように、後を継ぐ予定のない彼は、遠くない内に神殿に入る予定なのだという。

(未来の神官さまってわけね。だけど、友人の悪行を止めようともしないひとが、どんな神官になるって言うのかしら？)

そう思いはしたものの、今夜限りの女優である彼女は、さも意外なことを聞いた、という風に目を瞠った。

「……誤解、ですか？」

戸惑った顔で、問い返す。

が。

内心、イージニアンの余裕たっぷりな様子が気に掛かっていた。

問いかける形を取りながら、彼女の言葉が誤解によるもの――あるいは策を弄したものだと確信しているかのような態度なのだ。

ここは下手に突っ込まず、相手に喋らせたほうがいい。素早く計算し――なにしろ、『なんちゃって女優』なのだ、化けの皮が剝がれる危険は冒すべきではない――彼女は困惑したように首を傾げた。

これは、ファティ・リンシャの「沈黙は金ですよ」という忠告の応用である。あくまで『恋の駆け引き指南』として伝授されたものだが、意外と利用範囲が広いのは幸いだった。

果たして、イージニアンは手持ちの札を明かしてきた。

「十年近く前のことだが、父が大使に任じられた関係で、わたしは一時期ガライラに住んでいたことがあるのだよ。ディエーンではあまり知られていないようだが、かの国では、大公弟殿下が若かりしころ、最愛の婚約者を亡くされ、一時期は生きる希望をも失われた話は、知らぬ者はないほどに有名だった。今でこそ立ち直られたものの、亡くなられた婚約者であるティーリーシア姫以外の女性を妻に迎えるつもりはないと公言なさっておいでだ。聞けば、件のイリアーナ嬢は十九歳だとか……？　そのころの殿下は、周囲が危ぶむほど、絶望の淵に立ってらしたはずだ。とても、他の女性と恋を語らってらしたとは思えない。だから、なにか誤解があ

るのではないかと思ったのだ」

とんでもない爆弾発言だった。

しかも、それは先ほどナルレイシアとマルルーネが放ったそれを鎮火するに充分な威力を持っていたのだ。

これまで一度も社交の場で見かけたこともない小娘ふたりの言い分と、ヴィシャール伯爵家の子息であり、しかもガライラに住んでいたこともあるイージニアンのそれ――周囲がどちらを信用するかは、火を見るよりも明らかだった。

馬鹿君こと ニドヴァールなら、間違いなく勝ち誇った顔で口にするだろう内容を、しかし彼は気の進まぬ様子で告げている。そのあたりも、周囲の信用を集める要因のひとつとなっていた。

（ううぅ……まずいわ）

初耳だといわんばかりに目を瞠りながら、ナルレイシアは焦った。

イリアーナがガライラ大公弟エリエンスの隠し子であるというのは、そもそも大嘘だ。但し、その嘘が嘘でなくなる工作は、既に為されている。エリエンス自身が――ネイスリーズから、事情と計画を聞いた途端――大の乗り気で協力してくれたのだから、これは疑いようがない。

その設定の詳細も、ナルレイシアとマルルーネの頭には完璧に入っている。

だから、イージニアンに反論すること自体は可能なのだ。
しかし、ここで問題がひとつ生じる。
いくら完璧な『当時の事情』を語ったところで、自分たちが口にしたのでは、恐らく周囲は信じてくれないだろうということだ。
いや、それどころか、当事者でもない自分たちが、なぜそこまで深い事情を知っているのかと、逆に不審を招きかねない。
（うーん、どうしたら……）
そんなナルレイシアの焦りを見透かしたように、イージニアンが穏やかな口調で続けた。
「すぐには信じられないだろうが、ガライラに行ったことのある人間なら、誰もが知っていることだ。イリアーナ嬢とご両親は、なにかタチのよくない輩にいいように……失礼、巧妙に騙された可能性がある。お知り合いなら、すぐにこのことを知らせた方がいいのではないかな？」
（巧妙なのはあなたの方でしょう!?）
思わずナルレイシアは怒鳴りそうになった。
イリアーナとその両親が、詐欺師に騙された被害者だという体裁を整えた上で、そうであるならこの婚約話は無効だと、周囲に印象づけているのだ。そればかりか、イリアーナとその家族が犯罪に荷担した可能性を示唆してさえいる。

たとえ騙されてのことだとしても、実の娘であるイリアーナを、ガライラ大公弟の隠し子であると言いたてたとなれば、身分詐称の罪に問われるのは明白だった。ここで自分たちが弱気な態度を見せれば、周囲は彼の言い分こそ筋が通っていると納得するに違いない。

イージニアンは、明らかにそれを狙っているのだ。

タチの悪い馬鹿君の友人が、タチの悪い馬鹿とは限らない——これまでニドヴァールが、あれほど女性に不誠実でありながら、大きな騒ぎを起こさずにすんだのは、あるいはイージニアンのおかげかも知れない、とナルレイシアは思った。

(タチが悪いって点では同類かもしれないけど、頭の中身の出来は雲泥の差みたいね。もしかしたら、イリアーナに渡したっていう、抜け道ありの念書のことも、このひとが入れ知恵したのかも……)

ありそうな話だった。

ちらりと見遣ると、ニドヴァールは明らかにほっとした様子で、血色も戻り掛けていた。それればかりか、悪友の援護で最大の危機を逃れられそうな風向きを感じたのか、図々しくも勝ち誇るかのような笑みさえ浮かべていた。

(あ・な・たは突っ立ってただけでしょう!? なに、自慢げな顔になってるのよ……ほんとーに、どこまで最低な男なのかしら)

そうは思ったものの、このままではまずいのも事実だった。

流れを摑んだイージニアンに、すっかり話をまとめられてしまう。ここは男性陣にこの危機を知らせるべきだった。

素早くマルルーネに合図を送る。一瞬目が合っただけで、幼なじみはこちらの意図を察し、『信号』を出してくれた。

「そんな……！」

怒りとも驚きともつかない声を洩らし、次の瞬間、マルルーネはよろり、と僂げにその場に崩れ落ちた——今夜の彼女は、もしかしたら名女優と言っていいかもしれない。

「マルルーネ！」

ナルレイシアが名を呼びながら、倒れた友人のそばに跪こうとしたとき、スカルトードが駆けつけてきた。

「ヴィル・セライ！」

そうして、倒れたパートナーを、いとも優雅に抱き起こし、問いかけるような目をナルレイシアに向ける。

「……ヴィル・ダカール。ヴィル・セライはいったいどうなさったんですか？」

ナルレイシアは、困惑の面持ちで答える。

「恐らく、あまりにも思いがけないことを聞かされて、衝撃を受けたのだと思います……わたしも、驚きましたから……」

言いながら、ちらっとイージニアンを見遣る。
これで、相手にすべきが誰なのか、スカルトードには伝わったはずだ。
果たして、彼は咎めるような目をイージニアンに向け、尋ねた。
「失礼ですが、貴方は？　ヴィル・セライになにを仰ったのです？」
そんなスカルトードを見つめるイージニアンの双眸に、一瞬戸惑うような光が揺れた。
なにかが引っかかる――だが、それがなになのかがわからない――そんな感情の揺れを、しかしすぐに制して、イージニアンは自らの優位を示すかのように不快げな顔で問い返した。
「本当に失礼な話だ。初対面の相手になにかを尋ねるなら、まずは名乗ったらどうだい？　礼を失した振る舞いをして、連れの女性にまで恥をかかせるのは感心できないな」
（失礼なのはあなたの方でしょ！）
叫びたかったが、ナルレイシアはじっと我慢した。
スカルトードの邪魔をするようなことになっては大変だ。ここは彼に任せた方がいい。
緑がかった金髪の青年は、軽く頭を下げ、謝意を示した後、名乗った。
「スカルトード・ナネリーアン・フォスカリクと申します。改めてお尋ねいたしますが、ヴィル・セライに、いったいどのような話をなさったのでしょう？」
「フォスカリク……？」
イージニアンがまた、考えこむような顔になったが、今度はその背後にいた連れの方が黙っ

ていなかった――スカルトードの名乗りから、彼が貴族でないことを知ったからだろう。
「無礼な物言いをするな。その娘は、従姉の家族が犯した、大それた罪を知って驚いて倒れただけだ。こちらのせいにされるのは心外だ」
友人の助勢のおかげで、危機を回避できたと確信したのだろう、ニドヴァールの態度は尊大なものだった。
予想はついていたのだろうに、スカルトードは怪訝そうに首をかしげた。
「……罪？」
何のことを言われているのかわからない――心底そう思っているようにしか見えない彼の様子に、ナルレイシアは内心感嘆の声を上げた。
（スカーさんったら、大した名優だわ！）
調子に乗った、ニドヴァールの口は止まらない。
イージニアンが止めようとするのも聞かず、得意満面に『イリアーナの家族の罪』を口にしたのだ。
「その娘の従姉は、あろうことかガライラの大公弟殿下の隠し子などと騙ったのだ！　エリエンス殿下が、二十年前に最愛の婚約者を失い、絶望の淵にあったころ、他の女性に愛を語っていたはずがないとも知らずにな！」
その刹那、スカルトードの瞳がきらりと光った――ナルレイシアは確かに見た。

「おい、ニドヴァール！」

慌ててイージニアンが止めるが、もう遅い。

一度口から飛び出した言葉は、二度と喉の奥には戻らない。

（馬鹿だ馬鹿だとは思っていたけど、ほんとーに、このひと馬鹿だったんだわ）

ナルレイシアは呆れた。

何のために、イージニアンがイリアーナの家族の罪を匂わせるだけに留めたのか、彼は全くわかっていないのだ。

万が一の可能性があることを、彼は認識すらしていない。

また、仮にもかつて恋人であったイリアーナのことを、『あの娘』呼ばわりした上、罪人扱いしたのだ。そんな自分の態度に、周囲の目が、一気に冷ややかなものに変わったことに、はたして彼は気づいているだろうか……。

しかし、ナルレイシアたちにとって、これが絶好の巻き返しの機会であることは間違いなかった。自ら墓穴を掘ったニドヴァールがどうなろうと、もう知ったことではない。

（スカーさん、やっちゃってください！）

彼女の心からの――但し、声には出していない――声援を感じ取ったのか、スカルトードはますますの名優ぶりを発揮した。

困惑も露わな顔で、彼は首をかしげながらはっきりと言い切ったのである。

「おかしなことを仰います。イリアーナ嬢は、エリエンス殿下が認めた、歴とした殿下のご息女ですよ？　わたしの大伯父が、殿下から直接聞いた話ですから、間違いありません」

ここで引けばよかったものを、精神的な天国と地獄の繰り返しに、すっかり――なけなしの――冷静さを失っていたニドヴァールは、ご親切にも、さらなる墓穴を掘ってくれた。

「馬鹿なことを言うな！　大公弟殿下ともあろう方が、爵位も持たない相手に、そのような重大事を洩らされるはずがない！　さては、貴様とその大伯父とやらが首謀者か!?　我が家に近づいて、一体なにを企んでいるんだ!?」

この場に集っている者の内、半数以上がその『爵位を持たない』人々であることも……きっとニドヴァールは忘れているに違いない。

場の空気は、どんどん冷たくなっていく。

「ニドヴァール！」

せっかくの助勢を台無しにされた格好のイージニアンは、しかし友情を発揮し、馬鹿がこれ以上馬鹿を晒さないように、その口を閉ざさせようとしたが……最早、遅きに失した。

しかも、だめ押しとばかりに、スカルトードが偶然を装って、着けていた仮面をはらりと落としたから、さあ大変。

露わになった、人間とは思えない神々しい美貌に、周囲からどよめきが起こった。

つられたように、その素顔を直視してしまったイージニアンの顔が――凍り付いた。

「ま……さか……」

先ほどまでの、あざやかな話術が嘘のように、固く、掠れた声で、イージニアンが呻く。

「ガライラ……の……」

得たりとばかりに、スカルトードがほくそ笑んだ——いや、実際は、微かに笑みをたたえただけだったのだが、ナルレイシアの目には、そう見えたのだ。

「どうやら、大伯父をご存知のようですね？　それでは、ご友人に説明してはいただけませんか、わたしも大伯父も、イリアーナ嬢の婚約者である彼に対し、何ら含むところなどないと」

素顔のスカルトードは、迫力満点だった。

表情を険しくしているわけでもないのに——その身から放たれる圧倒的な空気ゆえに、背筋が凍り付くほどに恐ろしいのだ。

しかし、完全に頭に血が上っているニドヴァールにだけは、それがわからなかったようだ。

「見え透いた嘘をつくのも——」

いい加減にしろ——とでも言いかけたのだろうか。

しかし、彼はその言葉を、最後まで言い切ることはできなかった。

「ニドヴァール！」

ぴしゃり、とイージニアンが彼を制したのだ。

「それ以上、こちらの方と大伯父君を侮辱するのは、わたしが許さない」



味方であるはずの友人の突然の変節に、ニドヴァールが目を白黒させた。
所詮、ニドヴァールはイージニアンの袖に隠れ、守られてきた世間知らずの愚劣な子供にすぎなかったのだ――そのことが、はっきりとわかるやりとりだった。
呆然として、いつまでも口を開こうとしない馬鹿な友人に、近い将来神殿に入ることが決まっている青年は、哀れみをこめた目を向け――告げた。
「スカルトード卿の大伯父君は、エリエンス殿下と親密でいらしても、なんの不思議もない御方なのだ……ガライラの御柱の君なのだから」
この瞬間、今度こそナルレイシアたちの勝利は確定した。
ニドヴァールは、陸揚げされた魚さながら、口をぱくぱくさせることしかできない様子だった――。

8

いったい、何が起こったというのか。

ニドヴァールにはわけがわからなかった。いや、わかってはいた……わかってはいたが、認めたくなかったのだ。

（なぜ、イージニアンが……？）

突然、掌を返すような態度に出たのか――。

これまで、一度として、ニドヴァールはイージニアンが味方であることを疑ったことがなかった。遊学の名目でロスタロイドに出てきて間もなく、母の知己である女性に連れられて行った小さな夜会で知り合って以来、どんなことが起こっても、イージニアンは自分を助けてくれてきたのだ。

タチの良くない連れ合いを持つ女性と親しくなりすぎてしまったときも、遊びを遊びと割り切れない無粋な女性に詰め寄られたときも、妻の私的な生活に干渉したがる狭量な男につけ狙われたときも――全部、イージニアンが力を貸してくれたおかげで、大きな問題とならずに

すんだ。

時々、口うるさく生活態度を改めるよう言ってくることだけは閉口ものだが、ニドヴァールはイージニアンのことを、得難い友人だと思ってきたのだ。

その彼が、自分のことを許さないと言う。

理由は――明らかだ。

(この男の大伯父が、ガライラの柱神、だと?)

そんな馬鹿な、と言いたいのはやまやまだったが、イージニアンが認めている以上、真実に違いなく、だとしたら、無礼な物言いは控えるべきだ。

もっとも、すでに遅きに失する事態ではあるのだが、怒りにまかせて口にした暴言の数々を、彼はよく覚えていなかった。

むっつりと、口を噤んだニドヴァールだったが、しかし、イージニアンは尚も意外なことを言い出した。

「わかったのなら、謝罪を」

指図するようなことを言われたのも初めてだったため、彼はますます驚いた。

しかし、確かに他国の柱神とその縁者を、悪し様に言ったことのまずさはわかるので、神妙に頭を下げた。

「知らぬこととは言え、数々の無礼な言葉、心よりお詫びいたします」

爵位は持たずとも、柱神の縁者である以上、目の前の男には相応の敬意を払う必要がある。柱神を怒らせて、いいことなどなにもないのだから。

しかし、スカルトードと名乗った青年は、ニドヴァールの謝罪を受け入れようとはしなかった。

冷ややかな目を、彼とイージニアンに向け、低いが、よく通る声で告げたのだ。

「大伯父はともかく、わたしへの謝罪は不要です。それより、イリアーナ嬢への、誤った推測に基づいての発言を速やかに撤回すると同時に、謝罪していただきたい」

この言葉を耳にした瞬間、ニドヴァールは自分が大変なことを口にしてしまったことを思い出した。

ガライラの柱神なら、大公弟から直接事情を聞いていたとしても不思議はない。つまり、イリアーナは真実、『大公弟殿下のご息女』ということになる。そんな彼女を罪人扱いしてしまうなど、取り返しのつかない失態だ。

どんな対応をすれば、この失点を取り返せるのか、皆目見当がつかず、ニドヴァールは途方に暮れた。

そんな彼に助け船を出してくれたのは、一度は突き放すような態度を取った友人だった。

「もちろん、何度でも謝罪いたします。そもそも、わたしが事情に通じているかのようなことを言ったがために、彼が誤解したのです。咎はわたしが受けるべきかと……」

（イージニアン……）

窮地における、友人のありがたさを痛感しながら、ニドヴァールは目が潤みそうになった。見放されたと思ったのは、早合点だったのだ。イージニアンはいつも通り、自分のために力を尽くしてくれる、得難い友人のままなのだ……。

じーんとしていたニドヴァールだったが、突き刺すようなスカルトードの視線に気づき、青ざめた。

（まさか、殿下に報告するとか言い出すのではないだろうな）

自分のしでかしたことが、そうされても仕方ないほどのことだという自覚はさすがにあるため、ニドヴァールは内心だらだらと冷や汗を流した。

戦々恐々とする彼を見つめていたスカルトードは、何を感じたのか、ふう、と息を洩らし、そうしてこう告げた。

「根拠がどうあれ、自らの婚約者に対し、あまりにも相応しからぬ発言だとは思いますが、イリアーナ嬢の心身のためにも、このことで騒ぎ立てるような真似は致しますまい。ですが、くれぐれもお願いしたいのですが、イリアーナ嬢とそのお子のこと、大切にしていただきたいものです。エリエンス殿下は、婚約者の姫を亡くし、失意の底にあった折、そばで支え、慰めてくれた……なのに突然姿を消してしまった誠実で優しい侍女のことを、ずっと捜していらしたのです。彼女が消えた理由がわかったとき、すでに彼女は不帰の客となっており、残された幼

い御息女の行方もまたわからなくなっておりました。殿下は、本当にようやく、イリアーナ嬢を見いだされたのです。彼女を幸せにするためなら、なにも惜しくはないと……大伯父に語られたと聞いております」

淡々とした口調で語られた内容に、周囲からほう、とため息が洩れた。

「素敵……」

とつぶやく、若い女性の声も聞こえた。

しかし、ニドヴァールはそれどころではなかった。

イリアーナが間違いなく大公弟の娘であるというだけでも厄介だというのに、たっぷりと実の父親の思い入れを受けているとなれば、この先、一切下手なことはできないことになる。エリエンスが言ったという台詞は、裏を返せば「不幸にしたらただではすまさない」ということなのだから！

ナルレイシアも似たようなことを言っていたのだが、その後の目まぐるしい事態の変転のせいで、すっかり忘れていたのだ。

重石などという言葉で片付くものではない。イリアーナの存在は、最早頑丈な枷に等しい。結婚しても、火遊びをやめるつもりは皆目なかったニドヴァールは、絶望に呻きそうになった。

助けを求めるように、イージニアンを見たが、これればかりは頭の回る友人もお手上げとばか

りにかぶりを振った。いかにヴィシャール伯爵家がディエーンの名門であっても、一国の支配者一族を相手に渡り合える力はない。

逃げ場は、ないのだ。

ニドヴァールはがっくりと肩を落とした――。

数日後――。

下町近くの食堂兼宿屋『踊る赤馬亭』の二階の一室――本来は、家族用の客室らしいのだが――にて、祝賀会が開かれた。

面子はもちろん、今回の件で協力しあった共犯……もとい、仲間の五人である。

乾杯の音頭を取るのは、発起人であるランディータだった。

「では、にっくき馬鹿男への報復の成功と、ロスタロイドから駆逐できたことを祝って――」

乾杯、といく前に、さすがに口を挟まずにはいられなかったナルレイシアだった。

「ランディータさん、それ、少し違うと……」

スカルトードがうんうん、と同意する。

「そうですよ、ランディータ。その前に、ちゃんとヴィル・ダカールとイリアーナ嬢が、無事

名誉を回復したことを入れなくては」

……どうやら、ニドヴァールが近日中にロスタロイドを去ることになったことを、彼も心底喜んでいるらしい。

「そりゃそうか。では改めて――」

ランディータが酒の入った杯を掲げ、乾杯の声を上げた。

「かんぱーい！」

「「かんぱーい！」」

若干一名、声を上げなかったが、皆気にしなかった。

「ふ、ふふふ。すかっとしたわ……思い出しても笑いが止まらない。あの馬鹿男の阿呆面ったら！　気絶してるふりしてたから、薄目開けてしか見られなかったのが残念だけど」

従姉を傷つけた男への報復を成し遂げた喜びに、マルルーネの瞳はきらきらと輝いていた。

「ほんとーにね。わたしも遠くから見物させてもらってたけど、ありゃあ、なかなか見られないぐらい見事な阿呆面だった！」

愉快でならないと言わんばかりのランディータの言葉に、ナルレイシアは「ええ!?」と驚きの声を上げた。

「ランディータさん、いらしてたんですか？」

「当たり前じゃないか、わたしが、あんな面白い見せ物、見逃すはずがないだろう？　幸いア

ジュアール子爵の催し物に関しては手づるがあったもんでね、潜り込むのは簡単だったよ。あんたらを下手に動揺させちゃいけないと思って、遠くから見守ってたってわけさ」

「……はあ、そうですか」

と言いながら、ナルレイシアはひとつ、疑念を抱かずにはいられなかった。

（もしかして、わたしたちの素人芝居も含めて、『面白い見せ物』扱いされてるんじゃないのかしらん？）

いかにもランディータがやりそうなことに思えたが、尋ねるのはやめておいた――「決まってるじゃないか」などと即答されたら、立ち直れないほどの恥の記憶が甦りそうだと思ったからだ。

「おまけに、こちらの期待以上の墓穴を掘ってくれましたしね、あれではこの先、ロスタロイドにいたとしても、どこにも顔は出せないでしょう。遊び仲間だった者もほとんど離れたことでしょうしね」

スカルトードの口調は淡々としていたが、その絶世の美貌には、紛れもない喜色が浮かんでいた。

大伯父であるネイスリーズとともに、詐欺師扱いされたことが、よほど業腹だったと見える。

（ま、あの馬鹿君に同情の余地はないから、ロスタロイドにいられなくなったと聞いても、痛

くも痒くもないけれど……）

ただ、ひとつだけ、気に掛かることがある。

「でも……本当に、いいのかしら」

ぽつり、とつぶやいたナルレイシアに、他の面々の視線が集中した。

「どういうこと？　なにか、心配事でもあるの、ナーシア？」

尋ねてきたマルルーネに、彼女は胸に宿る不安を告げた。

「イリアーナのこと。本当に、あんな馬鹿君と結婚して、幸せになれるのかしら……？　そりゃあ、ガライラの大公家に連なる令嬢として、オーブエル家でも丁重に扱われるでしょうけど――相手があれ、じゃあ……伴侶に対する誠実さは、到底望めないと思うんだけど」

本音を言うなら、イリアーナとニドヴァールの結婚を、心から祝福する気にはどうしてもなれないのだ。

なにしろ、相手は筋金入りの身勝手の権化だ。故郷では母親に、このロスタロイドでは頭の回る悪友に、甘やかされるだけ甘やかされてきた。

人間は生涯の内で、何度でも生まれ変わることができる――という考えは、ナルレイシアが最も好きな言葉のひとつだが、ニドヴァールに関しては当てはまらないような気がしてならないのだ。もっと言うなら、彼にぴったりだと思う言葉は――三つ子の魂百まで、だったりする。

なかなか自分に靡かない女性の心を得るために、最初から抜け道を用意した結婚の念書を持ち出したことといい、挙げ句妊娠した恋人に、自分の子とは限らないと言い放ったり、最悪なのは、イリアーナを罪人扱いしたことだ。

あの曲がりくねった性根は、叩いて直るものとは思えない。

(矯正できるものなら、強制的にでも……とは思ったけれど……)

自分たちのしたことは、結果としてイリアーナを不幸に導く行為だったのではないのか——そう思えてならないのだ。

そんな彼女の悩みを、一刀両断したのは、幼なじみの少女の言葉だった。

「仕方ないじゃない。どんなにろくでなしでも、イリアーナがどうしてもあの馬鹿男がいいって言うんだもの」

……そう。

そうなのだ。最初は、イリアーナをエリエンス殿下の隠し子に仕立て上げる計画などなかった。ただ、ひたすらにニドヴァールをぺしゃんこに叩き潰して、これまで玩んだ挙げ句、ポイ捨てしてきた女性たちに謝罪させ、その名誉を回復させるだけの話だったのだ。

そのための計画を、ランディータとスカルトードとガスカールが立てた際、一応報告だけはしておくべきだと、マルルーネが故郷の伯父一家に、大まかな計画を伝える手紙を出したところ……返事が、『否』だったのだ。

理由は簡単――あれほどの仕打ちを受けながら、イリアーナはニドヴァールを愛しており、その彼女から、『お願いだから、ニドヴァールさまにひどいことをしないで』という、直筆の手紙が届けられたとあっては、当初に立てた計画――完膚無きまでに叩き潰す――を実行に移すわけにはいかなくなったのだ。

最大の被害者であるイリアーナの意を汲むと同時に、数多の女性を不幸にしてきたニドヴァールに鉄槌を下すことのできる案というのが、今回用いたものだった。というか、どんなに頭を絞っても、それ以外実現可能な計画は立てられなかったのだ。

だから……いまさら疑問を口にするのは、ある意味卑怯だ、ともわかっている。

それでも、ナルレイシアは、本当にこれでよかったのか――振り返らずにはいられない。

「でも……」

仕方ない、と割り切れない彼女の煮え切らない態度に、イライラしたのか、マルルーネがきつい声を上げた。

「もうっ！　過ぎたことをぐだぐだ、ぐだぐだと鬱陶しいわね。イリアーナのことなら心配ないって言ってるでしょ!?　なんのために、そこの渋面公爵に動いてもらったと思ってるのよ。借金だらけのオーブエル家の財産や権利のほとんどは、公爵のおかげで、いまやエリエンス殿下のものとなっているのよ。つまり、オーブエル家としては、イリアーナを大事にせざるを得ないわけ」

初耳だったナルレイシアは、当然驚いた。

「そうなの!?」

思わずガスカールを振り返り、問いかけると、ありがたくない渾名をつけられた青年は、渋々といった体でうなずいた。

「本当だ。代々の当主の杜撰な経営のおかげで、男爵家の権利や財産はずいぶん減っていた上に、残った分もほとんどが抵当に入っている状態だったからな、わたしの代理人を差し向けるだけで、借用書は確保できた……実際に金子を用意してくださったのは、エリエンス殿下だが、友好国とはいえ、他国の貴族の所領を侵したと見なされるような行為は慎むべきだということで、わたしが代理人として管理することになった。これ以上、無駄な借金を増やさせないために、監視役を置いたことだし、マルルーネ嬢の言う通り、よほど血迷いでもしない限り、イリアーナ嬢に無体を働くような真似はしないだろう。もちろん、万が一のことを考え、人員を配備してはいるがな」

確実に、ナルレイシアの心配をひとつ減らす言葉だった。

それでも、彼女の心は晴天とは言い難かった。

不安材料は、ほかにもあるのだ。

そんな彼女の心中を読み取ったように、スカルトードがやさしく声をかけてきた。

「姑である男爵夫人とイリアーナ嬢との関係についても、心配はいりませんよ。ガライラの

大公家と縁続きになれると知った途端、見事に掌を返してイリアーナ嬢を歓迎したという話ですから」

いかにも『高貴』に弱いあの夫人らしい振る舞いだった。

「そうそう。准貴族出身の婿養子との間に生まれたあの馬鹿男より、大公家の血を引いた孫のことを溺愛するのは間違いないってば。まー、あの夫人に子育て任せたりしたら、父親そっくりのろくでなし二号が出来上がるのは目に見えてるから、イリアーナもそのあたりは注意するでしょうし、問題ないわ。本性知った女性たちに続いて、今度は溺愛の塊だった母親にも心変わりされるわけよ……くふふ、ふ。様を見ろってのよ」

酒が入っているせいか、マルルーネは本音丸出しだった。

ランディータが、「そうだ、そうだ」と合いの手を入れる。

「天罰、天罰～」

「天罰バンザーイっ！」

酔っぱらいふたりの暴言は、已む気配を見せない。

「マルルーネ、ランディータさんも……」

それも違うから――と、言いかけたナルレイシアは、下手に口を出したことを、この後大いに悔いることになった。

「なによー、ひとりだけいい子ぶってるんじゃないわよ、ナーシア」

「そうそう、楽しくお酒を飲みながら、楽しく本音を暴露しちゃえーっ！」

口撃の矛先が、自分に向いたことに気づいた彼女は、男性陣ふたりに目で助けを求めたが——あっさりと無視された。

誰もわざわざ、酔っぱらいの攻撃の的になりたくはないということだろう。

（ううぅ……この薄情者どもめがーっ！）

恨んでやるー、とふたりを睨みつけていると、マルルーネが無理矢理ナルレイシアの顔を自分に向けさせた。

「さー、ナーシア。わたしの目を見て！　きりきり、正直に白状しなさい！」

……なにやら、つるし上げの様相を帯びてきた。

「は、白状って……」

「もちろん、あの馬鹿男が墓穴掘った挙げ句、阿呆面晒したときのことよ！　あなた、ほんのかけらもいい気味、とか思わなかったと言い切れる？」

ずばっと斬り込まれ、ナルレイシアは思わず「うっ」と詰まった。

「正直に～、正直に～」

ランディータが陽気な声で、マルルーネを援護する。

「そ、それは……」

こくん、と喉を鳴らし、彼女はあのときのことを思い出した。



会場中から冷たい視線を投げかけられ、呆然と立ちつくしていたニドヴァール――その姿を目にしたとき、心を満たした……あの思いは。

「まあ……仕掛けた罠に、気持ちいいぐらい、ぴたりと嵌まってくれて、なんか達成感覚えたっていうか……」

ナルレイシアは自覚していなかったが、彼女も実はけっこう、酒が入っていた。

そのせいだろう――恐ろしい本音が、ぽろりとこぼれ落ちた。

「……罠仕掛けるのって、面白いなって……蜜の味、って感じ？」

この言葉を聞いた瞬間、介抱役に回るために、控えめに飲んでいた男性陣ふたりは、ぎょっとして身を引いたのだが……。

すでにいい気分になっている、女性陣が気づくことはなかった――。

エピローグ

ガライラ、大公弟宮――通称冬宮。

その一室で、大公弟エリエンスは、広い机に紙を広げ、ああでもない、こうでもないと、唸りながらペンを走らせていた。

その紙に、なにが書かれているのかと言えば――。

「衣装箪笥十棹、夜会服三十着、外套二十着、首飾り……それに合わせて耳飾りと指輪……

……もしかして、これはイリアーナ嬢の嫁入り道具かい？」

呆れたような声を上げたのは、ネイスリーズである。

自分が訪れたにも拘わらず、駆けつけて来ないエリエンスの様子を見るために、彼の部屋まで足を運んだわけだが……目にした彼の姿は、かなり意外なものだった。

声をかけられて、ようやく気づいたらしいエリエンスが、驚いた顔で柱神を見上げた。

「ネイスリーズ！　いらしてたんですか、貴方がいらしたら、真っ先に知らせるように言い置いていたのに、何をやってるんだ……」

侍従への不満を洩らす大公弟に、ネイスリーズはきちんと事実を伝えた。
「何度も知らせに行ってくれたよ。ところが君ときたら、書面と睨めっこで、生返事しかしない……もしかしたら、国の一大事かも、と侍従長が顔を青くしていたよ。後で謝っておくことだ」
「それは……悪いことをしたな。つい、楽しくて――」
思わず洩れた言葉が、紛れもない本音であることに気付き、ネイスリーズは柔らかな笑みを浮かべた。
「それはよかった」
まさにそのために、ネイスリーズはイリアーナのことを話したのだから。
「ネイスリーズ、貴方にはいくら感謝しても足りません。年頃の美しい娘を持つ父親の気分を味わえる上に、兄からのうるさい攻撃もなくなりましたからね」
台詞の後半部分には、心底安堵した響きが宿っていた。
「あの子が生きていたら、してやりたかったこと全部、するつもりなのですよ。イリアーナには迷惑がられるかもしれないが、それは我慢してもらいましょう」
あの子が生きていたら――それは、エリエンスとネイスリーズしか知らない事実だ。
スカルトードたちには話していないが、エリエンスが絶望の底に沈んでいたとき、そばで支え続けた侍女がいたというのは、つじつま合わせの作り話などではない。死に引き寄せられる

エリエンスの心を、懸命に此岸に引き留めた優しく誠実な娘は、彼の子を身ごもると、何も告げずに姿を消した。

エリエンスは必死にその行方を捜したが、見つけたとき、彼女はすでに帰らぬひととなっていた……そう、スカルトードたちが夜会で披露したのは、その大部分が現実にあった話だったのだ。

事実と違うのは最後だけ――彼女が残した娘もまた、幼い内に亡くなっていたということ……それだけだ。

だから、エリエンスにとって、今回持ちかけられた話は、単なる『ごっこ遊び』ではなかったのだ。

言葉通り、彼は生涯、イリアーナのことを娘として愛し、守り続けるだろう。

その時間が、彼の心の深い傷を、ゆっくりと癒してくれることを……ネイスリーズは願わずにはいられなかった。

午後のお茶の時間のこと――。

満面の笑みをたたえるファティ・リンシャを前に、ナルレイシアは内心だらだらと冷や汗を

流していた。

「ファ、ファティ・リンシャ……それは……？」

いつもなら、茶器が並べられているはずのテーブルは、今日は別のものに占領されている。見るからに上質な紙に、美麗な文字が躍る封筒の束――全部、ナルレイシア宛のものだ。

「あなたへの招待状よ」

弾む語尾から察するまでもなく、ファティ・リンシャはこの上なくご機嫌だった。

「先日の夜会で、あなたのことを知った方々が、是非ゆっくりと話したいと仰ってねえ。丁寧な書面をわたくしに下さったの。喜ばしいことだから、もちろんとお返事したら、早速こんなに届いたのよ」

あなたが人気者で、わたくしも嬉しいわ――。

にこにこ笑う老婦人には、あの夜会に出席した本当の理由を告げていないだけに、断るのは難しそうだった。

（皆さん、あの夜会での大騒ぎのことや、ガライラの大公弟殿下の美しい悲恋の話を聞きたがってらっしゃるだけなんです――だから、お断りさせて下さいって、ああ、言えたら……言えたらいいのに……っっ！）

もちろん、言えるわけがないのだけれど。

「あ、あの、ファティ・リンシャ……」

「そうそう、衣装を新調しなくちゃね。夜会服と昼間の訪問着に……ああ、これから寒くなるから、毛織りの外套も欲しいわね。あとはマフに、手袋に……」

ナルレイシアはぎょっとした――まさに、夜会服を一着しか持たないことを理由に、断ろうとしていたのと、そんなに誂えていたら、本を買えないどころか、借金達磨になってしまうせいだ。

「と、と、とんでもありません！　わたし、この歳で破産したくありません！」

真っ青になって叫んだ彼女に、ファティ・リンシャは「なにを言ってるの？」と不思議そうに問い返してきた。

（まさか……）

いや～な予感ほど、よく当たる。

果たして、銀髪の老婦人は、ころころと笑いながら、こう続けたのだ。

「せっかく、可愛い孫娘をあれこれ着飾らせて楽しむお祖母ちゃんごっこが出来たのよ？　たった一度だなんて、切ないわ。伊達に長生きはしていないから、蓄えは充分あるし」

確かに、数百年、浪費せずに貯金すれば、相当な額の蓄えとはなるだろう……が、問題はそこではない。

（いやーっ！　あの仮縫い地獄にだけは戻りたくないーっっ！）

ナルレイシアの心の叫びは、しかし当然ファティ・リンシャには届かない。

「縁はね、大切にしなければいけませんよ、ナーシア。こればかりは、望む時に得られるとは限りませんからね。書物は確かに素晴らしいものですけど、恋愛までそこで片付けようとするのは感心できないわ」

（わたしの場合、悪縁が圧倒的に多いから、逃げても罰は当たらないと思うんですけどー）

そう言いたかった。

が。

「まあ、近場で間に合わせるつもりなら、無理にとは言わないけれど……どちらも、一長一短あるけれど、水準的には低くはないし」

一瞬、なにを言われたのかわからなかったとしても、それはナルレイシアの罪ではないはずだ。

（近場……近場って）

脳裏に浮かんだふたつの顔に、ナルレイシアはテーブルに突っ伏した。

すっかり気力を失ってしまった彼女をよそに、ファティ・リンシャは次々と、お勧めの招待主の名を挙げていく。

この後、ナルレイシアに——いろいろな意味で——地獄が訪れたのは……言うまでもない。

ナルレイシアが今回の件で、学んだことは、ひとつ。
すなわち――。
『人を呪(のろ)わば穴二つ』
……人の不幸――たとえそれが自業自得(じごうじとく)でも――を、喜んではいけないのだ。

それは初夏の蒼穹（そうきゅう）の下

ある晩秋の昼下がり

それはある晩秋の昼下がりのこと――。

日が翳るには、今しばらくの時間が残されているロスタロイドの街を、ナルレイシアはあれこれ迷いながら歩いていた。

なにを迷っているかといえば、雇い主兼家主兼保護者である老婦人へ贈る品についてだ。

先日、ちょっとした計画のため、ある貴族の主催する仮面舞踏会に出席したところ、そこで起こった騒ぎが原因で、ナルレイシアはさまざまな集まりへのお誘いがかかるようになったのである。

その際、着ていく服がないという理由で、丁重に断ろうとしたのだが、その時件の老婦人――ファティ・リンシャが「待った」を掛け、何着もの服を新調してくれたのだ……それも、素人目にも高価だと一目でわかる生地のものばかり、評判の仕立て屋に頼んで。

値段を聞くのも恐ろしい、行き過ぎた『ご厚意』を、勿論ナルレイシアは断ろうとしたのだが、外見のゆうに十倍は生きているファティ・リンシャに、口で勝てるはずもなく、なし崩し

に受け取ることになってしまった。

本音を言えば、お誘いを断るいい口実を潰すことになった老婦人の『好意』が純粋なものなのかどうか、と疑う気持ちがないわけではないが、恩は恩である。しかも、それ以前に、命の危機から救われたこともある身としては、彼女の意向には最大限添う努力を心に誓っていたため、居心地の悪さを我慢して、せっせと社交の場に顔を出して、出して、出して……ようやく一段落ついたところで、ずっと気にかけていたことを実行することにしたのだ。

それが、ファティ・リンシャへのお礼の贈り物、だ。

ドレスや外套や手袋や襟巻きに対する返礼としては、ささやかすぎる品しか用意できそうにないが——相応のお礼をしようと思ったら、一生とはいかずとも、確実に数年はただ働きの日々を送ることになる——それでも、少しでも喜んで貰えそうなものを……と、思ったら、なにを贈ればいいのか、迷いの園に入り込んでしまったのだ。

（最近お膝が痛むと仰ってたから膝掛けを、とも思ったんだけど、すでに極上の品をいくつもお持ちだし、肩掛けも同様だし……お菓子、はガスカールやスカーさんがお土産に食べきれないほど持ってくるし。花……も、世界中から集めたのが、庭を埋め尽くしてるし、宝石なんか手が出ないし、香水は……うーん、香りは好みが難しいし……）

本当に、なにを贈ったらいいのかわからない。

（そりゃあ、手巾一枚だって、喜んで下さるだろうけど、どうせなら、やっぱりもっと、わた

しが贈ったからってだけじゃなく喜んでいただけるものをお贈りしたいし……）

頭はすでに、ぐるぐる状態になりつつある。

だから、だろう。いささか……いや、かなり前方への注意が散漫になっていたナルレイシアは、次の瞬間、どん、と小さくはない衝撃を受けた。

「きゃ」

目の前で、大きな封筒を両手に抱きしめていた褐色の髪の女性が、小さく声を上げ、よろけて膝をついた。

自分がぶつかったからに違いない。

「ご、ごめんなさい！　大丈夫ですか!?」

謝りながら、手を貸そうとしたナルレイシアは、女性の足下に落ちた大きな封筒から、紙の束が何枚かこぼれているのに気付き、咄嗟にそちらを押さえにかかった。

結った髪が乱れるぐらい、風が強かったからである。大事そうに封筒を抱えていたのだ、風に攫われたら大変だ――と思い、紙の束を回収にかかったナルレイシアだった。

が、何気なく目を落とした彼女は、紙に書かれた文字の羅列――つまり、文章に関心を惹かれた。

『美しい真っ直ぐな金の髪は、天上の光の川を思わせる輝きを放ち……』

別の紙に書かれた文章は――。

『……一生屋敷から出ることなく、屋敷の者以外の誰とも触れることなく、そうやって生きていくしかないというのか……』

また、別の紙には。

『……その、内側から輝く紫の宝玉の双眸が示す通り……』

ナルレイシアはこくり、と喉を鳴らした。

（これ、小説の原稿だわ）

しかも、本の虫としての勘が強く訴えかけてくる。

（多分……きっと、面白い）

思った瞬間、心は決まった――これは、読まずばなるまい、と！

「あ、あの……？」

傍目には、風に攫われそうになった原稿の束を手で押さえたまま、凍り付いたように動かなくなった――目線はしっかり動いていたのだが――少女に、逆に心配そうに、倒れた女性が声をかけてきた……次の瞬間。

ナルレイシアは手早く原稿を封筒に収めると、膝をついたままの女性の手を、ひし、と握りしめた。

「本当にごめんなさい！　お怪我はありませんか、もしよろしければ、わたしがお世話になっているお屋敷が近くにあります、是非、休んで行ってください！　それで、図々しいお願いな

んですが、この原稿、読ませていただけませんか!?」

台詞の後半部にこめられた情熱――迫力と言い換えてもいいかもしれない――には、並々ならぬものがあった。

そして、ナルレイシアの気迫に圧倒されたらしいその女性は――。

「え、あの……その……はい、お言葉に甘えさせていただきます」

と、答えたのである。

女性は、ウィリオナ・コーエンスと名乗った。

小説家を目指しているのだという。

「恥ずかしながら、祖国のガライラでは、わたくしが原稿を持ち込んでも、読んでくれる出版社がもうないのです。家族には、いいかげん諦めるように言われたのですけど、どうしても諦めきれなくて……これを最後に、と思い切って、ロスタロイドを訪ねてきたところだったんです」

ナルレイシアの、迫力たっぷりの『招待』に応じたウィリオナは、ファティ・リンシャの屋敷の一室で、そんなことを苦笑まじりに語った。

「まあ」

驚いて、ナルレイシアは目を瞠った。

原稿の売り込みに、国境まで越えるとは、生半なことではない。

ウィリオナの、小説に対する打ち込みようがわかるというものだ。

同時に、おかしいとも思った。ちらりと目にしただけなので、確実にそうとは言い切れないのだが、彼女の本の虫としての本能は、ウィリオナの小説が面白いことを確信している。

なのになぜ、ガライラの出版社は、彼女の作品を採用しようとしなかったのか……。

感情を隠すのが得意とは言い難い——というか、はっきり言って苦手だ——ナルレイシアの表情から、考えていることを見抜いたのだろう、ウィリオナが微苦笑した。

「実は、以前に書いていた作品は、あまり……その、読者の共感を得られない、得られたとしても数は望めない、と指摘されるものばかりでしたの。個人的好みが強く出過ぎた、と言えばいいのか……」

なんとなく、わかったような気がしたナルレイシアだった。

小説を読んでいると、時々、作者の思い入れやこだわりが強すぎて、素直に作品世界に入っていけないことがあるのだ。読むに当たって、作法を求められているという感じだ。

（でも、さっき目にした原稿からは、そんな感じは受けなかったけど……）

指摘された欠点を意識して書いたのが、あの作品だというわけだろうか——。

はたして、ウィリオナはその通りのことを告げた。

「これが最後のつもりと、思って書いたのが今回の作品なのですわ。とても大切な……大切な思い出をもとに、書き上げました。恐らく、二度と同じようなものは書けないでしょう」

大切な思い出――と口にするとき、ウィリオナの薄茶の瞳が微かに翳った。

安易に踏み込んではいけない――そう思わせる表情だった。

ナルレイシアは悩んだ。

(軽々しく「読ませてください」なんて、言ったらいけなかったかしら?)

しかし、そんな彼女の心中を読んだわけでもないだろうに、ウィリオナは「だから……」と続けた。

その声は、心なしか嬉しそうだった。

「ナルレイシアさんが、読みたいと言ってくださった時、嬉しかったのです。わたくしの方こそ、お願いしますわ。ナルレイシアさん、どうかこの作品を読んでください、そして、忌憚のない意見を聞かせていただけませんか?」

願ってもないことだった。

ナルレイシアは即座に頷いた。

ウィリオナの差し出す、分厚い原稿の束を受け取ると、彼女はすぐに、作品世界に入り込んでしまったのである――。

それは初夏の蒼穹の下

ウィーナがリィアンと会ったのは、彼女が十歳の時のことだった。
両親を事故で一度に失い、母方の叔母夫婦に引き取られたウィーナは、そこで初めて、従妹である少女と対面したのだ。
リィアンを目にした瞬間、ウィーナは恐怖にも似た強い衝撃を受けた。
信じられない、とウィーナは思った。
目の前にいる、少女の存在そのものが、現実のものとは思えなかったのだ。
それは……五歳になったばかりの少女は、完璧としか言いようのない、一分の隙もない『美』そのものだったのだ。
美しい真っ直ぐな金の髪は、天上の光の川を思わせる輝きを放ち、長い睫毛に縁取られた煙る緑の双眸は、神々のためにだけ存在するという、伝説の聖翠湖とは、このような色彩をたたえているに違いないと確信させる美しさ。
そばかすどころか、黒子ひとつない肌は、薄紅の薔薇を溶かし込んだかのような、微妙にし

て絶妙な色合い。
その唇は、まさに薔薇の蕾のよう――。
従妹だと、確かに叔母は言った。
けれど、そんなことが果たしてあるのだろうか――こんな、神々が手ずから丹精して生み出したとしか思えない、美の具現が、自分と血の繋がる人間であるなどということが!?
凍り付いたように、ウィーナは立ちつくした。
そんな彼女の前で、幼い少女は礼儀正しい挨拶の言葉を口にした。
「初めまして、お従姉さま。リィアンといいます。どうか、仲良くしてくださいね」
にこりと笑う顔は――究極に、可愛らしかった。
衝撃というものは、新たなそれによって、上書きされてしまうものらしい。
恐ろしささえ覚えた美貌の従妹の笑顔に、ウィーナは一瞬で、魅了された。

◇◇◇

リィアンの美点は、その整った容姿だけではなかった。
ともに暮らし始めてすぐに、ウィーナは従妹の尋常でない聡明さに気づいた。
なんと言っても、十歳の自分と同じ授業を受けながら、すぐに理解、吸収していくのだ。こ

れで、授業の内容に、時折ついていけずに悶々とするウィーナを馬鹿にするような言動を取ったなら、反感も湧いただろうが、素直で心やさしいリィアンは、決してそのような真似はしなかった。

顔よし、頭よし、性格よし――二拍子揃った従妹に対し、ウィーナは自分でも意外なほど、屈折した感情を抱かなかった。以前住んでいた家の近所にいた、少し可愛い幼なじみには、時々嫉妬を覚えていたというのにだ。

多分、とウィーナは考えた。

ひとは、自分より『少し』容姿に恵まれていたり、『ちょっと』頭がいい相手には、羨みや妬みを覚えるが、あまりにかけ離れた次元の存在を前にすると、とてもそんな気が起こらなくなるのだ。

言い方は悪いが、最初から白旗を揚げているようなものだ。

もっとも、ウィーナはそのことを、ちっとも情けないとは思わなかった。彼女は、五歳年下の従妹の笑顔を見た瞬間、自分が全面降伏したことを自覚していたからだ。

「リィアンは、本当に綺麗ね」

子供の手には、重すぎるのではないかと思われる、立派な装丁の書物を読んでいる従妹に見とれながら、ウィーナはうっとりとつぶやいた。

本に夢中になっている間、リィアンは外部の音には全くの無反応なのだが、ウィーナは全然

構わない。いつまでも、いつまでも、従妹を見つめていられるからだ。

しかし、この時は、少し様子が違った。

びくり、とリィアンが顔を上げたのだ。

そうして、こちらが驚くほど真剣な顔をして、こう言い出したのだ。

「お従姉さま、駄目。その言葉は、使っては駄目なの。約束して、これからは、その言葉をわたしに言わない、って」

妙なことを言う、とは思ったが、リィアンは怖いほどに大真面目だ。

わけがわからないまま、ウィーナはうなずいたが、納得できたわけではない。

叔母のネネシアにそのことを尋ねてみたが、芳しい答えは貰えなかった。

仕方がないので、家人の女性に訊いたところ、変わった答えが返ってきた。

「詳しくは知りませんが、呪いのようなものだと聞いた覚えがあります」

「……呪い？」

問い返したウィーナに、その女性は頷いた。

「リィアンお嬢様は、あの通り……な御方でしょう？　生まれたときから、それはもうお美しい赤さんでらしたものですから、旦那様も奥様も、却って心配になられたそうです。綺麗すぎるお子様は、幼くして神の御許に戻るという言い伝えもありますからね。だから、言霊を抑えるために、リィアンお嬢さまには、容姿についての褒め言葉は聞かせないようになさったとい

うことです。言霊とかって、あたしはよくわかりませんが、無闇に褒めちぎらないのはいいことだと思いますよ。あたしの姉が勤めているお屋敷のお嬢様ときたら、小さいころから可愛い、綺麗と褒められつづけてきたものだから、すっかり鼻持ちならない高慢な性格に育ったというんですもの。そりゃあ、リィアンお嬢様なら、どれほど高慢な態度を取られても、鼻につくことはないでしょうけど、あの素直な性格のまま、育っていただきたいですからねえ」

全くもって、同感だった。

とは言え、一方で、叔母たちの懸念は杞憂ではないか、と思わずにはいられなかったのだが。

あれほどに真っ直ぐな気性の少女が、綺麗、可愛いと言われたぐらいで、天狗になるとは思えない。

叔母たちは、少々過敏になっているのではないか、とウィーナは思った。

けれど、あれほどに綺麗な娘を持ってしまったら、心配せずにはいられないだろうこともなんとなく理解できるから、彼女は賢く沈黙を守った——その時は。

◇◇◇

これは、放ってはおけない、とウィーナが思ったのは、彼女がその屋敷で暮らすようになっ

て、三ヶ月が経とうとする頃のことだった。

いつものように、小さな体には不釣り合いな、小難しい文学全集を読んでいるリィアンのそばで、ウィーナは家庭教師から出された宿題に取り組んでいた。

前述した通り、リィアンと彼女は同じ教師から同じ授業を受けているのだが、宿題に手こずるのは決まってウィーナの方だった。そんな彼女のそばで、リィアンが書庫から持ち出した本を読むようになったのは、一緒に授業を受けるようになって、間もなくのことだ。

最初は、問題を解けずに唸っていたウィーナに、幼い従妹はヒントを出してくれたりしたのだが、五歳も年下の少女に手助けされたことに、少しばかり落ち込んでいたのを、どこかで知ったらしい。以来、口を挟むことはせず——もちろん、ウィーナの方から助けを求めたときは別だが——ただただおとなしく、読書に勤しむようになったのだ。

その日、宿題に出された問題は、かなり応用を必要とする、ひねくれ……もとい、難解なもので、これは長引きそうだ、とウィーナは覚悟した。

季節は春——広い屋敷の、これまた広い庭には、花々が咲き誇っている。

おまけに、今日はいい天気だ。

「リィアン。いつも待ってくれてるのは嬉しいけど、ずっと家の中では退屈でしょう？　庭に出て、散歩でもしてきたら？　風が気持ちいいわよ？」

当分、自分は問題にかかり切りになるだろうことを確信してのウィーナの言葉に、しかしリ

イアンは愛らしい仕種でかぶりを振った。
「大丈夫。ちっとも退屈じゃないから。それに、お従姉さまと一緒にいられる方が嬉しいもの」
はにかみながら、そう答える少女の愛らしさたるや、視界の至福としか言いようがないものだった。
ああ、なんという可愛らしさだろう！
言葉を尽くして褒め倒したいところなのに、それが許されないとは、辛いものだ。
綺麗、可愛いのたぐいの言葉は禁句――だから、ウィーナは頭を絞ってほかの褒め言葉を探し出す。
「なんて嬉しいことを言ってくれるのかしら。じゃあ、少しだけ待っていてくれる？　この問題だけ解いたら、一息入れることにするから。一緒に庭を散策しましょう？」
リィアンの緑の瞳が、ぱっと輝いた。
「本当!?」
どうやら、外に出たくないわけではなさそうだった。
これは、頑張って早くこの問題をやっつけなくては、とウィーナが思っていると、不意にリィアンが瞳を翳らせた。
「あ、でも、駄目だわ。今日は、お客様がいらっしゃるから……」

ああ、挨拶をしなければならないのね――。

単純に、ウィーナはそう思い、慰めるように言った。

「なら、ご挨拶が終わってからにしましょう。少し遅くなるかもしれないけれど、夕暮れ時のお庭も綺麗よ」

けれど、リィアンは小さくかぶりを振るばかり――。

「リィアン？」

どうしたの――と、問いかけようとしたとき、部屋の扉がノックされた。

「ああ、やっぱりここにいたのね」

ほっとしたような顔で、入って来たのは叔母のネネシアだった。

「ウィーナ、宿題は後でいいから、着替えて、お客様をお迎えする準備をなさいな。きちんとご挨拶、できるわね？」

尋ねるというより、確認を取るような叔母の言葉に、「はい」とうなずいて、ウィーナは立ち上がった。

歩き出して、ふと違和感を覚えた。

リィアンが、椅子に座ったままで動こうとしないのだ。

「リィアン……？　どうしたの？」

もしかして、小さな従妹は人見知りなのだろうか――。

そんなことを思っていると、叔母が何でもないことのように、「リィアンはいいの」と言う。信じられず、ウィーナは目を瞠った。

「え？　でも……」

引き取られた自分が、お客様に挨拶するのに、この屋敷の娘であるリィアンが姿を見せないというのは、不自然ではないだろうか。

それとも、この家では、貴族のように、ある一定の年齢に達するまで、子供は人前に出ない決まりでもあるのだろうか。

だが、それを聞くことは出来なかった。

「さ、急いで」

と、叔母が促したからだ。

優しく、家族同然に扱ってくれるとは言っても、引き取られてまだ二ヶ月のウィーナは、遠慮なしに踏み込むことができなかった。

「……はい」

小さくうなずいて、彼女は部屋を出た。

幼い緑の瞳の従妹が、いつまでも自分の背中を見つめている——その視線を感じながら。

◇◇◇

「街に出かけましょう」

ウィーナの唐突な提案に、リィアンはきょとんとした顔になった。

本当に驚いているのがわかる——並外れた聡明さゆえに、どことなく大人びた顔をすることの多い従妹の、子供らしい表情を目にすることができて、ウィーナは内心喜んだ。

「お従姉さま？」

なにを言われたのかわからない——。

そんな顔のリィアンに、ウィーナは自分の部屋から持ち出してきた、いくつもの品を広げて見せた。

手先が器用だった母が作ってくれたボネットは、自分には小さくなってしまったが、リィアンにはちょうどいいはずだった。

それから、街に出かける時、よく着ていた木綿の、動きやすいドレスも、母の手製だ。

どれもこれも小さくなったのに、持ってきたのは、母の形見と呼べるものが、それぐらいしかなかったからだ。両親が死んだ後、集まった父方の親族は、いつの間にか財産を山分けし、金にならないいくつかの品と、ウィーナだけを残して立ち去ってしまったのだ。

母方の叔母であるネネシアが心配して駆けつけて来てくれなかったら、ウィーナは呆然としたまま、生まれた家から追い出されていたかもしれない。

結局、財産の大半は親族に取られてしまったけれど、叔母夫婦の尽力のおかげで、ウィーナはいくらかの遺産を受け継ぐことができたらしい。尤も、後見になってくれた叔母が、成人するまでは管理してくれることとなったため、実感は湧かないのだが。

そういう事情もあり、ウィーナにとって、本当に形見と思えるのは、母の手製の服やボネットや手袋ぐらいだった。

大切な品だったが、リィアンに着せるのなら、否やはない。

ウィーナは従姉の頭にボネットを被せ、美しい金の髪を、その内側に隠した。ちょうどいいと思っていたが、少し大きかったらしく、リィアンの顔の三分の一が隠れてしまったが……それが却って良かった。

「ほら。こうすれば、誰もリィアンがリィアンだなんて、わからないわ。それでこの服に着替えたら、誰から見ても街の子供よ。一緒に街を歩きましょう」

ね？

と、問いかけると、リィアンは困ったように首を傾げた。

従妹が迷う理由が、ウィーナにはわかっていた。

先日の来客の件で、不思議に思ったことを、叔母ではなく家人の顔見知りの女性に尋ねたと

ころ、驚くべきことを聞かされたからだ。

リィアンは、生まれてこの方、この屋敷の敷地から出たことがないというのだ！

病弱なわけではない。また外に出るのを怖がっているわけでもない。なのに、屋敷の敷地内の庭に出るのさえ、ひとりでは許されずにいたのだと。

聞いたとき、ウィーナはなんの冗談かと思った。

全ての子供が、外で遊ぶのを好むわけではないことぐらいは知っている。以前住んでいた家の近所には、食事中はおろか、お手洗いの中にまで、大のお気に入りの精密な馬車の模型を持ち込むと言う変わり者の少年がいて、彼は外で皆と遊ぶより、その模型をいじっているのがなにより楽しいと言っていた。

リィアンが、その少年――ほどではなくとも――と同じ理由で、本を読むのが好きで、好きで、好きで……だから、外に出ることに積極的でないのなら、無理強いするつもりはなかった。

ただ、外の楽しさを知らないまま、というのは問題があるとは思ったので、好奇心を刺激する話題で釣りながら、それとなく屋敷の外の世界のことを教えていこう、とは思っていたのだが。

しかし、外に出ることを、周囲から止められている、と聞いては黙ってはいられなかった。

叔母たちの心配はわかる。

リィアンほど美しい少女を、ウィーナは現実はもちろん、どんな絵画や彫刻のなかにも見たことはなかった。

そんな彼女を、街中などに出したら、どんな輩に目をつけられるか知れない。

外界から完全に遮断することで、叔母たちは確かにリィアンを守ろうとしているのだ――それは、理解できる。

だが――。

リィアンは、育つごとに美しさを増していく、大輪の花の蕾なのだ。

今は隠せても、近い将来、その美と芳香は、周囲の注目を集めてしまうに違いない。そして……それは、あと十年も先のことではない。

その時――。

いまのまま、温室の中で育てていては、どんな危険を引き寄せることになるか――。

考えただけでぞっとする。

だから、ウィーナは叔母たちの意に反することを承知で、リィアンを街に連れ出すことにしたのだ。

「さあ、着替えて」

自分より頭の回転の速い従妹を黙らせるために、ウィーナは先手必勝とばかりに、一方的に話を進めた。

「え、え、でも」

いつも、自分よりずっと落ち着いている従妹が、焦っている様子が珍しく、その子供らしい顔が見れたことが嬉しくて、ウィーナはくすくす笑った。

「いいから、いいから。それとも、わたしと街に行くのは、イヤ？」

途端に、リィアンは勢いよくかぶりを振った。

「そんなこと！」

でも——と、彼女が続けるのはわかっていたから、ウィーナはそこまで言わせずに、勝手に話を決めることにした。

奇跡のように美しく、奇跡のように聡明で、奇跡のように素直なリィアンは、我を通すということを、一切せずに生きてきた少女だったのだ。

「わたしが！　リィアンと一緒に出かけたいの。わたしのわがままなんだから、リィアンは気にすることなんて、ないの」

そう言うと、リィアンは驚いたように目を瞠り、ややあって半ば瞼を伏せた。

つぶやく小さな声が、薔薇の蕾のような唇から洩れ出る。

「……嬉しい……」

心からの言葉であることは明らかだった。

きっと、ずっと、リィアンは外を見たかったのだ。だが、彼女を心配するあまり、過保護に



走る両親を前にしては、言えなかったのだろう。
五歳の子供が、周囲の大人たちを気遣っていたのだ。
そんなリィアンが、思わず洩らした言葉――その言葉が聞けただけで、ウィーナは冒険する価値があると思った。
「さあ、行きましょう」
差し出した手に、従妹の小さな手が重ねられる。
緊張のためか、微かに震えるその指先を、ウィーナはそっと優しく包んだ。

◇◇◇

ぱしん、と乾いた音が空を震わせる。
ウィーナは、打たれた頬を押さえ、呆然と叔母を見つめた。
「……なんということをするのです」
怒りに震える声で、ネネシアはウィーナを詰った。
彼女の傍らには、その夫である叔父が、意識を失ったリィアンを抱きかかえて立っている。
「わたし……」
言葉を紡ごうとするが、なにをどう言えばいいのかわからない。

そもそも、なぜこんなことになったのか、ウィーナには、それすらわからないのだ。

リィアンに、屋敷の外の世界を見せてあげたかった。だから、散策中に偶然見つけた、塀の崩れた部分から、こっそり抜け出そうとしたのだ。

その穴は、うまい具合に蔦で隠れていたから、誰にも見つからないと思っていた。

ボネットでリィアンの髪を隠し、普通の街の子供が来ているような、木綿のドレスを着せて出かければ、きっと大丈夫だろう、と。

だが、その計画は実行に移るとほぼ同時に潰えた。

初めて屋敷の外を見ることができるという期待に、緑の瞳を輝かせていたリィアンが、好奇心のまま、塀に触れた瞬間、信じられないことが起こったのだ。

ばしり、となにかがぶつかり合うような音と、リィアンが悲鳴が重なった。

「きゃあぁっ！」

「リィアン！」

倒れる従妹の体を受け止めようと、ウィーナは手を伸ばしたが、それは叶わなかった。

間に合わなかったのではない、突然空中に火花が出現し、彼女の手を拒絶したのだ。

それと同時に、小鳥の悲鳴とも、音階の狂った笛のそれともつかぬ、甲高い音が屋敷全体に響き渡った。

血相を変えて叔母夫婦と家宰の老人が駆けつけたのを見て、ウィーナは自分が、なにかとん

でもないことをしてしまったことを直感した。
そして、それは正しかった――。
叔母は……倒れたリィアンと、立ちつくすウィーナの姿を目にしたことで、事情を悟ったのに違いない。
つかつかと、ウィーナに近づくと、白い繊手を振り上げた。
初めて、叔母に打たれた。
しかし、ウィーナの心を占めたのは、そのことに対する驚きでも、悲しみでもなかった。ネネシアの呻くような声で紡がれた言葉がもたらした――恐怖だった。
「あなたは、リィアンを殺すつもりなの!?」
確かに、叔母はそう言ったのだ――。

◇◇◇

その日の夜、ウィーナはすでに腫れはひいたものの、打たれた衝撃ゆえの痛みを抱え、眠れずにいた。
そんな彼女の部屋の扉を、叩く音がした。
訪れたのは、ネネシア――その顔を見た瞬間、思わず身を引いたウィーナに、彼女は一瞬目

を瞠った後、唇を噛みしめた。
ウィーナは、はっとした。
自分の態度が、叔母を傷つけたことを悟ったからだった。
「叔母さま……」
謝りかけ、しかし、それも違うような気がして、彼女は途方に暮れる。
そんなウィーナに、ネネシアは近づき、自らが打った頬に、そっと手をのばし、触れた。
そして――。
「ご免なさい」
双眸から、涙をこぼしながら、叔母が謝る姿を目にし、逆にウィーナは慌ててしまった。
「お、叔母さま!?　叔母さま、よしてください！」
ネネシアに打たれたことは、確かにショックだった。
だが、あの必死な叔母の様子を見れば、自分がなにも知らずに、禁忌を犯したらしいことは想像できる……それも、小さな従妹の命を危険にさらすような、恐ろしいそれを、だ。
無知であることの恐ろしさを、ウィーナは十歳ながら、身を以て感じていた。
知らなかったからこその、罪。
理路整然と考えたわけではなかった。だが、振り返ったとき、なにより一番問題なのは、自分が無知であったことだと、判断できるぐらいには、ウィーナは考察力を備えていた。

自分は恐らく、あの愛すべき小さな従妹にとって、非常に危険なことをしようとしたのだ。
その行為とは、多分……屋敷の外に連れ出すこと。
屋敷の外に出てはいけない、絶対の理由が、あの小さな従妹にはあるのだ、きっと。
それを知らずに、勝手に行動したから、あのような騒ぎが起こってしまったのだ。
つまり――理由なり事情を知らないままでは、同じことを繰り返しかねないということ……
断じて、肯じることは出来ない。
自分が……自分の、無知から生じた好意が、従妹の不幸を呼び寄せるなど、決して許せることではない。
出会って、ほんの数ヶ月――。
それでも、もう、リィアンはウィーナにとって、かけがえのない存在となっており、二度と同じような過ちは犯さない、と心に決めていた。
「謝らないでください、叔母さま。でも、理由もわからず、責められるのは、もういやです。事情を知らないために、リィアンを危険に晒すのは尚更、いや」
だから、とウィーナは決意を以て、一歩踏み込んだ。
「だから、教えてください、リィアンが背負っている事情を」
ネネシアは、すぐには答えなかった。
答えられなかったのかもしれない。

だが、やがて、深い息をひとつ洩らすと、彼女は「ええ」とうなずいた。
「そう……わたくしは、あなたに語るために、ここを訪れたのかも知れないわ……」
囁くような、小さな声だった。
にも拘わらず、叔母がそれから語った言葉は、一言も洩れることなく、ウィーナの脳裏に刻みこまれた。
それは、叔母――ネネシアが嫁いだ、このフォークス家に代々伝えられる、悪夢のような因縁だった。
いや、すでにそれは、『呪い』と呼んでいいかもしれないほどの、悲惨極まりない話の数々だったのだ。

◇◇◇

「このフォークス家には、呪いが掛けられているの」
大真面目な顔で、そう言った叔母の顔を、ウィーナはまじまじと見つめてしまった。
到底信じられず、「呪い？」と問い返す声には疑念がたっぷりと混じっていた。
同じ字で『呪い』と読む言葉に関しては、馴染みも深く、身近なものとしてつきあってきた覚えがあるウィーナだったが、その恐ろしい響きを持つ言葉に関しては、近づいたこともな

い、無縁な存在だという認識しかなかったのだ。
そんな、彼女の反応は、すでに予想済みだったのだろう——ネネシアは「やはりね」と言わんばかりの諦め顔で目を伏せた。
ウィーナは焦った。
叔母のその顔から見て、このまま説明してももらえないまま、話を終いにされそうだと直感したのだ。
「呪いって、どんな呪いなんですか!?」
必死な顔で問いかけてきたウィーナに、ネネシアは意外そうに目を瞠った。
あるいは、詳細な説明なしに、話を終いにするつもりでいたのかもしれない。
だが、その反面、誰かに知っていてほしい、とも思っていたのか——。
ネネシアは、口を開いた。
「このフォークス家には、時々リィアンのような……つまり、人間とは思えないほど美しい、神々の落とし子のような子供が生まれるの。あなたも気づいていたでしょう、リィアンがわたしたち両親のどちらとも似ていないことは?」
確かに、ウィーナは最初から気づいていた——叔母も叔父も、整った容貌の持ち主ではあったが、リィアンのそれは次元を異にするものだったからだ。
けれど、それがどう呪いに繋がるのだろう?

首をかしげたウィーナに、ネネシアは沈痛な面持ちで語った。
「神々さえ、手放したことを惜しむような美しい子供は、精霊や邪なる者たちにも狙われやすいの……特にこのフォークス家に生まれた、そうした子は、これまでほぼ例外なく悲惨な運命を歩んできたのよ」
そう言い、叔母はその例をいくつか挙げた。
精霊たちに愛されすぎたせいで、彼らに攫われ、眷族とされた者。
精霊や神々の世界に近づきすぎて、人であることを魂が忘れ、ついには人間としての生を手放してしまった者。
邪なる者に攫われ、言葉に尽くせぬ悲惨な目にあい、命を落とした者。
その美貌に心奪われた者の執拗な求愛を退けた結果、歪んだ独占欲に支配された男によって正視できない殺され方をした者。
耳にするだけで、背筋が寒くなるような話ばかりだ。
ウィーナは知らず、唇を噛みしめていた。
「……そんな」
つぶやく声が、虚ろに響く。
もし、あの小さな従妹が、そんな目に遭ったとしたら――？
考えることさえ堪えられない。

「だから……だったんですね」

得心が行き、ウィーナはつぶやいた。

美しい、綺麗という言葉を封じることで、リィアンの美貌が言霊の力を受けて、さらに輝くことがないように抑え、彼女を屋敷から外に出さず、客人の目からさえ、隠すことで、邪なる者たちの関心を引かぬようしていたのだ。

誰かの目に触れてしまえば、リィアンの存在が、広く知られてしまうから――。

そうして、叔母たちは幼いリィアンを、ずっと守ってきたのだ。

だが、とウィーナは思った。叔母たちは、これから先も、同じことを続けていくつもりなのだろうか、と。

リィアンは、一生屋敷から出ることなく、屋敷の者以外の誰とも触れることなく、そうやって生きていくしかないというのか。それもまた、悲惨な運命とは呼べないだろうか――。

そのことを尋ねると、ネネシアはそんなことにはならない、と答えた。

「大いなる御方が、リィアンを助けてくださいます」

大いなる御方――オウム返しに繰り返したウィーナに、叔母は今度は微笑むだけで、答えをくれなかった。

ウィーナがそのひとを知るのは、もう少し先のことだった――。

◇◇◇

その日、フォークス家の屋敷は、朝から僅かな緊張感に包まれていた。
家人たちの様子から、どうやら身分の高い客人を迎えるらしいことはわかったが、誰に尋ねても、それが誰であるのか教えてはもらえず、ウィーナは首を傾げた。
公にはできないような御方が、お忍びでもいらっしゃるのかしら？
そう、思ったときのこと、「お従姉さま」と自分を呼ぶ、可愛らしい声が聞こえた。
「リィアン」
声のした方を振り返り、ウィーナは少し驚いた。
小さな従妹が、これまで見たことがないような、心底嬉しそうな顔で駆け寄ってきていたからである。
バラ色の頬を上気させ、リィアンはウィーナの腕に抱きついた。
「お従姉さま、お従姉さま。大兄さまがいらっしゃるのよ！　ああ、よかった。これでようやく、お従姉さまに、大兄さまのことを紹介できるわ」
はしゃぐリィアンの言葉に、ウィーナはおや、と思った。
「大兄さま……？　リィアンにはお兄さまがいらしたの？」

初耳だった。

しかも、『大』とつけているからには、下にもうひとりいるということだ。叔母が産んだのはリィアンひとりのはずだから、それはつまり――。

だが、それはウィーナの早合点だった。

ころころと笑いながら、リィアンが否定したのだ。

「違うの。本当のお兄さまではないの。血縁の方なのだけど、どういう繋がりなのか、ちょっと難しくて。何と呼べばいいのか迷っていたら、そう呼べばいいと仰ったの。とっても背が高くて、お綺麗な方なの。お従姉さまも、お会いしたらきっと驚くと思うわ」

くすくす笑う顔が、また凶悪なまでに愛らしい。

「そう……それは、お目にかかるのが楽しみだわ」

にっこり笑って答えながら、ウィーナは実は、従妹の言葉を信じてはいなかった。

とってもお綺麗な方――と、リィアンは言うが、リィアン以上に綺麗な人間がいるはずがないのだ。この従妹の顔に慣れた自分が、この先彼女以外の人物の美貌に驚くことはあり得ない――そう、彼女は確信していた。

だが、それは間違いだった。

「ああ、きみがウィーナだね」

訪れたそのひとは、彼女に眩しいまでの笑顔で、声をかけてきた。

緑がかった、不可思議な輝きを放つ金の髪。誰も知らぬ山奥の、澄んだ水をたたえた湖の色の瞳には、深い叡智が宿っている。

長い睫毛、高いが高すぎはしない鼻、笑みをたたえるためにあるとしか思えない唇――透けるような、白皙。

リィアンが神々の落とし子なら、そのひとは正に神々そのもののような、美しさと威厳を纏っていた。

奇跡の美を体現したそのひととリィアンが並ぶさまは、さながら天上の楽園における、神々の姿――。

その時ウィーナが受けた衝撃と感動は、言葉で表現できるようなものではなかった。

「お従姉さま」

くすくす笑いながら、リィアンがそのひとを紹介する。

「こちらは、わたしのお祖父さまのお兄さまの……」

その先、どう続けたらいいのかわからない様子のリィアンに、そのひとが助け船を出した。

「つまり、従兄弟より少し遠い親戚というわけだね。初めまして、ウィーナ。わたしはナーセナーズ・フォークス。君のことを聞いてから、ずっと会いたいと思っていたよ」

最初はその圧倒的な美貌に気を取られて気づかなかったが、そのひとは、声までも美しかった。

陶然と、その声に聞き惚れていたウィーナは、しかしそのひとの名乗りを聞いて、はっとした。

ナーセナーズ・フォークス。

つまり、このひとも、フォークス家の呪いを受けたひとりなのだ。

だが、二十歳をいくつか過ぎたぐらいに見えるナーセナーズに、叔母から聞いたような不幸の翳りは見えない。

そう言えば、とウィーナは思い出した。

叔母は、呪いのことを打ち明けてくれた際、『ほぼ例外なく』と言っていた。

ほぼということは、完全ではないということ――つまり、このひとは極めて稀な『例外』だったのだと考えていいのだろうか……。

そんな彼女の疑問に気づいたのだろう、ナーセナーズが目元を和ませながら告げた。

「生憎、件の呪いは、わたしを死の寸前まで追い詰めてくれたよ。だが、幸いなことにわたしは命を取り留め、おかげで少しばかり、変わった力を手に入れることができたのだ。そのことを、ありがたいと思うことは長らくなかったが、この子が生まれた時、初めて力を得たことに感謝したよ」

そう言い、ナーセナーズはリィアンの髪を、やさしく指で梳いた。

「不完全ではあるけれど、その力でこの子を守ることがかなったのだからね」

つまり、リィアンが屋敷から出ない限りは、邪なる者から守り抜くだけの術をかけることができたということなのだろう。

けれど、その先は――？

叔母に尋ねたときは、「大いなる御方が、リィアンを助けてくださいます」という答えが返ってきた。

ナーセナーズこそが、その『大いなる御方』に違いないと確信し、ウィーナは彼に疑問をぶつけた。

「……では、完全にリィアンを守る道は見つかったのですか？」

期待と願望を隠しきれずに問うた彼女に、ナーセナーズは残念そうにかぶりを振った。

「この世において、完全、完璧なものを見いだすことは能わない」

その言葉を聞いた瞬間、ウィーナの心は、絶望という名の虚空に呑み込まれそうになった。

すくい上げてくれたのは、冷たくなった指先を、小さな指で握りしめてくれた従妹の、心配そうな眼差しであり、ナーセナーズが続けた言葉だった。

「だが、努力次第で、完全に限りなく近い状況に持っていくことはできる……そう、あと二年弱……リィアン、わたしの可愛い薔薇の蕾、君が七歳にまるまでに、わたしは君を自由にしてあげよう」

リィアンが、はっとして目を大きく瞠った。

それはウィーナも同じことで、ふたりは同時にナーセナーズに問いかけていた。
「本当!?」
「本当ですか!?」
神のごとき美貌の青年は、ふたりを安心させるように、殊更ゆっくりと頷いた。
「本当だ、約束しよう」
「ああ！」
喜びと安堵で、ウィーナは思わずその場に座り込んだ。
「お従姉さま……」
本当なら、自分こそが歓喜の声をあげ、ナーセナーズに抱きついておかしくない——いや、そうしたかったに違いないリィアンは、しかしその素直で優しい心根のまま、ウィーナを気遣うように声をかけてきた。
なんといじらしく、可愛いのだろう！
感情を抑えきれず、ウィーナは小さな従妹の体を、力一杯に抱きしめた。
「よかった……よかったわね、リィアン……」
不安は、なかった。
彼ならば——ナーセナーズなら、きっと口にしたことを現実にしてくれる。
そう確信したウィーナの双の瞳から、大粒の涙がこぼれ落ちた。

幾筋も、幾筋も――溢れ出る涙を止める術を彼女は知らず、そうしてそんな彼女に抱きしめられたまま、リィアンは「ええ、ええ、お従姉さま」と繰り返し頷いた……。

◇◇◇

ナーセナーズが約束してくれてから、瞬く間に二年弱の年月は流れた。
ウィーナがフォークス家に引き取られ、三度目になる春が終わろうとしていた。
初夏になれば、リィアンは七歳の誕生日を迎える。そうすれば、もう屋敷に閉じこもる必要もなく、自由に外の世界を満喫できるようになるのだ。
それが嬉しく、待ち遠しくもあり、ウィーナの心は落ち着かなかった。
思うのは、七つになったリィアンに、なにを、どこを見せてあげるのか、そればかり。
「初夏の花……初夏に咲く花……なにがあるかしら？」
幸福な悩みに、ウィーナは頭を悩ませる。
出来れば、人の手の入らない、自然にある花がいい。
庭の花壇では再現できない、野原一面に咲き誇る花を、リィアンは見てみたいと言っているのだから。
「白詰草、カミツレ……少し遠出をして、山に入ったら、アマドコロも咲いているかも」

白詰草の花では、花冠が作れるし、カミツレは香草茶にしたら美味しい。
アマドコロはスズランに似ているけれど、毒性はないから、根ごと掘り出してきて、庭の木陰に移植するのもいい。
どれにしても、いい思い出になるに違いない。
一緒に出かけられるようになる日が待ち遠しい。けれど、それもあと半月足らずの辛抱なのだ。
「そうそう、市の立つ日に出かけるのもいいわね。あと、お祭りとかも……」
これまで外出できなかった分、小さな従妹には、綺麗なもの、楽しいものを山ほど見聞きしてほしい。
そんなことを考えながら、これからの心躍る計画を、あれこれと立てていた時のことだ。
不意に、扉を小さくノックする音が聞こえた。
「お従姉さま……」
扉から、顔を覗かせたリィアンは、なぜか青ざめ、思い詰めた顔をしていた。
「リィアン？　どうしたの？」
椅子から立ち上がり、そう尋ねたウィーナに近づくと、リィアンはぎゅっ、と彼女に抱きついてきた。
「リィアン？」

従妹の様子がおかしいことに気付きはしたが、ウィーナにはどうしてもその理由がわからない。

あと半月足らずで、リィアンは行動の自由を手に入れられるはずなのだ。ほんの先ほどまで、期待に顔を輝かせていたというのに――いったい、何があったというのか。

「どうしたの、まさか、具合でも悪いの？」

問いかけても、幼い従妹は答えない。

ただ、違うと言うように、小さくかぶりを振るだけだ。

ややあって、リィアンが呟いた。

「お従姉さま」

「なに？」

「……明日、街にご一緒してくれませんか？」

意外な言葉に、ウィーナは驚き、目を瞠った。

「明日って……リィアン。まだ、あなたは七歳には――」

なっていないのに――。

と、最後までウィーナは続けることはできなかった。顔を上げたリィアンの瞳には、うっすらと涙が浮かんでいたからだ。

「リィアン!?」

従妹が、可憐な外見からは想像できないぐらい、実は負けず嫌いであることを知るウィーナは、心底驚いた。

「何があったの!?」

「お母さまたちが話してらしたの……わたし、七つになったら、大兄さまのところへ行って、なにか修行しなくてはいけないんですって……」

思いがけない言葉に、ウィーナは言葉を失った。

そんな……あの方は、リィアンを七つまでに自由にすると約束して下さったのに――。

それとも、自分やリィアンは、ナーセナーズの言葉を、自分たちに都合良く解釈していただけなのだろうか？

それとも、彼が持つという不可思議な力を用いてもなお、リィアンを呪いから完全に解放することはかなわなかったのか……。

「大兄さまは好きよ、大好き。でも、大兄さまのところへ行ったら、お従姉さまとはなかなか会えなくなってしまう。色々、約束したのに……楽しみにしていたのに」

そう……ナーセナーズが、リィアンを自由にすると言ってくれたあの日から、自分たちはいくつも、いくつも、小さな約束を積み上げてきた。

リィアンが七つになって、自由に外に出かけられるようになったら――。

『街へ出かけましょう。可愛い小物を見て回って、途中で美味しいものを食べましょうね』

『お従姉さま、わたし、本屋さんに行ってみたいわ。お店中、いろんな本でいっぱいなのでしょう？　想像するだけでどきどきするわ』

『野遊びもきっと楽しいわ。春はレンゲ、菜の花、山には春蘭が咲いているし、初夏は新緑が綺麗よ。夏になったら小川で遊んで、秋は紅葉狩りに行きましょう』

『舞台劇や歌劇というものを観てみたいの。本でしか読んだことがないんですもの』

ひとつひとつは、本当に些細な願いであり約束だった。

けれど、それらが現実となる日を、自分たちはどれほど待ちこがれてきたことだろう。

それなのに――。

「お従姉さま。わたしは、どうしてもお従姉さまと一緒に街を歩いてみたい。髪は帽子に隠して、庭の作業をする時の服を着るわ。そうすれば、目立たないと思うの」

駄目かしら？

上目遣いに見上げてくる従妹は、相変わらず類を見ない愛らしさで、彼女に甘い自覚のあるウィーナは、つい頷きそうになった。

だが。

「だめよ、リィアン。ナーセナーズさまが張ってくださった結界がある限り、あなたを外に連れ出すことは出来ないのですもの。あなたはよく覚えていないでしょうけど、あの結界に触れた瞬間の、あなたの姿を思い出す度に、わたしは心臓が凍り付きそうになる……」

小さな従妹に反応し、発動した結界――。
弾かれた衝撃で、リィアンは悲鳴を上げ、意識を失ったのだ。
あんなことは、二度と決して繰り返すことはできない。
しかし、ウィーナの言葉に、リィアンは意外な答えを返してきた。
「そのことなら、大丈夫よ、お従姉さま。わたし、ちゃんと確かめたもの。確かに少し、びりびりするけれど、通り抜けられないほどではなくなってるわ。昨日、思い切って塀の外まで抜け出してみたけれど、大丈夫だったわ。笛みたいな音も鳴らなかったし」
「いつの間に……」
呆然と呟くウィーナに、リィアンは少しだけ得意そうな顔で笑った。
「だって、大兄さまは、わたしが七つになるまでには、と仰ったから。もうすぐ七つになるけれど、どんな感じなのかと思って。でも、お母さまたちの話を聞くまでは、誕生日まで、待つつもりだったのよ？　初めてのお出かけは、お揃いの服を着て、お従姉さまと……って、約束してたから。でも……」
リィアンの言わんとしていることは、明らかだった。
このままでは、約束どころか、ふたりで揃って出かけることさえ出来ぬまま、彼女はナーセナーズの元へ送られるに違いない。
交わした約束の、最初のひとつがかなえられるまで、この先、いったいどれほどの時間が必

要なのか、想像すらできない……。
リィアンの安全のためなのだとはわかっている。
わかってはいるけれど――。
「お従姉さま」
縋るような目で、リィアンが見上げてきた。
「……どうしても、駄目？」
その目に、その声に、いったい誰が逆らえただろう。
胸を締め付ける、強烈な愛しさのまま、ウィーナは気づけば答えていた。
「行きましょう」
と――。

◇◇◇

「リィアン！」
何度も何度も転びながら、それでも足を止めることなくウィーナは走り続けていた――とうに見えなくなった馬車の轍をたどりながら。
「リィアンっっ！」

転んだときに擦り剝いた掌からは、血が流れていたが、彼女は構わなかった。いや、怪我したことさえ気づいてはいなかったのだ。

ウィーナの脳裏を占めるのは、リィアンへの思いのみだった……帰り際、不意に現れた男たちに攫われてしまった、小さな従妹。

あっという間の出来事だった。

出かける前のリィアンの言葉通り、街の子供らしい服に身を包んだふたりが、屋敷を抜け出すのは拍子抜けするほどに簡単だった。

たった一度の、秘密の冒険であることを、ふたりともに知っていたから、心は尚更に浮き立ち、ふたりは夢中で街を楽しんだ。

屋台で買った揚げ菓子を、歩きながら頬張り、露店に並ぶ小物を見ては、互いに似合いそうなものを選びあった。

ひとしきり街を歩いて、日が西に傾いたころ、ようやく帰途についた。本当は、もっとリィアンに街を見せてやりたかったが、あまり遅くなっては、抜け出したことがばれる上に、屋敷の者たちに心配をかけてしまう。

幼い従妹も、気持ちは同じらしく、名残惜しそうな顔をしながらも、「そろそろ帰りましょう」というウィーナの言葉に素直に頷いた。

たった一度の秘密の外出——それは心の奥にこっそりとしまいこまれて、大切な宝物となる

はずだった。

……あの男たちが現れなければ！

フォークス家の屋敷へ帰る途中、通りから人の姿が絶えた途端、数人の男たちが突然駆け寄って来て、リィアンを攫ったのだ。

連れて行かせまいと、ウィーナは必死で男の腕にしがみついたが、邪険に振り払われてしまった。

従妹の名を呼びながら、彼女は懸命に男たちの後を追いかけた。

近くで待っていたらしい馬車に、男たちが乗り込んでも、諦めなかった。

リィアンを攫わせるわけにはいかないと、その一念で走りつづけた。

脳裏に浮かぶのは、リィアンの無邪気な笑顔――叔母から聞かされた、悲惨な運命など、あの従妹には似合わない。なにがあろうと、取り戻さなければならなかった。

「……リィアン……」

まずは、彼女がどこに連れこまれるのかを見届けなければならない。

そうして、大急ぎでフォークスの屋敷に戻り、このことを伝えるのだ。大公家とも親しくつきあっているフォークス家ならば、きっと有効な手だてを講じられるはずだ。

だから、早く馬車の後を追わなければならない……見つけなければ。

だが、しばらく走ったところで三叉路にぶつかり、ウィーナは絶望の声を上げた。

そこには複数の轍が走っており、どれがあの馬車のものなのか、わからなくなったのだ。

「ああ……！」

がっくりと、その場に膝をつくと、ここまで我慢してきた涙が溢れ出した。

「リィアン……ああ、リィアン……！」

自分のせいだと、ウィーナは思った。

耳にした話に衝撃を受け、リィアンが外出したがったのは、当然のことだ。だからこそ、年長者である自分が、彼女を止めなければならなかった。

ただでさえ、綺麗な子供が保護者もなしで出歩くのは危険だというのに——リィアンほど美しい子供なら、どこで誰に目をつけられるか知れないというのに！

気づかなかった……いや、気づかないふりをした、自分のせいだ。愛しい従妹と別れる前に、せめて思い出が欲しいなどと、自分が考えたばかりに、残酷な運命がリィアンに襲いかかる機会を作ってしまったのだ。

屋敷にいる限り、リィアンは安全だったのに——そう、あのひとが保証してくれていたのに……。

と、そこまで考えた時、ウィーナは知らず、そのひとの名を呼んでいた。

美しい、神の化身のような青年のそれを。

「ナーセナーズさまっ！」

声を張り上げ、彼女は何度も呼びつづけた。
「ナーセナーズさまっ！　どうか、リィアンを助けてください！　罰はいくらでも受けます！　なんだってします！　だから、どうかリィアンを……っっ！」
可愛く愛しい、小さな従妹。
彼女が助かるなら、自分は何を差し出しても構わない……そう、たとえ求められるのが命であっても。
リィアンの笑顔以上に、守りたいものなど、自分にはないのだから！
「ナーセナーズさま！」
それは幾度目の呼びかけであったのか――。
突然雷鳴が響き渡り、茜色に染まりかけた、雲ひとつない空に、紫金の光が走った！
「きゃあぁぁっ！」
思わず悲鳴を上げ、目を閉じてしまったウィーナに、次の瞬間、優しい指が、そっと触れる。
「そんなに嘆くものではないよ」
声を聞くまでもなく、ウィーナにはその指が誰のものであるのか、わかっていた。
なぜとも、どうやってとも思わなかった。
ただ、応えてくれたことに安堵しただけだ。

「ナーセナーズさま……」
「可哀想に……こんなに傷だらけになって。君には何の咎もないというのに」
「いいえ、いいえ！」
ウィーナは何度もかぶりを振った。
「わたしのせいです。わたしがリィアンを止めていたら……！」
そこまで口にして、彼女はもっと重要なことを思い出した。
「ナーセナーズさま、どうかリィアンを助けてください！　わたしになど構わず……ああ、いいえ！　お願いです、連れて行ってください！　足手まといになることはわかってます。けれど、いてもたってもいられません。あの子の無事な姿を、この目で見るまでは……だから」
涙と泥で汚れた顔を上げ、ウィーナは必死に頼みこんだ。
「お願いです。罰なら後で、いくらでも受けますから」
そんな彼女を哀れに思ったのか、ナーセナーズが――答えた。
「わかったよ、おいで」
と。
差し出された手を取り、しがみつくようにして立ち上がると、ナーセナーズは軽々と彼女を片手で抱き上げる。刹那、ウィーナは目眩にも似た不思議な感覚に見舞われた。
それは、瞬きひとつほどの時間――次に目を開けた時、彼女は先ほどとは全く違う場所に移

動していることを知った。
しかも、彼の足下に大地はない。人間が豆粒ほどにしか見えない空中に、ウィーナを抱き上げたまま、彼は佇んでいたのだ。
だが、彼女は驚かない。
神の御業に、人間がなんの疑問を抱く必要があろう。
その、内側から輝く紫の宝玉の双眸が示す通り……ナーセナーズは紫属の柱神――この世界の天と地の間たる『空』を支える御柱のひとりなのだから！
神の一員である青年は、空いている方の腕をのばし、眼下に見える建物のひとつを指し示すと短く告げた。
「あの屋敷だ」
ウィーナはこくりとうなずいた。
自分たちを呼ぶ、リィアンの声が聞こえたような気がした――。

◇◇◇

その美しくも恐ろしい光景を、生涯忘れることはないだろう、とウィーナは思った。
だらしなく、神官服を着崩し、豪華な絨毯の上に尻餅をついた格好の男を、ナーセナーズが

冷ややかに見下ろしている。

左腕でウィーナを、右腕でリィアンを抱き上げたまま、彼は男から目を放さず、眼差しと言う名の光矢を、射つづけていた。

そんな彼の姿には感動を、無様な男のそれには残酷な愉悦を覚えながら、ウィーナは無事だった小さな従妹を見遣った。

ナーセナーズが屋敷の屋根を雷で破壊し、この部屋に降り立ったとき、リィアンは鞭を持った男に追い詰められていた。

木綿のドレスは、あちこち引き裂かれており、許し難いことに、半ば露わになった肩には、鞭打たれた痕がついていたのだ！

怒りで、目の前が真っ赤になった。

何と言うことをするのかと、怒鳴りつけたかった。リィアンに振った鞭の十倍、男に返してやりたかった。

そして、その思いは、ナーセナーズも同じだったらしい。神職にありながら、幼い子供を汚らわしい欲望で傷つけようとした——いや、恐らく傷つけ続けてきたに違いない男を、彼は容赦なく弾劾した。

「その罪にまみれた身で、どのような顔をして、神の教えを説こうというのだ？　これまでに、いったいどれほどの無垢な幼子を牙にかけてきた？　到底許すことはできないな」

文字通り、天から降臨したナーセナーズを前に、ふくよかと言うには肉のつきすぎた体を強ばらせ、男はがくがくと震えている。

現人神の怒りを買ったことを、心底恐怖しているであろう男は、必死の面持ちで許しを請うた。

「お許しを……どうか、お許しを！　わたしは、ただ、貧しい身なりをしたその子を、救ってやりたかっただけなのです。誓って、邪な心では――」

見苦しく言い訳を並べようとした男は、しかしナーセナーズの厳しい視線に気づいたのだろう、「ひっ」と呻き、口を噤んだ。

さすがに彼の前で、「神に誓って」とは口に出せないのだろう。

「白々しいことを言うな。この状況を前に、そんな戯言が信じられるとでも？　それとも、わたしがなにも知らぬと思っているのか？　精霊たちが見聞きしたことを、わたしに告げないとでも……？　お前がいかにして、子供たちやその親の口を封じてきたのか、国中に響く声で語ってもいいのだぞ」

さらりと告げられた言葉に、男はますます青くなった。

ナーセナーズには、それができることを知っているのだ。

「お許しを、お許しを！　誓って、二度と、いたしませんから！」

しかし、ナーセナーズは許しの言葉を与えようとはしなかった。

「汚れた口で、誓うなどという言葉を紡ぐな！　第一、お前は二度と、罪を繰り返すことはできぬのだ、誓ってもらう必要もない」

侮蔑に満ちた眼差しで、彼がそう言った瞬間、男の体を紫金の雷が貫いた！

男の絶叫が、響き渡る。

しかし、不思議なことに、男の体は炎に包まれはしなかった。それどころか、服にも絨毯にも、焼け焦げひとつついていない。

ウィーナが不思議に思っていると、優しい顔に戻ったナーセナーズが教えてくれた。

「あれは、魂の罪を焼き尽くす雷。もしあの男が罪が燃え尽きるまで耐えられたら、それ以上罰を与えるつもりはないよ」

では、耐えられなかったら――？

そう思ったものの、ウィーナは訊かなかった。答えはわかりきっていたし、リィアンに取り返しのつかない傷をつけようとした男に、同情する気はさらさらなかったのだ。

「リィアンも、それでいいかい？」

尋ねるナーセナーズの双眸は、すでにいつもの澄んだ緑に戻っていた。

よほどに恐ろしかったのだろう、彼女の顔はまだ青ざめていたが、瞳から恐怖の色は消えていた。

不可視の炎に灼かれ、苦しむ男をちらりと見遣った後、答えた。

「ええ、大兄さま」

うなずく少女は、先ほどのナーセナーズと同じ表情を浮かべていた。

そうすると、ふたりが驚くほどに相似しているのがわかる。

あるいはそれは、外見だけではないのかもしれない、とウィーナは漠然と思った。

そのことは、彼女に悲しい確信をもたらした。

リィアンは、ナーセナーズの元へ行くだろう。

彼の庇護を受け、彼の元で修行し、彼により近しい存在へと変わっていくに違いない。

そうしてようやく、フォークス家の呪いから、彼女は解放されるのだ――喜ばしいことだというのに、素直に喜べないのは、淋しいからだ。

わかって、しまった。

自分には、ふたりと生きる世界を共有することはできないのだ、と――。

◇◇◇

七つの誕生日を迎える前に、リィアンはナーセナーズの元へ引き取られた。

フォークス家にかけられた忌まわしい呪いを、自らの力で払いのける力を身につけるためにである。

別れ際、どこまでも愛らしくいじらしい従妹が口にした約束を思い出す度、ウィーナは泣きたいような笑いたいような、不思議な気分に襲われる。

「お従姉さま、今度こそ、白詰草の咲く野原で、一緒に花冠を編みましょうね」

「ええ、リィアン」

それは、遠い、遠い未来への約束。

けれど、現実にその日が来ることを、ふたりは……信じることを心に誓っていた。

◇◇◇

水が流れるように、時が流れる。

リィアンがフォークス家を離れて、七年目の夏が、訪れようとしていた。

ウィーナは十九歳になっていたが、変わらずフォークス家で従妹を待っていた。

賢く美しく——あくまで人間の範疇内で——気だてもよいと評判の女性に成長したウィーナには、すでにいくつもの縁談が持ち込まれていたが、彼女が首を縦に振ることはなかった。

叔母や叔父は、自分の幸福を第一に考えるように、と事あるごとに、彼女を説得しようとしたが、いずれも彼女の心を変えることはできなかった。

大切な、大切な約束を胸に、ウィーナは『その日』を待ち続ける。

美しく成長した従妹が、この屋敷に戻ってくる日を。

そうして――そうしたら、今度こそふたりの約束を果たすのだ。

初夏、野遊びに出かけて、一面の白詰草の花が咲く中で、互いのために花冠を編み、カミツレの花を摘んで、香草茶を楽しみ、山中の木陰でアマドコロを見つけて、根ごと持ち帰り、庭に移植するのだ。

現実的に考えて、それがどれほど遠い未来のことであろうと、信じている限り、可能性が潰えることはない。

負けず嫌いなところのあるリィアンは、きっと自分より先に花冠を完成させようと、必死に白い小さな花と格闘するだろう。

そして、先に編み上げたなら、少しだけ自慢げな顔をして、「ほうら、お従姉さま」と――。

「お従姉さま！」

……そう、きっと、こんな声で――。

この七年の間で、物思いに耽る癖がついてしまったウィーナは、それが実際に耳を震わせる声であることに、すぐには気づけなかった。

「お従姉さま！」

二度目の声で、ようやくこれが現実だと認識した彼女は、期待と、それが裏切られることを恐れる気持ちの双方に、心を揺らしながら、声のした方を振り返った。

そうして――湧き上がる歓喜のまま、彼女は駆け出す。
七年ぶりに会う、従妹へと。
想像していた以上に美しく育った従妹の手には、白い花冠――。
「ほうら、お従姉さま、わたしの勝ちよ！」
誇らしげに叫ぶ従妹を、ウィーナは力一杯抱きしめた。
それは初夏の蒼穹（そうきゅう）の下――。
ふたりの約束が果たされた瞬間だった。

ある晩秋の日暮れ刻

怒濤の勢いで、ウィリオナ・コーエンスの作品を一気読みしたナルレイシアは、読了と同時に、ほう、と息をついた。

「……いい」

余韻を噛みしめながら呟くと、ウィリオナが身を乗り出して「本当ですか!?」と問いかけてきた。

「本当に、本当に、そう思います!?」

「もちろんです！」

こぶしを握りしめて、ナルレイシアは即答した。

「いいです、これ、絶対にいいです！　中編じゃもったいないって思うぐらい！　ああ、でも、この淡々とした文章は、中編ならではって感じなんですよね」

彼女の感想に、ウィリオナはますます身を乗り出してきた。

「わかります!?　そうなんです、わかってくれます!?」

「わかりますとも！」

ナルレイシアは力強くうなずいた。

「この文章のおかげで、ナーセナーズさまの恐ろしい一面が引き立つんです。お美しくて、恐ろしくて……」

うっとりと、作中に出てきた『ナーセナーズさま』賛美に走っていたナルレイシアは、ふと引っかかるものを感じた。

（お美しくて、一面恐ろしくもあって……って、これ……）

なんだか、よーく似ているひとを、知っている気がする。

（ううん、きっと気のせいよね）

自分にそう言い聞かせ、彼女は顔を上げた。

「これ、雑誌に掲載するといいかもしれません。読者の反応次第では、続編をって話にもなるだろうし、そうしたら一冊にまとめられるでしょう？　というか、是非、本になったのを読みたいんで、そうして下さい！　行きつけの工房に、出版関係にツテのある職人さんがいるんで、紹介してくれるよう、わたし、頼んでみますから！」

思いがけない申し出だったのだろう、ウィリオナが大きく目を瞠った。

「そんな……読んで感想をいただけただけで、ありがたいと思ってますのに」

会ったばかりのひとに、そこまでは――と言いかけるウィリオナに、ナルレイシアはぶんぶ

んとかぶりを振って力説した。
「なにを言うんです！　袖振り合うも他生の縁、と言うじゃありませんか。本に目のないわたしと、小説を書かれるウィリオナさんが出会ったんです、今生の縁もありまくるに違いありません！」
是非とも彼女の次回作も読ませてもらいたいと思っているナルレイシアは、常になく強引にウィリオナを口説きまくった。
「ね!?　そうしましょう！　今日はもう、遅くなってしまったから、明日にでも、ご一緒しましょう？　そう言えば、今夜はどうなさるんですか、ガライラからいらしたということは、宿を取ってらっしゃる？　もし、まだでしたら、食事も美味しくて警備もしっかりしている宿を一軒知ってますから、ご紹介しましょうか？」
縁を強化する気満々なナルレイシアの提案に、ウィリオナがそっと目尻を拭った。
「ウィリオナさん？」
何事かと慌てたナルレイシアに、褐色の髪の女性は、「嬉しくて」とつぶやいた。
「故郷では、家族も友人も、止めろと言うばかりで……それが、ディエーンでこんな親切な方と知り合うことができるなんて……」
周囲から、自分の好きなものを認められない辛さは、ナルレイシアも知っていた。
故郷のフィレアは、女性に必要以上の教育は必要ないという気風が強い土地で、知識欲の

塊のようなナルレイシアは、生まれながらの不幸体質も手伝い、周囲からは敬遠されることが多かった。

ウィリオナも、これまで周囲からの無言の圧力に苦しんできたのだろう。

そう思うと、ますます他人とは思えなくなった。

ナルレイシアは、ウィリオナの手を握りしめた。

「大丈夫ですよ、ウィリオナさん。こんな素敵な作品なんですもの、これを読んだら、ご家族の方だって、もう止めろとは仰らないはずです」

「そうでしょうか……」

「そうに決まってます！」

ナルレイシアが力強く断言した時のことだ。

突然、応接室の扉が、ノックもなしに開かれた。

（お客様がいらっしゃるのに、ノックもしないだなんて、さてはガスカールね!?）

怒りの形相で、そちらを振り返った彼女は、しかしそこに立っていた意外な人物の姿に驚いた。

「スカーさん……？」

大慌てで駆けつけてきたのがもろわかりの、乱れた格好のスカルトードは、ぜいぜいと肩で息をついていた。

そして、ナルレイシアを無視して——というか、目に入っていなかったのだろう——ウィリオナにずかずかと歩み寄ると、強引にその腕を摑んだ。

「ウィリオナ！　あなたというひとは、こんなところで何をやってるんですか!?」

声には、かなり強い怒気が宿っていた。

（ひえー、スカーさん、けっこう本気で怒ってる……？）

怒ると怖いことを知るナルレイシアが、どうしたらいいのかと頭を悩ませているのをよそに、スカルトードはウィリオナを引きずるようにして、部屋から連れ出そうとした。

「い、痛……っ！　ちょっと……」

ウィリオナが顔を顰めて抗議するが、いつもは女性に優しいはずの彼は、どんどん歩き続けるばかり。

「スカーさん……」

ナルレイシアの声も、完全無視だ。

しかし、彼も完全に頭に血が上っているわけではなかったのだろう、扉のところで振り向くと、小さく頭を下げた。

「失礼しました、ヴィル・ダカール。後日、謝罪にまいります」

そのまま、返事も待たずに、彼はウィリオナを連れて出て行ってしまった。

取り残された格好のナルレイシアは、ただただ唖然としていた。

「……なんだったの？」

自問しても、答えはない。

ただ、あのふたりが知り合い――それもかなり親しい間柄であることは間違いなさそうだった。

追いかけて、仲裁に入ったほうがよかったろうか、とも一瞬思ったが、止めておくことにした。身内の問題に、事情も知らぬ部外者が立ち入って、いいことはないからだ。

それに、彼女には、ほかに気になることがあった。

「やっぱり」

テーブルの上に、置き去りにされた原稿の束を見つめながら、ナルレイシアは確信とともにうなずいた。

「ナーセナーズさまのモデルは、ネイスリーズさまってことよね」

そうして、彼女はもう一度、その束を手に取った。

今度はゆっくりじっくり、味わいながら熟読するためだった――。

一方、ロスタロイドにおけるフォスカリク家の屋敷に戻ったスカルトードは、強引に連れて

きたウィリオナに、険しい顔で詰め寄っていた。
「一体全体、どういうつもりなんですか、あなたは!? ガライラだけでは飽きたらず、今度はディエーンにまで、一族の恥を広めるつもりなんですか!?」
酷い言い種だが、慣れていると思しきウィリオナは、臆する様子もなく、頬を膨らませた。
「ひとの作品を恥扱いしないでちょうだい。だいたい、みんな神経質すぎるのよ、ちょっと、実在の人物をモデルにしたってだけで、出版拒否だなんて。名前だって、ちゃんと変えているのに」
悪びれないウィリオナの態度に、スカルトードは眉間にしわを寄せた。
「……なにが、ちゃんと変えている、ですか。ほんの少し変えただけで、すぐに誰かわかるものばかりじゃありませんか！ そうして書くのは、あなたのお眼鏡にかなった顔のいい男性同士の恋愛遊戯話！ 大公殿下や大公弟殿下までモデルに使って……出版社が断るのは当たり前でしょうがっ！」
「なによ、偉そうに……。わたしだって、そこのところは考えたわよ、自費出版ならともかく、公に発表するなら、もっと神秘と幻想のヴェールをかけるべきだってね。そういう意味では、今回の作品は成功したと思うわ。ナルレイシアさんも、気に入ってくれたみたいだし?」
本の虫同盟の、かけがえのない同志の名を挙げられ、スカルトードはさっ、と顔色を変え

た。

「な、なにを……ヴィル・ダカールに……」

ファティ・リンシャからの連絡を受けてすぐ、魔法屋敷に駆けつけたのは、万が一にも、ウィリオナが余計なことを喋らない内に回収するためだった。

（まさか……手遅れだったのか!?）

冷や汗が、背筋を流れる——スカルトードには、友人たちには絶対に知られたくない過去があるのだ。

形勢が逆転したと見るや、ウィリオナはにんまりと笑った。

「大丈夫よ。わたし、なにも言ってないから……まだ。昔のように、お願いしてくれるなら、これからも言わないと約束するけど？　ね、スカルトード・ナネリーアン？」

「あ、あなたというひとは……！」

怒りと羞恥に震えながら、スカルトードは呻いた。

今回ウィリオナがロスタロイドに持ち込んだ小説は、幼いころの彼女とスカルトードをモデルにしたものだった。

ほとんどは実話だが、いくつか決定的に違う点がある。その中でも最大の相違点が、『小さな従妹』は、実は『女の子の格好をさせられた小さな従弟』だったということだ。

つまりラストシーンは完全な創作である。

一族に伝わる因縁も、少し違う。

フォスカリク家では、人間離れして美しく生まれついた『男児』は、ほぼ例外なく『人間の道を外れた』人生を送ると言われているのだ。

人間同士のつきあいより、精霊との交感を好み、世捨て人として秘境で隠遁生活をする——程度ならまだましな方で、精霊の溺愛をいいことに、法も倫理も道徳も無視して、好き勝手に生きた者。その美貌に群がる信奉者たちを玩具扱いして、次々に破滅させては遊んだという性格破綻者、等々。

そんななか、スカルトードが生まれたものだから、両親は真っ青になり、柱神であるネイスリーズに相談を持ちかけた。そうして彼の助言を受け、七つになるまで、スカルトードは自分が男児であることを知らされず、少女として育てられたのだ……。

当時のことを知るウィリオナには、そういうわけで、どうしても頭が上がらない。

また、ウィリオナ自身も、そのことを熟知しているものだから、タチが悪い。

「ほらほら、どうしたのー？　ああ、ナルレイシアさんには、包み隠さず、真実の自分を知っていてもらいたいのかしらー？」

それなら、喜んで協力してあげるけどー？

（くっ、この悪魔……）

ぶるぶるとこぶしを震わせながら、スカルトードは屈辱の敗北宣言を口にした。

「……お願いします、お従姉さま」
「もちろんよ、可愛いリィアンの頼みですもの」
勝ち誇って答えるウィリオナを、スカルトードはこの時、心底殴りたい、と思った。
もちろん、できはしないのだが。
そうして、彼の幼少時の恥部を知り尽くしている悪魔のような従姉は、最後にとどめとばかりに太い釘を刺してくれた。
「そうそう。言うまでもないことだけど、今回の話のことで、妙な横槍入れたりしたら承知しませんからね。そんなことをしたら、ナルレイシアさんに『変態神官の毒牙から救われたリィアンが、ナーセナーズの腕に飛び込む時、〝大兄さま！　わたし、お従姉さまと一緒に、大兄さまのお嫁さんになります！〟って台詞を加えようかと思うのだけど、どう思います？』と相談してあげますからねー」
スカルトードはその場に穴がないことを……いや、穴を掘る道具がないことを、心から呪った。
（ひ、ひとが一番忘れたいと思っている恥の記憶を……！）
握りしめたこぶしの震えは激しくなるばかり――。
スカルトードは、忍耐を試されていた。

後日――。

ナルレイシアの勘のとおり、雑誌掲載された『それは初夏の蒼穹の下』は好評を博し、すぐに続編の掲載が決まった。

「ああ、楽しみだわー♡　今度は、成長したリィアンを主人公にした話になるんですって。やっぱり、ナーセナーズさまとのロマンスかしらん？　そうなると、挿絵は厳選しないといけませんよね」

うきうき、わくわくと顔に書いて、ナルレイシアがはしゃいだ声を上げる隣で――。

スカルトードは必死に、頭を抱えこみ、その場にしゃがみこんでしまいたい衝動と闘っていた。

（頼むから、勘弁してほしい……）

彼の心からの願いは、しかし天に届くことはなかった。

これなら、妄想爆発話のモデルにされていたほうがまだマシだったかもしれない――と、彼が考えたかどうかは……定かではない。

あとがき

こんにちは、前田珠子です。

前回無事一人目の柱神（ちゅうしん）選びを終えたナルレイシアですが、今回はお役目とは無縁の番外編集となりました『罠は、蜜の味』をお届けいたします。

さて、『罠は、蜜の味』ですが、執筆中、この正式タイトルを口にした覚えはほとんどありません。なぜなら、決まるのが遅かったのと、コンセプトが『馬鹿君（ばかぎみ）（若君に引っかけてあります、一応念のため）に、目に物見せてやる話』だったものですから、担当さんとの電話やメールではいつも「馬鹿君の話」で済ませていたためです。

ナルレイシアが故郷にいられなくなった元凶の馬鹿君については、以前から「いずれ一発、ガツンと叩かないと」と思っていたので、今回書けて楽しかったです。ナルレイシアを着飾らせるという念願も果たせましたしね（笑）。

しかし、周囲に木石呼ばわり（ぼくせきよばわり）されているガスカールには、今回の展開は荷が重かったようで、全然気の利（き）いたことを言ってくれないので苦労させられました。口で振られるタイプです。

もう一本の『それは初夏の蒼穹の下』についてですが、これのコンセプトは……あるけどここでは書けません。ネタバレになってしまう。

作中小説という、私的には珍しい構成にしたのですが……泣かされました。作品によって文体が多少変わるのは、書いていて気にならないのですが、なまじ最初のシーンを、ナルレイシアの視点で書いたものですから……ギャップが。美しくすっきりまとめたい話に、彼女は鬼門かもしれません。「この場面ナルレイシアなら、（うひゃー、きれーい！　ほんとに人間!?）って思うよね……」とか考えてしまって。どのシーンかは、どうぞ本文を読んで探して下さい。

今回、枚数の関係で書かなかった番外編ネタが、実はいくつかあります。お師匠さま絡みの話とか、ナルレイシアが本絡みで怒り爆発する話とか……いずれまた、こういう形でお届けできればいいな、と思っております。

挿絵の明咲トウルさま、関係者の皆様には、今回もお世話になりました。どうもありがとうございました。

読者の皆様には、是非是非今回の作品についての感想をお寄せ下さるよう、お願いします。

それでは、また次の本でお目にかかれることを願いつつ――。

平成十九年　初夏

前田珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



天を支える者
罠は、蜜の味

COBALT-SERIES

2007年6月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子
発行者　磯田憲治
発行所　株式会社集英社

〒101—8050
東京都千代田区一ツ橋2—5—10
(3230) 6268 (編集部)
電話　東京 (3230) 6393 (販売部)
(3230) 6080 (読者係)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2007　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN978-4-08-601023-8 C0193

〈好評発売中〉
コバルト文庫

本好き少女の波乱万丈ファンタジー！
前田珠子〈天を支える者〉シリーズ
イラスト／明咲トウル

天を支える者
天を支える者2
天を支える者3
天を支える者4
天を支える者 古懇唄（いにしえこいうた）
天を支える者 古懇唄2（いにしえこいうた）
天を支える者 古懇唄3（いにしえこいうた）
天を支える者 古懇唄4（いにしえこいうた）
天を支える者 古懇唄5（いにしえこいうた）



〈好評発売中〉
コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。

前田珠子 〈聖石の使徒〉シリーズ

イラスト／山本鳥尾

聖石の使徒
其は焔をまとう者

聖石の使徒
其は力を放つ者

聖石の使徒
其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒
揺籃の瞳

聖石の使徒
蒼の組木箱



〈好評発売中〉 コバルト文庫

美少年コンビが暗躍する魔性を斬る!

前田珠子 〈魅魍暗躍譚〉シリーズ

イラスト／田村由美

魅魍暗躍譚

碧眼の少年(前編)(後編)

髪と瞳の色を奪った魔性を探す甲斐。途中、行き倒れの志摩を助けたことから、没落した名家の当主・隠岐と知り合って!?



月乃守家の姫君・遠江(とおとうみ)は美少女だが相当の猫かぶり。偶然異母兄の甲斐と再会を果たすが、魔性の陰謀が彼女に迫り…!?

魅魍暗躍譚

月読見の乙女(前編)(後編)

〈好評発売中〉
コバルト文庫

選ばれし少女よ、魔性に立ち向かえ！

前田珠子 〈破妖の剣〉シリーズ

イラスト／廈門 潤



漆黒の魔性
白焔の罠
柘榴の影
紫紺の糸（前編）（後編）
翡翠の夢1～5
鬱金の暁闇1～3
女妖の街 破妖の剣 外伝①
ささやきの行方 破妖の剣 外伝②
忘れえぬ夏 破妖の剣 外伝③
時の螺旋 破妖の剣 外伝④
魂が、引きよせる 破妖の剣 外伝⑤
呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣 外伝⑥

〈好評発売中〉 コバルト文庫

素直になれる魔法をください。

伯爵と妖精

花嫁修業は薔薇迷宮で

谷　瑞恵
イラスト／高星麻子



伯爵エドガーとの結婚を決めたリディア。花嫁修業をするためにとある貴婦人宅へむかうが、なぜかメイドにさせられてしまい…!?

伯爵と妖精シリーズ・好評既刊

あいつは優雅な大悪党
あまい罠には気をつけて
プロポーズはお手やわらかに
恋人は幽霊
呪いのダイヤに愛をこめて
取り換えられたプリンセス
涙の秘密をおしえて
駆け落ちは月夜を待って
女神に捧ぐ鎮魂歌
ロンドン橋に星は灯る

〈好評発売中〉
コバルト文庫

2006年度
ノベル大賞受賞作家
デビュー!!

性格がまっったく違う男子高校生
2人の異世界冒険ファンタジー!

空色のイシュラ

やさしい獣と月のない国

木崎菜菜恵
イラスト／ホームラン・拳



幼なじみの天才少年・結斗のせいで、昔から苦労の絶えない修。高一の夏休み、「異世界に行ってみたい」という結斗の願いどおりにふしぎな世界へ迷い込んでしまう二人だが!?

〈好評発売中〉 コバルト文庫

謎の男ラ・コット伯爵の若き日の姿。

王宮ロマンス革命

夢恋う少年に響く都の歌

藤原眞莉
イラスト／鳴海ゆき



「思い出」という名前で仕事をとる男娼の少年ミシェル。「うそつき女」と呼ばれる少女との衝撃的出逢いが、彼の謎を明らかにする…!?

〈王宮ロマンス革命〉シリーズ・好評既刊

王宮ロマンス革命 姫君は自由に恋する1～3
王宮ロマンス革命 退屈姫の不埒な日常
王宮ロマンス革命 迷都にさまよう姫君

〈好評発売中〉 コバルト文庫

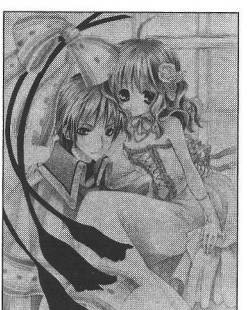
お前のいる場所が、俺の帰る場所。

鏡のお城のミミ

はるかな王国に寄せて

倉世　春

イラスト／水谷悠珠（ゆず）



クロティルドを守るため、弟王子リヒャルトと手を組んだエリックとミミ。カンタン、マルグリットとの戦いと波乱の恋の結末は!?

〈鏡のお城のミミ〉シリーズ・好評既刊

鏡のお城のミミ～カンタン王国の大冒険～
山賊たちにご用心！
幸せの村へようこそ
さまよう恋のメヌエット
姫将軍と黄金の王子
やさしい花嫁のすすめ
子供たちの夢と目覚め
異国の素敵な空のした
凍える夜に咲く花は
陰の王者と陽の踊り
乙女はゆりかごを揺らして
遠いひとへの贈りもの
小さな恋の種まいて
愛される道のゆくえ

コバルト文庫 雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」

募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の新しい書き手の方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人賞の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、自分の才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!

〈大賞入選作〉
正賞の楯と副賞100万円(税込)

〈佳作入選作〉
正賞の楯と副賞50万円(税込)

ノベル大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙95～105枚。
【締切】 毎年7月10日（当日消印有効）
【応募資格】 男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt12月号誌上（および12月刊の文庫のチラシ誌上）。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10（株）集英社
コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる「ノベル大賞・読者大賞」（大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円）の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙250～350枚。
【締切】 毎年1月10日（当日消印有効）
【応募資格】 男女・年齢・プロ・アマを問いません。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt8月号誌上（および8月刊の文庫のチラシ誌上）。大賞入選作はコバルト文庫で出版(その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします)。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10（株）集英社
コバルト編集部「ロマン大賞」係

★応募に関するくわしい要項は隔月刊誌Cobalt（1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売）をごらんください。

9784086010238

ISBN978-4-08-601023-8

C0193 ¥419E

定価本体419円＋税

1920193004199



コバルト文庫